福 岡 市

板付周辺遺跡調査報告書第23集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第716集

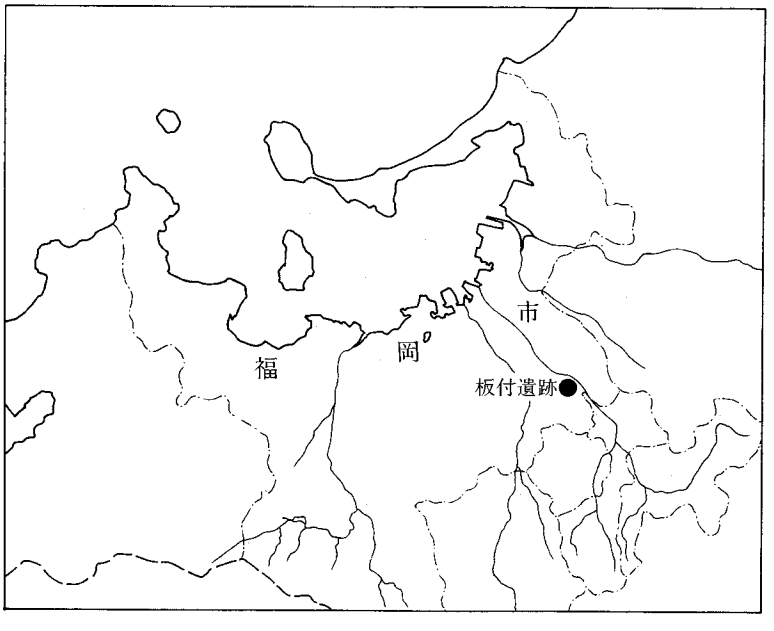
2 0 0 2

福岡市教育委員会

福 岡 市

板付周辺遺跡調査報告書第23集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第716集



2 0 0 2

福岡市教育委員会

序

福岡市は古来より海外交流の拠点として栄えてきました。水稲農耕の最も早い伝播、定着を示す最古の農村遺跡の一つである板付遺跡、古墳時代後期に設置されたと考えられる那ノ津官家、古代の迎賓館である大宰府鴻臚館、貿易都市、博多、元帝国の侵略にそなえ、博多湾の海岸線20㎞にわたって築造された元寇防塁など、数多くの歴史遺産があります。

白砂青松の緑豊かな自然環境に恵まれた福岡市でありますが、アジアの拠点都市を目指して都市づくりが進んでいるため、変貌著しく、各種の開発事業によって失われてゆく埋蔵文化財も少なくありません。これら失われゆく文化財について、福岡市教育委員会は、保存と保護措置に鋭意努めているところであります。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正６年、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年からは日本考古学協会によって発掘調査が開始され、以後、明治大学、九州大学、福岡県教育委員会が発掘調査を実施し、現在、福岡市教育委員会が引き継いで発掘調査を実施しています。この間、数々の発見がありました。環濠集落・最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国の史跡に指定され、平成７年度には指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として広く市民に親しまれているところです。

本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。本書に収録したのは住宅建設に伴う、F－６a調査区の弥生時代前期の貯蔵穴と中世の地下式横穴の報告です。福岡の歴史を解明するには欠かせない資料を提供しています。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘・整理作業員等、多くの方々のご協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成14年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　生　田　征　生

例　言

1．本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和52・53年度に実施した福岡市博多区に所在する板付遺跡および周辺遺跡の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。本書に収録したのは、F―6a調査区の報告である。

2．本報告書に収録した発掘調査は、文化課埋蔵文化財係の山崎純男、文化課板付遺跡調査事務所の沢　皇臣、山口譲治が担当した。

3．本報告書に収録した写真の撮影には山崎、沢、山口の他、原　俊一、前田義人がこれにあたった。

4．本報告書に使用した遺構の図面の作成には山崎、沢、山口、原、前田、森瀬圭子があたり、遺物実測は山崎があたり、図の製図は山崎がこれにあたった。

5．本書に使用した遺構の実測図は現場事務所が水害により侵水し、紛失したため、全体図からおこしたものであり、詳細を知ることができなかった。

6．本報告書の図面は北はすべて磁北である。

7．本報告書の執筆は山崎がおこなった。

8．本報告書の編集は山崎がおこなった。

調査番号	7839	遺跡略号	ITZ27	調査面積	328㎡
調査期間	昭和53年4月6日～昭和53年9月15日				

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……4
　３．板付台地の弥生時代前期の集落……5
第２章　F－６a区の調査……7
　１．調査区の位置……7
　２．遺構の分布……9
　３．弥生時代前期の貯蔵穴……9
　　(1)　第１号竪穴……9
　　(2)　第２号竪穴……13
　　(3)　第３号竪穴……15
　　(4)　第５号竪穴……16
　　(5)　第６号竪穴……17
　　(6)　第10号竪穴……20
　　(7)　第11号竪穴……23
　　(8)　第12号竪穴……28
　　(9)　第13号竪穴……33
　　(10)　第16号竪穴……41
　　(11)　第17号竪穴……49
　　(12)　第18号竪穴……50
　　(13)　第21号竪穴……51
　４．弥生時代中期の住居址……53
　　(1)　住居址……53
　　(2)　出土遺物……54
　５．弥生時代中期の竪穴……55
　　(1)　第９号竪穴……55
　　(2)　第14号竪穴……57
　　(3)　第15号竪穴……59
　６．中世の遺構……61
　　(1)　地下式横穴……61
　　(2)　その他の遺構……62
第３章　まとめ……63
　１．弥生時代の遺構について……63
　２．地下式横穴について……64

挿　図　目　次

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区……3
Fig. 2　板付遺跡（中央・北台地）全図……6
Fig. 3　F－6a区の位置……7
Fig. 4　F－6a区遺構全体図……8
Fig. 5　第1・3号竪穴平面図……10
Fig. 6　第1号竪穴出土遺物実測図……11
Fig. 7　第2号竪穴平面図……14
Fig. 8　第2号竪穴出土遺物実測図……14
Fig. 9　第5号竪穴平面図……16
Fig. 10　第5号竪穴出土遺物実測図……17
Fig. 11　第6号竪穴平面図……17
Fig. 12　第6号竪穴出土遺物実測図……19
Fig. 13　第10号竪穴平面図……20
Fig. 14　第10号竪穴出土遺物実測図……21
Fig .15　第11号竪穴平面図……23
Fig. 16　第11号竪穴出土遺物実測図Ⅰ……25
Fig. 17　第11号竪穴出土遺物実測図Ⅱ……27
Fig. 18　第12号竪穴実測図……29
Fig. 19　第12号竪穴出土遺物実測図……31
Fig. 20　第13・17号竪穴平面図……33
Fig. 21　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅰ……35
Fig. 22　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅱ……38
Fig. 23　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅲ……41
Fig. 24　第16号竪穴平面図……42
Fig. 25　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅰ……43
Fig. 26　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅱ……45
Fig. 27　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅲ……47
Fig. 28　第17号竪穴出土遺物実測図……49
Fig. 29　第18号竪穴平面図……50
Fig. 30　第18号竪穴出土遺物実測図……50
Fig. 31　第21号竪穴平面図……51
Fig. 32　第21号竪穴出土遺物実測図……52
Fig. 33　竪穴住居址平面図……54
Fig. 34　竪穴住居址柱穴出土遺物実測図……55
Fig. 35　第9号竪穴平面図……55
Fig. 36　第9号竪穴出土遺物実測図……56
Fig. 37　第14号竪穴平面図……57

Fig. 38　第14号竪穴出土遺物実測図Ⅰ……58
Fig. 39　第14号竪穴出土遺物実測図Ⅱ……59
Fig. 40　第15号竪穴平面図……59
Fig. 41　第15号竪穴出土遺物実測図……60
Fig. 42　地下式横穴平面図……61
Fig. 43　地下式横穴出土遺物実測図……62

図　版　目　次

PL. 1 (1) F－6a区全景（北より）
(2) F－6a区全景（西より）
PL. 2 (1) 第2号竪穴
(2) 第2号竪穴横断面東側
(3) 第2号竪穴横断面西側
PL. 3 (1) 第2号竪穴縦断面南側
(2) 第2号竪穴縦断面北側
(3) 第12号竪穴
PL. 4 (1) 第5号竪穴（平面）
(2) 第5号竪穴（北より）
(3) 第5号竪穴（北より近景）
PL. 5 (1) 第9号竪穴（平面）
(2) 第9号竪穴横断面
(3) 第1・3号竪穴断面
PL. 6 (1) 第11号竪穴
(2) 第6号竪穴横断面
(3) 第15号竪穴
PL. 7 (1) 第21号竪穴断面
(2) 第7号竪穴
(3) 第16号竪穴断面
PL. 8 (1) 第14号竪穴全景
(2) 第14号竪穴縦断面南側
(3) 第14号竪穴縦断面北側
PL. 9 (1) 柱穴内遺物出土状況
(2) 第21号竪穴
(3) 第36・37号竪穴
PL. 10 (1) 地下式横穴（平面）
(2) 地下式横穴（断面）
(3) 地下式横穴（玄室から竪坑をのぞむ）

PL. 11 (1) 地下式横穴横断面
(2) 地下式横穴発掘状況
(3) 銅銭出土状況
PL. 12 (1) 第11号竪穴遺物出土状況
(2) 第11号竪穴遺物出土状況近景Ⅰ
(3) 第11号竪穴遺物出土状況近景Ⅱ
PL. 13 (1) 第12号竪穴遺物出土状況
(2) 第12号竪穴遺物出土状況
(3) 第12号竪穴遺物出土状況
PL. 14 (1) 第５号竪穴遺物出土状況
(2) 第５号竪穴遺物出土状況
(3) 第16号竪穴遺物出土状況
(4) 第12号竪穴遺物出土状況
PL. 15 (1) 第14号竪穴遺物出土状況
(2) 第14号竪穴遺物出土状況近景
(3) 第14号竪穴遺物出土状況近景
PL. 16 (1) 発掘風景Ⅰ
(2) 発掘風景Ⅱ
(3) 発掘風景Ⅲ

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置する。福岡市博多区板付２丁目から５丁目にかけての約80万㎡に拡がる大規模な遺跡である。遺跡は弥生時代を中心に展開しているが、一部後期旧石器時代（ナイフ形石器、台形石器、細石器）、縄文時代（早期・押型文土器）の遺物がみられる。弥生時代以降は、現在まで連綿と続く複合遺跡である。遺跡の展開については、福岡市埋蔵文化財調査報告書第680集『板付周辺遺跡調査報告書第22集』2001年の第１章第３節において詳述しているので、参照されたい。

板付台地に遺跡が存在するのは古くから知られていた。江戸時代の終り頃、遺跡の中心部にあたる中央台地に位置する通津寺境内から広形銅矛５口が発見されたことが、『通津寺過去帳』に記録されている。大正５年には、通津寺の南東にあったと考えられる円墳状の高まりが土取り工事にあい、甕棺群が出土した。甕棺は前期末の金海式甕棺とみられ、数基の甕棺から細形銅剣・細形銅矛各３口が出土し、当時、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎博士が学界に報告されている。（『考古学雑誌』第７巻７号　1917年）はじめて遺跡の重要性が認識された訳である。この時出土した銅剣・銅矛等の青銅器は地元から帝室博物館に提出され、現在も東京国立博物館に保管されている。しかし、中山氏報文の銅剣・銅矛各３口より細形銅剣１口が増え、計７口となっている。この間の事情の詳細は明らかでないが、元々７口が出土した可能性が強い。これらの甕棺群が発見された円墳状の高まりの頂上部には、中山氏報文によれば板状の大石が建てられていたとされ、この大石の現物は史跡地内の一隅に現存する。円墳状の高まりは、現在の知見から、弥生時代前期末の墳丘墓であった可能性が極めて高い。

第２次世界大戦後、すぐに、地元の考古学研究者の中原志外顕氏によって通津寺境内近くの畑地の深耕に伴い、縄文時代終末期とみられていた刻目突帯文土器と弥生時代前期土器（板付Ⅰ式土器）が共伴状態で採集された。これを受けて、昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。発掘調査は、４ケ年にわたって実施され、その成果は当初の目的を充分果たすものであった。この時の成果は、集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかになり、環濠内には多数の袋状竪穴（貯蔵穴）が検出された。濠や貯蔵穴の埋土中からは炭化米をはじめ、土器の器面上に残された籾圧痕、稲の収穫具と考えられる石庖丁の存在から、稲作農耕の存在が明らかになり、その他、樹木の伐採具である太形蛤刃石斧、加工具である抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧あるいは武器である磨製石剣、磨製石鏃等の大陸に起源をもつ、いわゆる大陸系磨製石器の存在も明らかになった。さらに、これらの遺物が縄文時代終末期の刻目突帯文土器（夜臼式土器）と弥生時代初頭の板付Ⅰ式土器の共伴期に属することが明確になり、日本列島における最古の農村の姿を具体的にうかびあがらせるのに成功したのである。また、弥生時代稲作農耕の故地が、土器や大陸系磨製石器の形態等から、朝鮮半島に求めることができるようになってきた。日本列島の歴史の中で、自然に依拠した縄文時代の生業から、自然を開拓し、生産する弥生時代に移行する歴史的な大変革の過程を明らかにした重要な成果が得られたのである。

昭和40年代後半にはじまる日本列島改造による開発の急増は、板付遺跡やその周辺地域においても

例外ではなかった。環濠集落をのせる中位段丘の北側と西側の広大な水田地帯（沖積地）に、市営・県営住宅団地の建設が進められたのをはじめ、遺跡周辺部でも宅地造成等の開発が進められた。これらの開発事業に伴う緊急調査は福岡市教育委員会が担当して実施してきた。これら緊急調査の成果も重要である。環濠集落をのせる中位段丘Ⅱ面の西側沖積地では、低位段丘上の一部に縄文時代早期の押型文土器期の包含層があり、その上位に弥生時代以降、現代までの水田関連遺構が確認され、当時としては九州では数少ない木製農具をはじめとする木製品が多量に出土した。木製品の内容は、弥生時代の農村の姿、道具類を如実に示すものであった。加えて、遺跡の範囲がさらに拡大することが判明し、板付遺跡の重要性はますます高まることとなった。

昭和61年６月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落部分を含む遺跡の中心部とそれに隣接した西側沖積地の水田遺構部分の計27,796㎡が国の史跡として指定された。昭和63年からは、遺跡の保存・整備の基本計画を策定するために、「板付遺跡調査整備委員会」を発足させ、６名の専門の先生方と文化庁・福岡県教育委員会を交えて、史跡整備のための審議・検討を加えてきた。遺構の確認調査を経て、整備事業の基本構想・基本計画等を検討した後、平成元年に文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場）に採択され、整備事業に着手、平成７年に完成。現在、市民に広く公開しているところである。

板付遺跡および周辺の遺跡は、その歴史的重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については、国庫補助金を受けて緊急調査を実施してきている。本報告書に収録した昭和52・53年の調査地区は、史跡指定地内から、史跡保存のために指定地外への転出に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、指定地外の遺跡を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。

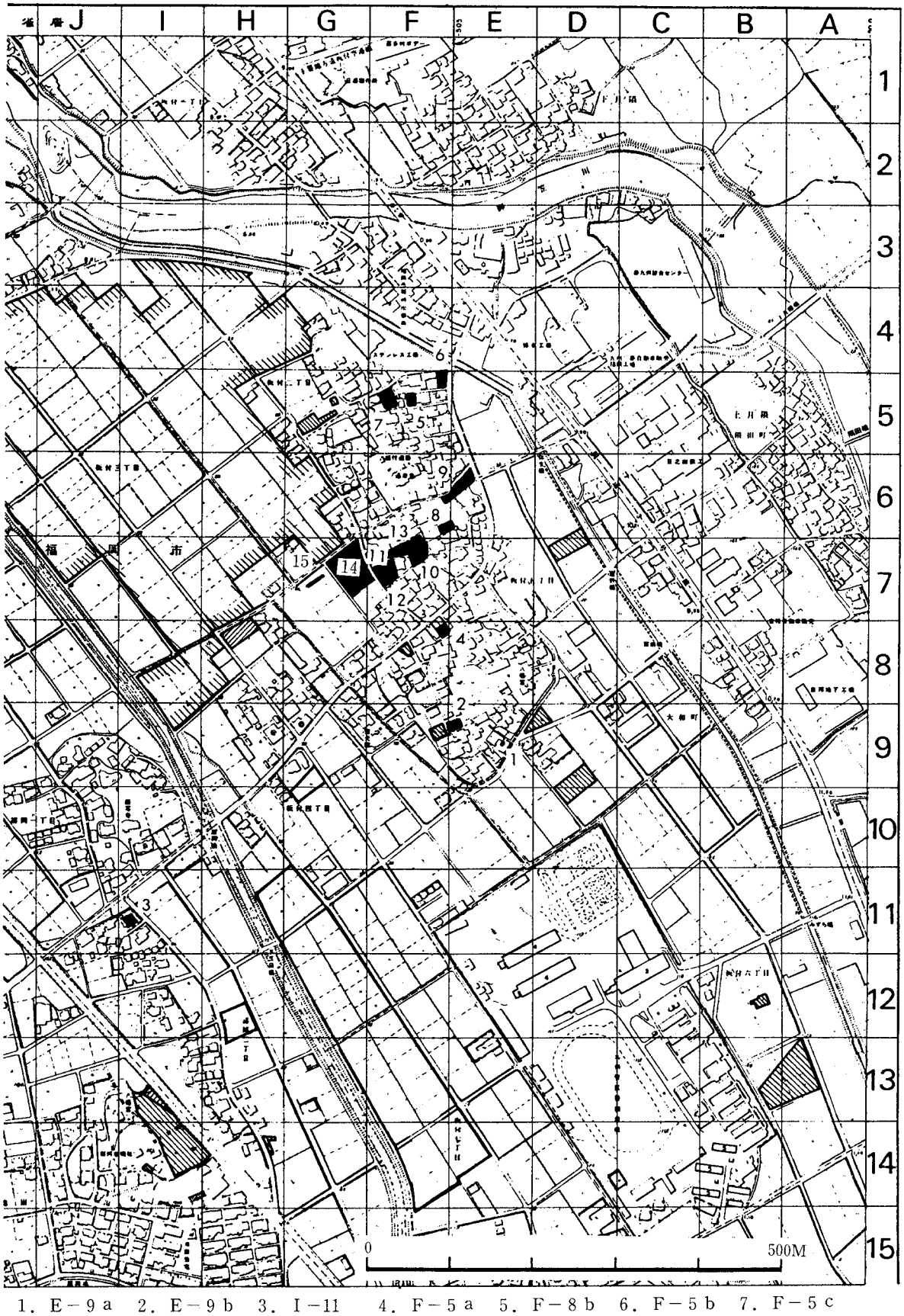
昭和52・53年度の発掘調査は指定地周辺の15地区を対象として実施した。本報告書に収録したのは15地区の一つであるF－６a調査区の１ケ所である。F－６a調査区は指定地の環濠の南側に位置している。この地域は集落の中でも重要な場所で、貯蔵穴が群集している。調査区は約328㎡とせまいが、遺構の存在は濃厚である。検出した遺構は、前期初頭の貯蔵穴、中期の土坑、柱穴、中世の地下式横穴等である。また、遺構検出はできないが、後期旧石器時代の遺物もみられる。

これまで発刊した調査概報、報告書は以下の如くである。昭和52・53年度の全調査区の概報は、『福岡市板付周辺遺跡調査概報（板付周辺遺構調査報告（５）1977～８年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集、1979年として発刊している。報告書としては、F－５a、F－５b、F-６の３ケ所の調査区については、『板付周辺遺跡調査報告書第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集、1997年。F－５c区、F－７a区、F－７b区、F－７c区の４ケ所の調査区については、『板付周辺遺跡調査報告書第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集、1998年。G－７a区、G－７b区、G－７c区、F－８c区の４ケ所の調査区の遺構については、『板付周辺遺跡調査報告書第20集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集　1999年。G－７a区、G－７b区の２ケ所の調査区の出土遺物については、『板付周辺遺跡調査報告書第21集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集、2000年、G－７c区、F－８b区の２ケ所の調査区については、『板付周辺遺跡調査報告書第22集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第680集、2001年を刊行している。

本報告書はF－６a調査区の正式報告書である。これをもって、昭和52・53年度の板付遺跡の調査についての報告書は終了する。

なお、F－６a区の概要は以下のとおりである。

F－６a区、板付５丁目３－14



1. E－9 a　2. E－9 b　3. I－11　4. F－5 a　5. F－8 b　6. F－5 b　7. F－5 c
8. F－6 a　9. F－6 b　10. F－7 a　11. F－7 b　12. F－7 d　13. F－7 c　14. G－7 a. b
15. G－7 c の各調査区

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区

2．調査体制

調査体制は、おりからの日本列島改造に伴う開発事業の急増により、埋蔵文化財の緊急調査件数が大幅に増加し、埋蔵文化財係ではその対応が困難となった。よって、文化課では急拠の対策として、板付遺跡の調査に従事していた板付遺跡調査事務所の職員に応援を求め、埋蔵文化財係と板付遺跡調査事務所との合同体制を組み、市内遺跡の緊急調査に備えた。昭和52・53年度の緊急調査のうち、当班が担当した発掘調査は、板付遺跡および周辺遺跡の15ケ所、有田・小田部遺跡の３ケ所である。神松寺御陵古墳・神松寺遺跡、有田・小田部遺跡については、すでに報告書を刊行しているので詳細は下記の報告書によられたい。

『神松寺遺跡―弥生時代住居址と前方後円墳の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集、1978年
『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集　1994年
『有田・小田部第23集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集　1996年

発掘調査は多忙をきわめたが、各調査員、発掘作業員の一致した団結によって無事終了することができた。

調査地区、福岡市博多区板付５丁目３－14
調査期間　1978（昭和53）年４月６日～９月15日
調査主体、福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係、板付遺跡調査事務所

調査指導委員

岡崎　敬（九州大学文学部教授　故人）
横山浩一（九州大学文学部教授　現・福岡市博物館顧問）
森貞次郎（九州産業大学教授　故人）
三島　格（福岡市教育委員会文化財専門委員、前肥後考古学会会長）
藤井　功（福岡県教育庁文化課長　故人）
下條信行（九州大学文学部助手　現・愛媛大学文学部教授）
後藤　直（福岡市立歴史資料館館長　現・東京大学大学院教授）

福岡市教育委員会

教育長　戸田成一（当時）生田征生（現）　　文化部長　志鶴幸弘（当時）
文化財部長　柳田純孝（現）　　文化課長　清水義彦・井上剛紀（当時）
埋蔵文化財課長　山崎純男（現）　　埋蔵文化財係長　三宅安吉（当時）
調査第１係長　山口譲治（現）調査第２係長　力武卓治（現）
庶務　安田正義　河鍋好輝（当時）宮川英彦　御手洗清（現）

発掘調査担当

山崎純男　沢　皇臣　山口譲治　横山邦継

調査補助員

原　俊一　前田義人　奈良崎和典　森瀬圭子　小野由美子　村上順子　伊崎俊秋　木下尚子
田口真理　久保智康　山田威洋　市橋重喜　松永幸男　為貞由紀　速見信也　谷　豊信　出
利葉浩司　福岡大学歴史研究会諸氏

整理作業員

久賀登世子　藤アイ子　矢川みどり

3．板付台地の弥生時代前期の集落

F－6aは環濠の位置する中央台地の南側、丘陵尾根に近く、遺構の残存状態が比較的良好な所に位置している。F－6a区から検出した遺構の大部分は前期の貯蔵穴であることから、板付台地における前期の集落構造をみていき、本調査区の位置づけをおこなっておきたい。

前期の集落は大規模で、その内容もかなり明らかになってきている。先ず、集落の中心をなすのは中央台地の中央部に掘削された環濠である。環濠は南北110m、東西81mの卵形の平面プランをもっている。環濠の北西部には直線的な濠（弦状濠）によって半月形の区画がつくり出されている。弦状濠は北側で環濠から分岐し、南西部では環濠との間に幅5.0mの陸橋が形成されている。また、環濠にも同様の南西部に幅4.0mの陸橋が形成されている。陸橋はそれぞれの区画の出入口であったことは明瞭であるが、削平のため詳細な構造は不明である。環濠、弦状濠は現状で幅1～5m、深さ1～2.5m、断面V字形をなす。濠底は平らでなく部分的に深くなったり、浅くなったりしている。削平を考慮し復原すると環濠の幅は4.0～6.0m、深さ2.5～3.0m、濠の掘削に伴う土量、あるいは濠内の流入土から環濠には両側に、弦状濠には西側に土壘がつくられていたとみられ、土壘の高さは1.0～1.5mが推測される。環濠内に住居址は検出されていないが、削平のため消失したと考えられる。住居址が存在した蓋然性は高い。弦状濠によってつくり出された半月形の区画内には40基前後の貯蔵穴が密集し、相互に切り合い関係をもちながら検出された。この区画が貯蔵穴を囲む目的もっていたことは容易に推測することができる。貯蔵穴は、これ以外にも北台地、中央台地環濠南側、南台地の三ケ所に集中している。北台地では墓と重複し、106基＋αが存在する。貯蔵穴が墓より先行している。中央台地、環濠南側では57基＋αの貯蔵穴が存在している。本調査区はこれらの貯蔵穴群の中心部を占めている。本地区の貯蔵穴は、北台地の貯蔵穴が密集して存在するのに対し、一定の間隔をもって分布し、切り合い関係も比較的少なく、位置を加味し、日常的な使用を意図していたことがうかがえる。南台地では8基＋αの貯蔵穴が存在する。分布範囲が充分に明らかになっていない。また、時期的にも下るものが多い。以上、板付台地には4ケ所の貯蔵穴集中部がある。位置やあり方から見て、貯蔵穴の使用目的が異なっていたことが推測できる。

墓地は台地上に5ケ所所在する。最も環濠に近い墓地は環濠と弦状濠の交わるすぐ北側に存在する7基の小児甕棺墓から構成されている。2基に小壷、2基に管玉が副葬されている。7基のうちの4基に副葬品を伴うことは注目される。この小児墓地から北西に約40m離れた所に、やはり小児墓のみで構成される墓地が存在する。現在28基が検出されている。このうち1基より石剣の切先1点が出土している。この墓地よりさらに北に20m離れた所から北側120m以上の範囲に大規模な共同墓地が形成される。この墓地は貯蔵穴群が廃棄された後に営まれている。墓地は成人、小児墓が混在し、土壙墓、木棺墓、甕棺墓からなっている。現在114基が確認されている。以上の3ケ所の墓地は環濠より北側に存在する。既に消失して正確な位置は明らかでないが、環濠の南東に墳丘墓が存在した。中より前期末の甕棺6基が出土し、細形銅剣・銅矛各3口が出土している。板付遺跡の頂点を示すものである。この他、南台地に木棺墓1基が検出されている。

水田遺構は台地の東西の沖積地で検出されている。主体となるのは西側沖積地で、水路、水田が調査されているが、その範囲については不明な部分が多い。

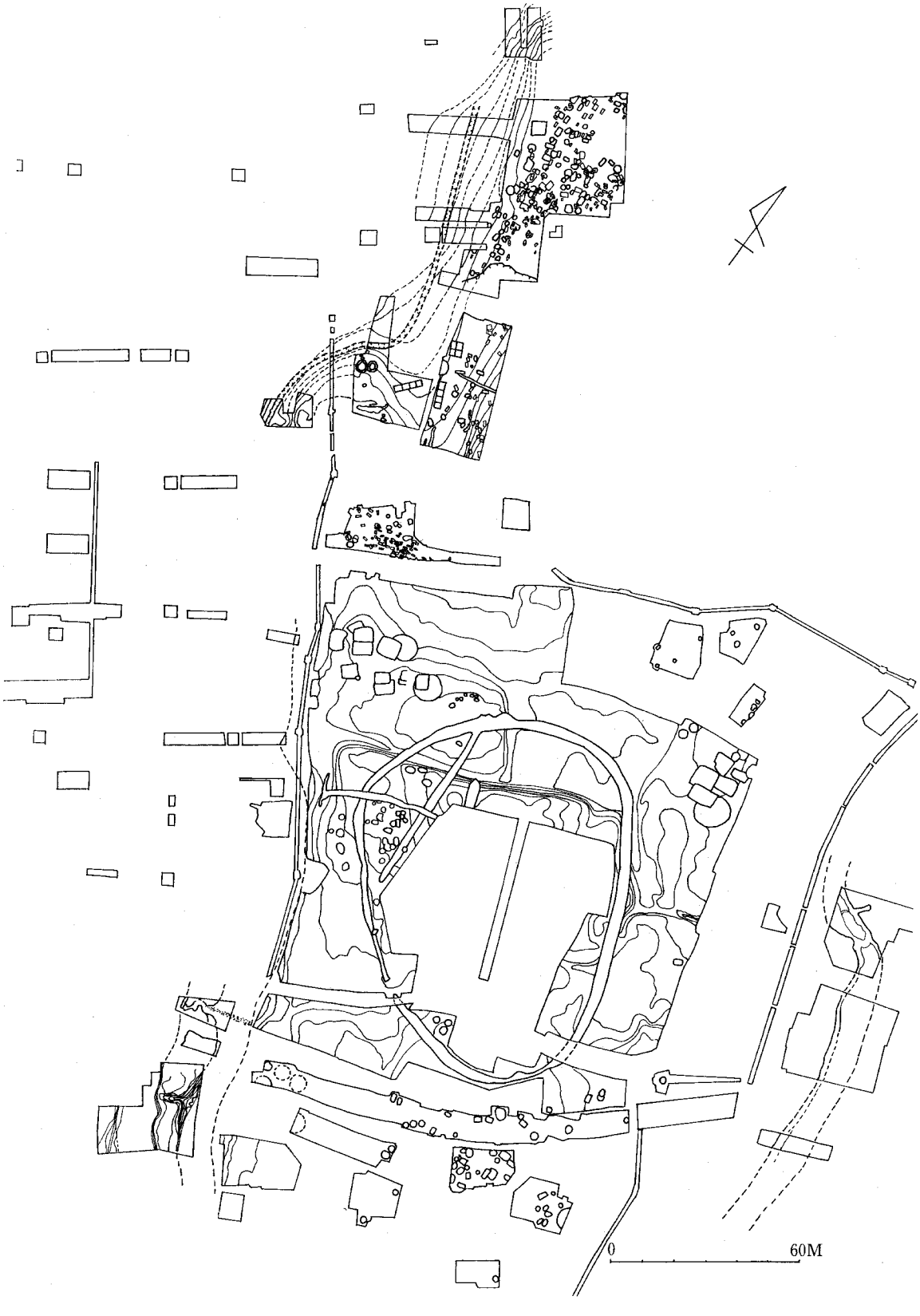


Fig. 2　板付遺跡（中央・北台地）全図

第２章　F－６a区の調査

１．調査区の位置

板付遺跡の集落がのる台地（中位段丘Ⅱ面）は、東を御笠川、西を諸岡川等の自然流路によって侵蝕され、南北に細長い低台地状をなしている。この低台地は南側が高く、北に向ってゆるやかな傾斜をもっている。現在は南と環濠集落の存在する中央台地の二ケ所に頂部が存在するが、かつては削平され平坦になっている現・板付北小学校の校庭にも頂部があったと考えられる。これらの頂部間は現在もくびれて、小さな鞍部が形成されている。後世の削平等を考慮すれば、弥生時代にはさらに地形的特徴が顕著で、それぞれの頂部を中心に独立した台地を想定することができる。これらの台地を便宜上、南から南台地、中央台地、北台地と呼んでいる。

現在、南台地と中央台地の間には旧県道が貫通し、民家がたちこめて旧状を保っていないが、南、中央台地とはそれぞれ約１mの比高差をもっている。中央台地と北台地の間は、現在は削平され、民家がたちこんで全く旧状を保っていなかったが、かつては水路が貫通していた。F－６a区は、中央台地の南側に位置している。中央台地の頂部を中心に掘削された環濠の南端中央部の南側約20m離れた所にあたり、現在は、史跡指定地の南を走る県道505号線の南に隣接している。中央台地も後世にかなりの削平を受けているが、本調査区は、最も原状を保っている地区で、標高11.50mを測る。調査対象面積は328㎡、調査時は県道との比高差は約１mであったが、調査終了後、地下げされたので、現在は県道とほぼ同じ高さを有している。

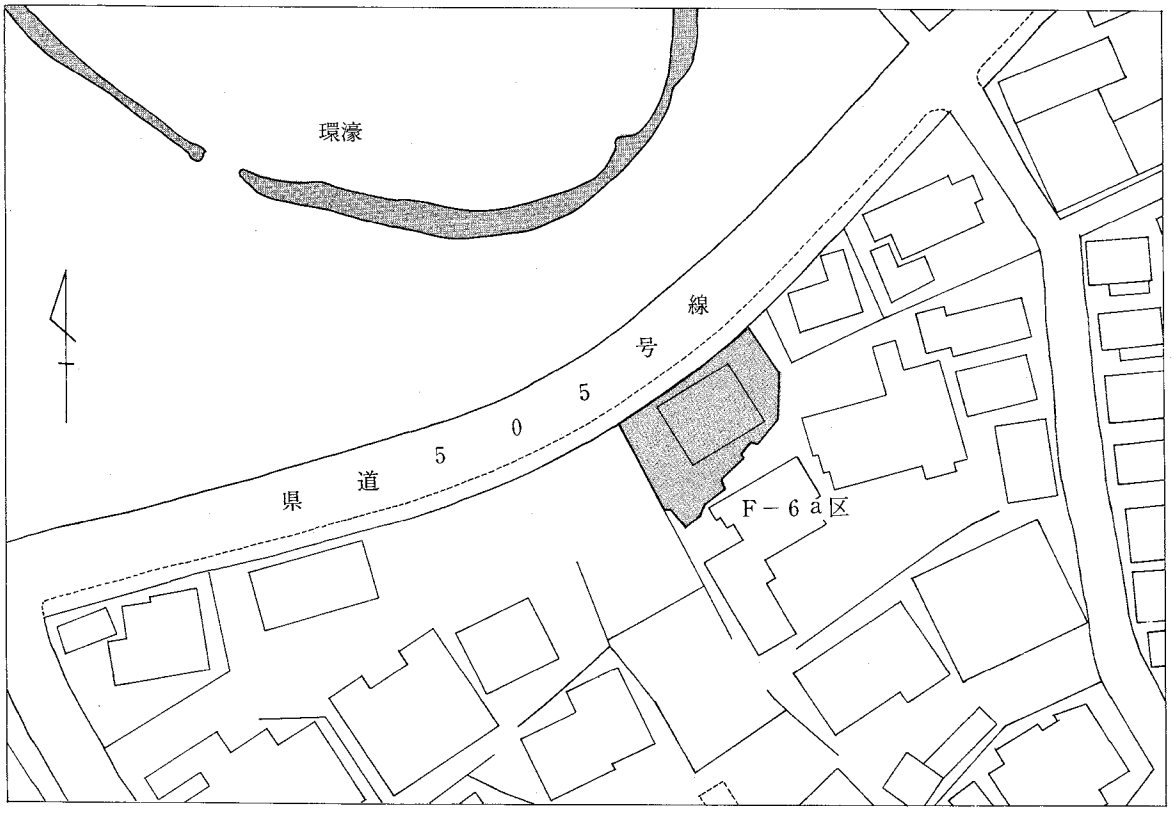


Fig. 3　F-６a区の位置（900分の１）

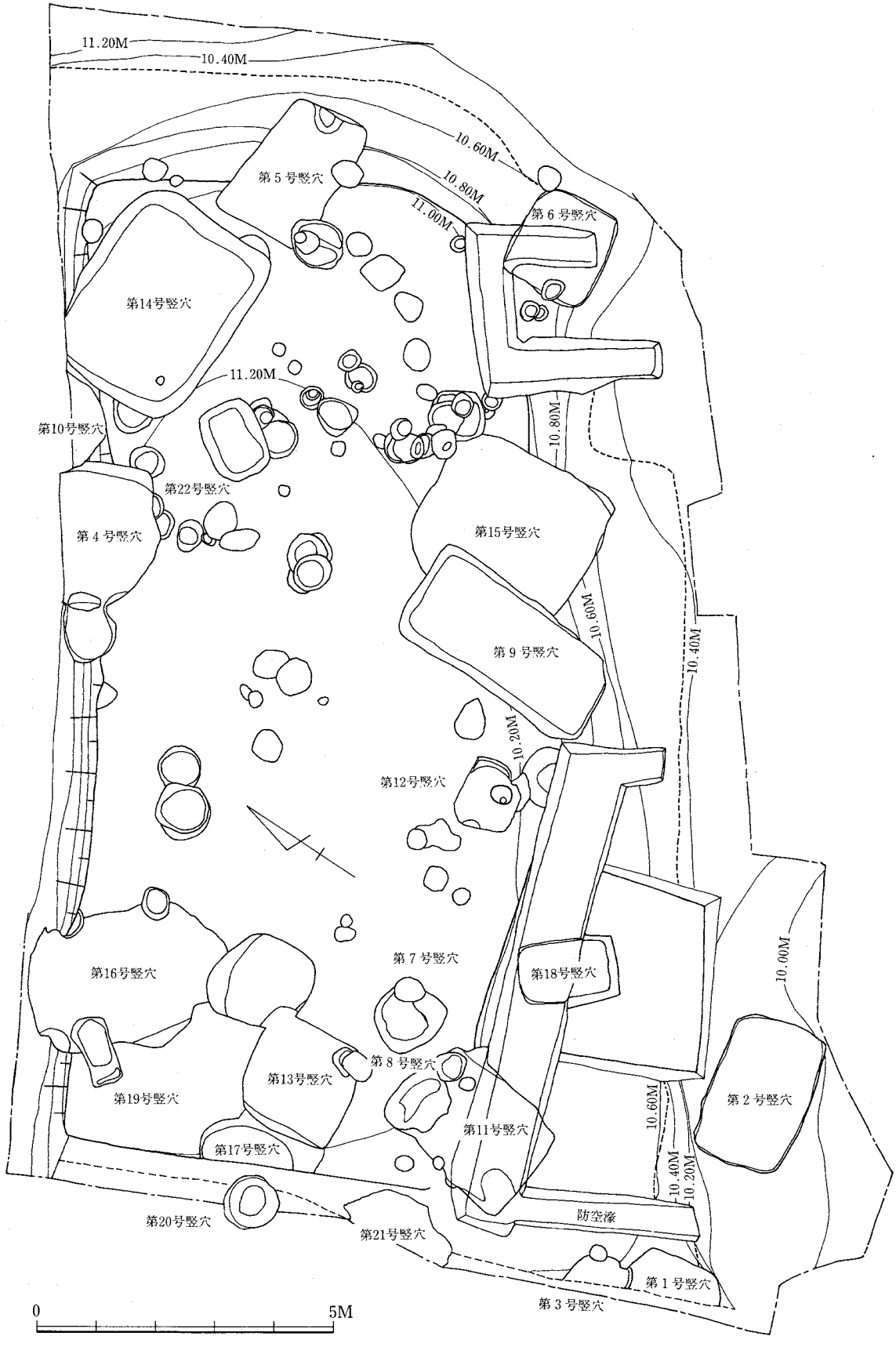


Fig. 4　F－6a区遺構全体図

調査区は現状が畑地となっていたが、周辺は、宅地造成のため約１m地下げされ、本地区のみが高まりとして残っていた。このため遺構の保存状態は比較的良好ではないかとの予測ができた。かつて、県道の調査では、前期の貯蔵穴、中期の住居址、中世の地下式横穴等が検出されているので、当該地も同様の遺構の存在が考えられた。厚さ30～40cmの表土層を除去後、予想どおりの遺構を確認することができた。

２．遺構の分布（Fig. 4）

遺構は調査区の全面において確認した。検出した遺構は竪穴状遺構、柱穴状遺構、地下式横穴、井戸状遺構、防空濠等である。各時代の各時期の遺構が存在する。

最も溯るものは、遺構は明確にできなかったが、後期旧石器時代の遺物がある。竪穴の埋土中から少なからずの石器が出土している。本調査区が中央台地に近いことから考えて、本調査区内に遺物包含層が存在した可能性が強いが、後世、削平によって消滅したものと考えられる。

次に分布するのが弥生時代前期の貯蔵穴と考えられる竪穴状遺構である。第１～３、５、６、10～13、16～18、21号竪穴状遺構がそれらである。一部に重複がみられるが、貯蔵はそれぞれ一定の間隔をもって存在している。調査区内では東西の二方向に片寄って分布し、中央部12.0m×14.0mの広場的空間を形成している。貯蔵穴と関連させて考えれば、広場は作業場としての機能を持っていたと考えられる。貯蔵穴の平面形は大部分が方形ないしは長方形をなし、第３号、10号、17号、21号が円形、第16号が長楕円形をなす。

次に構築されるのが、弥生時代中期前半の円形の竪穴住居址である。調査区の東側で検出された。削平され、柱穴を残すのみであるが、一回の立て直しがみられる。前期の貯蔵穴、中期の土坑、地下式横穴と重複関係にある。同じ中期の遺構に方形、長方形の土坑があり、住居の廃棄後、そう時間をおくことなく、住居の周囲に掘り込まれている。

弥生時代以降は、しばらくの間、遺構の形成はなく、中世末に土坑と地下式横穴が構築されるが、散在している。

なお、調査区南側には並列して、太平洋戦争末期のコの字形に掘り込まれた防空濠がある。

３．弥生時代前期の貯蔵穴

本調査区から検出した竪穴状遺構は、検出時には、時期、竪穴の使用目的（性格）等が明らかでないため、竪穴状遺構すべてに通し番号を付した。よって、ここでも、竪穴状遺構の番号はそのまま使用し、説明を加える。

弥生時代前期に属すると考えられる貯蔵穴は総数13基である。大部分は方形、長方形プランであるが、一部、円形プランも混じえる。前期初頭に属する貯蔵穴が集中していることは注意する必要があろう。一つの単位と考えてよいかもしれない。以下、各貯蔵穴と出土遺物について詳述する。なお、遺構については、先にも記したが、水害により実測図の大部分が行方不明になり、現存の深さ等、不明な点が多いが、できるだけの説明を加える。

(1) 第１号竪穴（Fig. 5）

調査区の西南コーナー付近の南壁に沿って検出した貯蔵穴である。第３号竪穴と重複関係にあり、

第３号竪穴に切られているが、発掘の当初は、切り合い関係が明らかでなく、同一遺構として調査したため、遺物に混存がみられる。遺構の大部分は調査区外に延びるため全形は明らかにできないが、並列する第２号竪穴の形状や検出部分からすると、幅160cm＋α、長さ80cm＋α（200cm前後か）の長方形プランをなすと考えられる。傾斜面に位置するため南側壁は浅くなり、上部がないため垂直に近いが、高まり側である北側と東側の一部は残存状態が良好で袋状をなすが、袋状の入り込みは約10cmと小さい。床面は凹凸がなく平坦である。

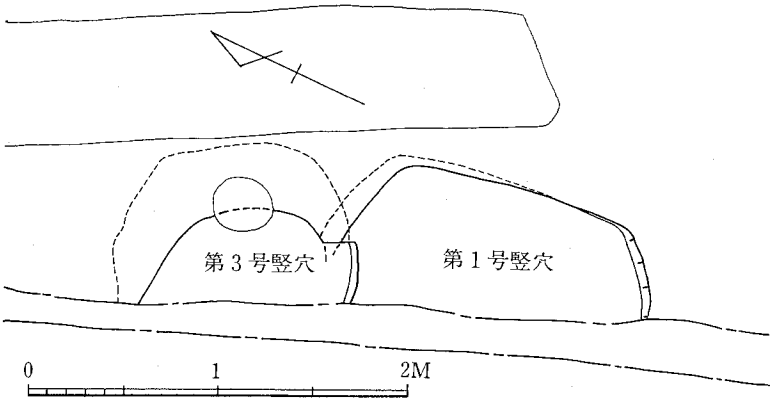


Fig. 5　第１・３号竪穴平面図

出土遺物（Fig. 6）

出土遺物には土器、黒曜石、古銅輝石安山岩等の石片、炭化米等の植物遺体が出土している。遺物量は多いが、いずれも小破片となっている。

１～８は刻目突帯文土器である。１は口縁に接してカマボコ形の低い突帯一条を貼り付ける。刻目は指（？）により太い。体部は内にむかって直線的にのびる。口縁部内側に若干の粘土の折り返しがみられ、わずかに肥厚する。外面は横方向の粗いヘラナデ調整痕が明瞭に残っている。内側は横ナデ調整。胎土には花崗岩のやゝ大きい砂粒が多量に混入されている。焼成は堅緻、色調は内外面共に褐色をなす。２は口縁に接して、断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具により丁寧に施されるが浅い。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は横ナデ調整である。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入、焼成は良好である。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。３は口縁に接して太目の断面カマボコ形の突帯一条を貼り付ける。刻目は棒状工具で深く確実に刻まれている。内面は横ナデ調整。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が白黄色をなす。４は屈曲部に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらしている。屈曲部はほとんど屈曲していない。突帯の刻目は貝殻条痕の原体によって刻まれ、間隔、深さはやゝ不規則である。器面は外面が貝殻条痕を施した後、横ナデ調整を加えている。内面は横ナデ調整、胎土には石英・長石のやゝ大きい砂粒を混入している。焼成はやゝ不良、色調は外面が褐色、内面は白黄色をなす。外面にはススの付着が認められる。５も屈曲部の破片であるが、ほとんど屈曲しない。断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具で丁寧に施される。外面は横方向の貝殻条痕調整。内面は横方向の刷毛目調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面が黄白色をなす。６は口縁部に接して断面長方形の高い貼り付け突帯一条をめぐらし、口縁部にやゝ幅広い平坦面をつくり出す。刻目は棒状工具によって施されるが浅い。突帯の下面には指押えの痕跡が顕著に残っている。体部は膨らみをもって下る。外面は横方向～斜方向のヘラナデ状の調整。内面は、口縁部の角をヘラによって削りとっている。体部は板ナデ調整。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母の砂粒を混入している。色調は外面が黄白色～褐色、内面は褐色である。７も口縁に接して断面三角形の高い貼り付け突帯一条をめぐらし、口縁部に平坦面を形成している。口縁内側は

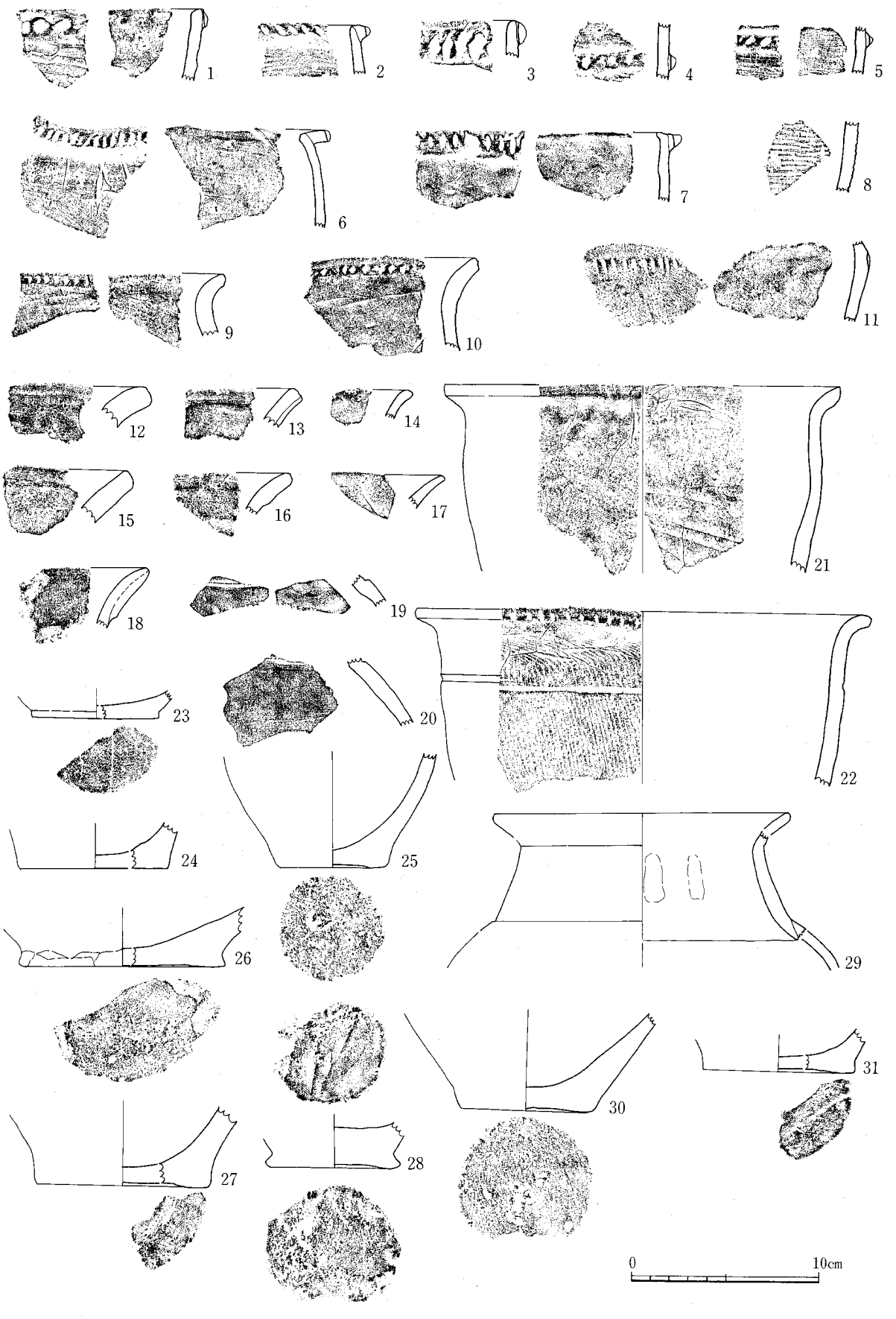


Fig. 6　第１号竪穴出土遺物実測図

わずかに張り出す。刻目は棒状工具により、約半分ほどの深さに刻まれている。外面にはススが付着している。内外面共横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外が赤褐色、内面が黄白色をなす。8は甕形土器の胴部破片。外面に横方向の丁寧な貝殻条痕が施文され、内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は褐色をなす。9～11、21、22は如意形口縁をもった甕形土器である。9は口縁が外反し、胴がやゝ膨らむ。口縁端部は丸くおさめる。刻目はへらにより端部全面に刻まれている。外面は緻位の貝殻条痕調整で、原体の始点が線状に残っている。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石・赤色鉱物の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は黄～赤褐色をなす。11は口縁がゆるやかに外反し、胴部はやゝ膨らむと考えられる。端部は方形に仕上げ、下半にヘラによる小さい刻目をつける。外面は縦位の板ナデと考えられ、原体の起点が口縁下に線状に認められるが詳細は不明。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・赤色鉱物からなる花崗岩の砂粒が多量に混入されている。焼成は良好、内外面共赤褐色をなす。11は口縁部を失うが如意形をなしていたと考えられる。屈曲部に刻目を入れる。刻目はヘラで施されたもので細い沈線状をなす。屈曲部には段を形成する。外面の屈曲部より上位には斜位の刷毛目調整を加える。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成はやゝ不良、色調は外面が白黄色、内面は黒褐色をなす。21は復原口径21.1㎝、口縁は外反し、端部は丸くおさめる。外面は不定方向の粗いヘラ研磨調整で、口縁部は横ナデ調整。内面は下半部が横方向の粗いヘラナデ調整、上半部は斜位方向の丁寧な板ナデ調整、口縁は横方向のヘラナデ（刷毛目）調整である。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。外面にはススが付着している。22は復原口径24.3㎝、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口唇部の下半にヘラによる刻目を施している。口縁下に沈線一条をめぐらしている。外面には縦方向の粗い刷毛目調整を加えている。一条の沈線は刷毛目を施した後につけられたものである。外面にはススが付着している。内面の上半部には指圧痕が残り、口縁部には横方向の外面と同様の刷毛目調整を加えている。胎土にはやゝ粒の大きい花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は黄褐色～黒褐色をなす。12～18は壷形土器の口縁部破片。12は口縁が外反し、端部は丸くおさめている。内外面共丹塗り磨研されているが、部分的に丹が落ちている。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させている。口縁部には粘土帯の貼り付け部が凹線状の痕跡として残っている。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は内外面共、赤色であるが、胎土は黄白色をなす。13は口縁が外反し、端部は隅丸の方形をなす。外面は横方向のヘラ研磨調整。口唇部から内面にかけては横ナデ調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入する。焼成は堅緻、色調は黄褐色で口縁に黒斑がある。14は口縁が外反し、端部はやゝ肥厚し丸くおさめている。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面口縁部には帯状に丹塗りが認められる。胎土は精良、焼成は良好、外面は黄褐色、内面は黄白色をなす。15は大壷の口縁部。大きく外反している。端部は隅丸の方形をなす。外面は横ナデ調整、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入する。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が褐色をなす。16は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段を形成している。やゝ磨滅し、内外面の調整は不明。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやゝもろい。色調は外面が黄白色、内面が褐色をなす。17は口縁が外反し、端部は尖り気味におさめる。器面の調整は不明。胎土は精製され良質、焼成は良好、色調は内外面共赤色をなす。上層に混入した土師器の可能性が強い。18も口縁部が外反し、粘土帯を貼りつけ肥厚させ、端部は丸くおさめている。下端に段を形成している。器面は内外共、横方向のヘラ研磨調整、口縁内側に丹塗りの痕跡が残っている。胎土には石英・長石の砂粒を混入する

が、やゝ粒の大きい砂粒も含まれる。焼成は良好、色調は黄白色～褐色、内面は白黄色をなす。19・20は胴部破片。共に頸部の境に沈線一条をめぐらし、わずかに段を形成する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。19の胎土は精製され良質、20の胎土は石英・長石の砂粒を若干混入するが良質である。焼成は共に堅緻、色調は19の外面が褐色、内面が黄白色、20の外面が赤褐色、内面が黄褐色をなし、共に外面に黒斑がつく。21は復原口径21.1㎝。口縁部は如意形に外反し、口縁端部は丸くおさめている。胴部はやゝ膨らむが張りは大きくない。胴部外面は横方向の粗いヘラ研磨調整で、口縁周辺は横ナデ調整。胴部内面は横方向の粗いヘラ研磨調整であるが、下位はさらに粗くなり、研磨部分は凹線状をなす。口縁部は横方向の刷毛目調整。外面にススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。22は復原口径24.3㎝。口縁は如意形に外反し、端部は丸くおさめている。口唇部下半にはヘラによる刻目が施されるが、部分的には刻目は口唇部いっぱいに施される。口縁下に沈線一条がめぐらされる。外面には縦方向の粗い刷毛目調整が施されている。刷毛目は底部側から口縁に向って施され、口縁では刷毛目が右に回転されるようなくせがある。内面は横ナデ調整。外側にはススが付着している。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒が混入され良質でない。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色で一部にコゲ付きがみられる。29は小壷の頸部破片である。口縁部は頸部との境から大きく外反するが、口縁部の上半部を欠失している。頸部は直線的に末広がりに下り、胴部との境には段を形成している。また内面の粘土接合部にも段を形成している。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整である。胎土は精製され良質、小型壷特有の胎土である。焼成は良好、色調は黄白色～褐色をなす。頸部復原径13.0㎝を測る。23～28、30、31は底部破片である。23は底部復原径6.3㎝。低い円盤貼り付け状の底部。外底部に木葉痕がある。器面調整は器面が荒れているため不明。小壷の底部である。胎土は良質、焼成はやゝ不良、色調は赤色～黒褐色をなす。24は底部復原径8.0㎝。外面はヘラナデによる調整。甕形土器の底部である。25は底部復原径6.0㎝、わずかにあげ底状をなす。体部は内湾しながらたちあがる。外面は横方向の粗いヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整、小型の鉢形土器か。26は底部復原径11.0㎝。安定した平底で、底部端は指でつまみ出され張り出している。体部は外傾し外側に張り出す。外底部に籾圧痕が１ケ所にみられる。体部外面は粗いヘラ研磨調整。内面は外面に比してやゝ丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。27は底部復原径9.4㎝。底部は輪状に形成後、中に粘土を充填する方法をとっている。わずかにたちあがった後、体部は外傾しながらたちあがる。外面は丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整とみられ、内底部にはコゲ付きがみられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面は黒色をなす。28は底部径7.3㎝。やゝあげ底状をなす。底部端は指でつまみ出され、外側に張り、断面は低い台形状をなす。外底部はヘラ削り、体部外面は粗いヘラ研磨調整。内底部は粗いヘラ研磨で凹凸が著しい。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に黄赤色をなす。30は底部径7.0㎝。底部は安定した平底である。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面は横、斜方向の粗いヘラ研磨調整。内面はやゝ丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を大量混入し、質は良くない。焼成は良好。色調は外面は黄褐色、外底部に黒斑がみられる。内面は赤色をなす。31は底部復原径8.1㎝。外面は縦方向のヘラナデ調整。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒を多量に混入し、質は良くない。焼成は良好。色調は内外面共に褐色をなす。

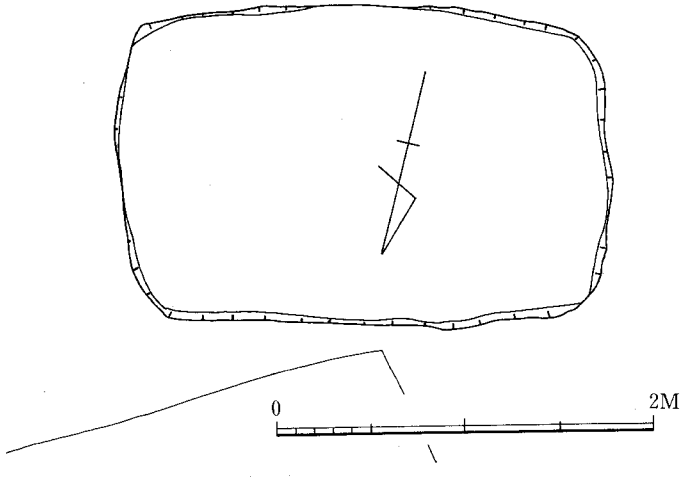


Fig. 7　第２号竪穴平面図

(2)　第２号竪穴（Fig. 7）

調査区の南西コーナー付近に検出した貯蔵穴である。第１号竪穴の東側に並列して位置し、第１号竪穴とは約1.8m離れている。他の遺構との重複関係はなく、単独で存在している。ただし、他の遺構検出面からみると、約１m削平されているため、遺構の残存状態はきわめて悪く、床面近くの約20㎝を残すのみである。長さ255㎝、幅170㎝の長方形プランをなす。壁面は垂直をなしているが、他からみて、本遺構も袋状をなしていたと考えられる。床面は平坦である。

出土遺物（Fig. 8）

出土遺物には土器、石器、石片等があるが量的には遺構の残存状態が悪いために多くない。

土器（Fig. 8－１～11）

Fig. 8－１～３、５は壷形土器の破片である。１は頸部から胴上半部にかけての破片である。頸部はゆるやかに内傾し、口縁部は外反すると考えられる。頸部と肩部の境には不明瞭な凹線一条がめぐる。肩は張らず、ゆるやかに下方に向って膨らみ、胴部最大径は胴中位にあると考えられる。器面の保存状態は良くない。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整と考えられる。頸部と胴中位に

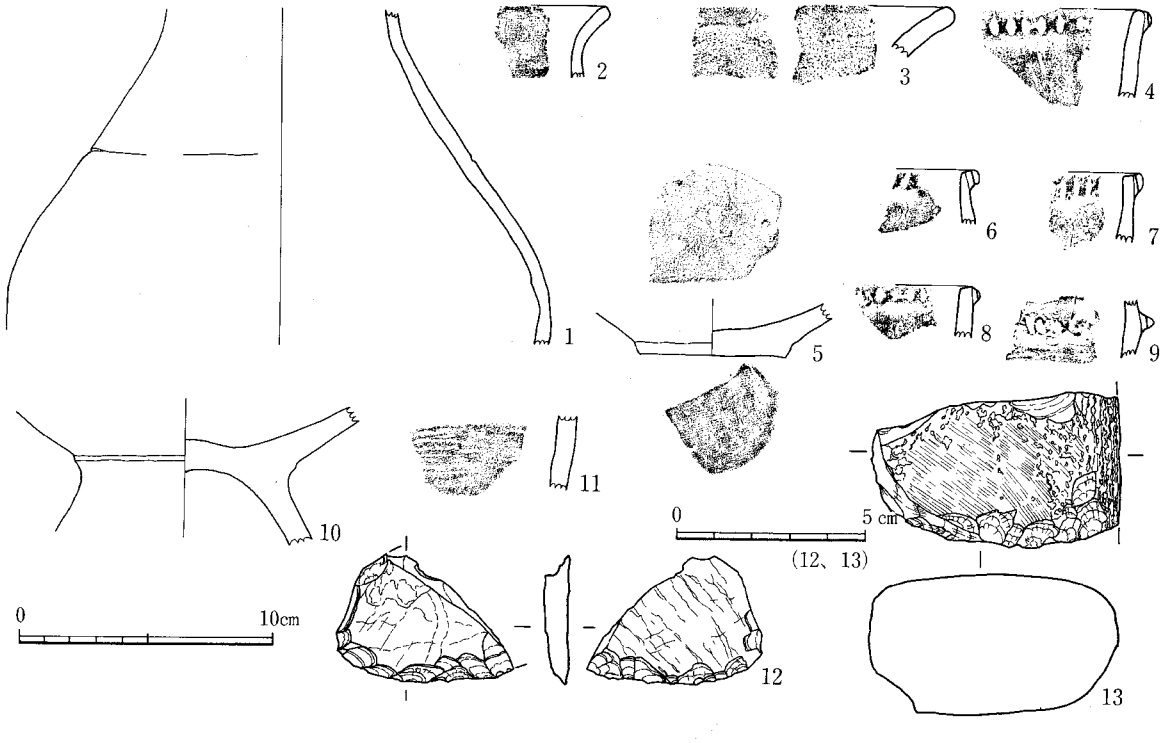


Fig. 8　第２号竪穴出土遺物実測図

指圧痕が残っている。胎土には石英・長石・金雲母・角閃石等の砂粒を多量に含んでいる。焼成はやゝ不良。色調は外面が黄白色から褐色、内面が白灰色をなす。2は口縁部破片。大きく外反し、端部は丸くおさめる。頸部と口縁部の境にわずかな段ができる。器面は外面が横方向のヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整。胎土には花崗岩の砂粒を多量に含む。焼成はやゝ不良。色調は外面が黄赤色、内が黄白色をなす。3も口縁部破片。端部はやゝ肥厚ぎみに丸くおさめる。器面があれて調整痕は不明であるが、端部は横ナデ調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝ不良。色調は外面が黄赤色、内面が黄褐色をなす。5は壷の底部。平底で円盤貼り付け状をなすが、やゝだらけ明瞭でない。外底部は指押えによる調整で凹凸がある。内面は板ナデ調整で、細かい条線が多方向からつけられている。胎土は精良、砂粒をほとんど含んでいない。外面には黒色顔料が塗布されていたとみられ、一部に残っている。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黒灰色をなす。底部復原径5.9cmを測る。4、6～9は刻目突帯をもつ甕形土器の破片である。4は口縁に接して断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具によるものである。内外面共に保存状態が良くなく、調整等は不明。外面にススが若干付着している。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は黄白色をなす。6も5同様の刻目突帯一条を口縁に接してめぐらしている。刻目は細かい棒状工具によって上から下に向って刻まれる。内外面共横ナデ調整。胎土には花崗岩のやゝ大きい砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は内外面共赤黄色をなす。7は口縁よりやゝはねあがるように断面カマボコ形の突帯一条を貼り付けている。刻目は細かい棒状工具で丁寧に刻まれている。器面は外面が板による擦痕、内面はナデ調整である。胎土には花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は黄赤色をなす。8は口縁に接して断面カマボコ形の突帯を貼り付ける。刻目は棒状工具によるが刻みは浅い。器面は内外面共横ナデ調整。外面にはススの付着が著しい。胎土には石英・長石等の砂粒を多量に混入している。焼成良好、色調は内外面共に褐色をなす。9は二条突帯をもつ甕形土器。屈曲部の破片で、刻目突帯一条をめぐらしている。突帯は高いが細かい棒状工具によってつけられる刻目は不規則で深さもまちまちである。屈曲部は丸味をもっている。器面は内外面共、横方向の貝殻条痕を施した後、横ナデ調整を加えている。突帯下にはススが厚く付着している。胎土には花崗岩の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は内外面共黄褐色をなす。10は高杯形土器である。脚筒部と坏部の一部を残している。脚筒部は径8.2cmで外方に向って直線的にのび、安定した感がある。杯部は外傾しながらたちあがるが、共に端部を失い全形を知ることはできない。脚部と杯部の接合部には段が形成される。器面は保存状態が悪く、調整は明らかでない。胎土には石英・長石・赤色鉱物等の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好、色調は外面が白黄色～黄赤色、内面が黄赤色をなす。11は甕形土器の胴部破片である。外面は横方向の貝殻条痕調整、ススが付着している。内面は横ナデ調整。胎土には花崗岩の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良、色調は外面が黄褐色、内面が白黄色をなす。

石器（Fig. 8 ―12～13）

13は太形蛤刃石斧の体部の破片1個である。硬砂岩を素材としている。全体を剥離を加えて整形し、さらに敲打を加えて剥離痕をつぶし最後に研磨を加える。側面には敲打痕が残り研磨は加えられていない。表裏には研磨が施されるが、敲打痕も残している。幅6.5cm、厚さ3.8cmで断面形は楕円形をなす。12は頁岩を素材としたスクレイパー。板状の剥片の一辺に両面から剥離を加えて刃部を形成している。欠損しており、石包丁の未製品の可能性もある。

(3) 第３号竪穴（Fig. 5）

調査区の南西コーナー附近の南壁に沿って検出した貯蔵穴である。第１号竪穴と重複関係にあり、１号竪穴同様に遺構の約半分が壁の中に延びている。発掘の当初は第１号竪穴と同一遺構として発掘した。平面形、土層観察の結果、第３号竪穴が第１号竪穴を切っていることが判明した。東に位置する第２号竪穴とは約2.3m離れている。また、北側には第11号竪穴と第21号竪穴があり、それぞれ1.5mと1.9m離れている。第３号竪穴は現状で、南北径110㎝、東西径50㎝の半円状をしているが、本来は径90㎝前後の円形プランをなしていたと考えられる。壁は大きくオーバーハングし、袋状をなし、約40㎝外側に掘り込まれている。床面は現状で、南北径130㎝、東西径85＋α㎝の半円状をしているが、元来は径130㎝の円形プランをなすと考えられる。床面は平坦であるが、第１号竪穴の床面より深く掘り込まれているために、切り合い部分には段がついている。切り合い関係から、長方形プランが古く、円形プランが新しいことがわかる。

(4) 第５号竪穴（Fig. 9）

調査区の東端中央部に検出した貯蔵穴である。調査区の高まりが傾斜をもって低くなる傾斜変換点に位置しているため、東側の壁はかなり浅くなっている。弥生時代中期の住居址の柱穴と重複関係にあり、柱穴によって切られている。本竪穴のすぐ西側には軸線をそろえるようにして第10号竪穴が位置し、その距離は25㎝にすぎない。南側には第２号防空濠と第６号竪穴が位置している。それぞれ、210㎝と300㎝離れている。第５号竪穴は東西径240㎝、南北径は東西辺で異なり、東辺125㎝、西辺160㎝を測る長方形プランをなす。壁面は東側が削平されているため、浅くなり、ほぼ垂直で、他の部分は若干袋状をしている。外側への掘り込みは最大で15㎝前後である。床面は平坦で、東西径250㎝、南北径は東辺で140㎝、西辺で170㎝を測る。床面の東辺中央部に50㎝×40㎝の掘り残し部がある。この掘り残し部を踏台として、この部分に出入口が設けられていたと考えられる。

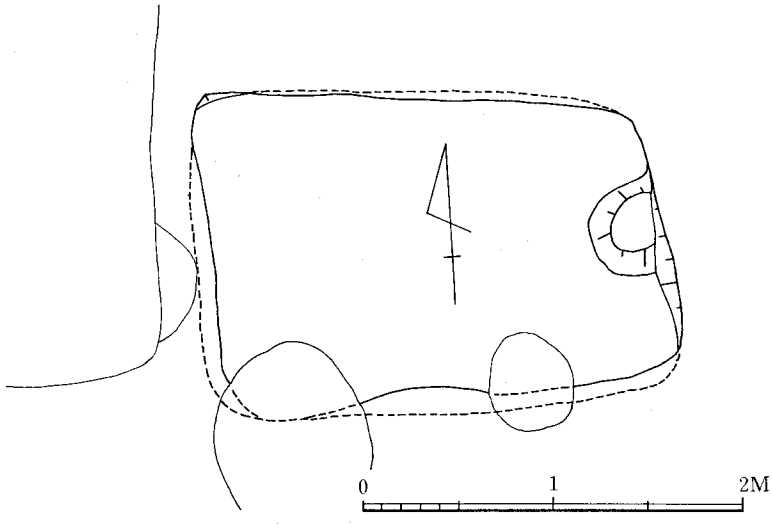


Fig. 9　第５号竪穴平面図

出土遺物（Fig.10）

遺構が傾斜面に位置して、保存状態が良くないので、出土遺物の量はあまり多くない。出土遺物には土器、黒曜石片等がある。１～３は壺形土器の破片である。１は口縁部がやゝ外反し、端部は丸くおさめている。口縁部には粘土帯を貼り付けて幅のせまい肥厚帯をつくり出しているが、中央部が凹線状に凹み、段状になっている。口縁下端に低い段を形成している。内外面は横方面のヘラ研磨調整、胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄白色、内面が赤褐色をなす。２は大壺の胴部破片。頸部と胴部の境に凹線一条をめぐらす。胴部は大きく膨らむと考えられる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整。胎土には花崗岩の砂粒を混入している。焼

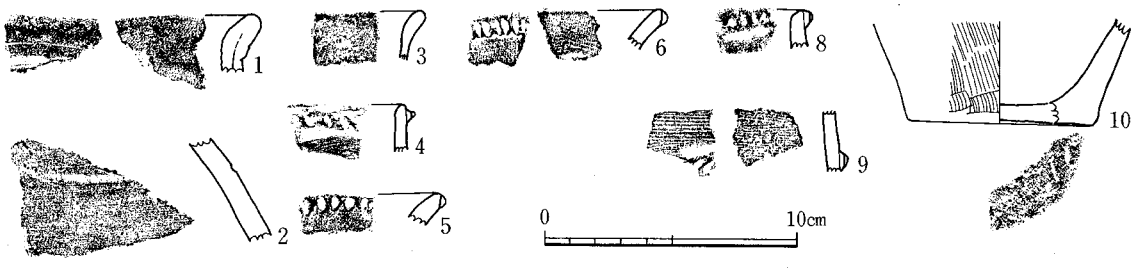


Fig.10　第５号竪穴出土遺物実測図

成は良好。色調は外面が褐色、内面は赤褐色をなす。３は小壷の口縁部破片。口縁部はわずかに外反し、端部は肥厚し、丸くおさめている。器面があれて調整痕は不明。胎土は精製され良質。焼成はやゝもろい。色調は黄褐色をなす。４、７、８、９は刻目突帯文土器の甕形土器。４は口縁よりわずかに下に突帯一条をめぐらす。突帯は細く、刻目はヘラによって刻まれている。外面は横方向の貝殻条痕調整。内面は横ナデ調整。胎土には花崗岩の砂粒を若干混入する。焼成は良好、色調は内外面共に褐色をなす。７も口縁下に幅広い断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。突帯には棒状工具によって斜位の刻目がつけられ、下方の器面の延長部分に刺突状の痕跡を残している。口縁端部は平坦に仕上げられる。外面は横方向の貝殻条痕調整、内面は横ナデ調整である。胎土には花崗岩の砂粒を若干混入する。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面は赤褐色。外面にはススが付着する。８は口縁に接して、断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は条痕原体によるものとみられる。器面の調整は不明。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を若干混入する。焼成はやゝもろい。色調は内外面共白黄色をなす。９は屈曲部に刻目突帯を貼りつける。内外面は横方向の細かい刷毛目調整。胎土には花崗岩の砂粒若干を混入する。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。５・６は如意口縁をもつ甕形土器、先に口縁部破片である。共に口縁端部は丸くおさめ、端部いっぱいに刻目を施す。５の刻目は棒状工具、６の刻目は、貝殻腹縁状のもので刻まれている。５は内外面共横ナデ調整、６は外面が縦位、内面が横位の刷毛目調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入。焼成は５がやゝもろく、６は良好である。色調は外面は共に褐色、内面は５が黄褐色、６が黒褐色をなす。10は甕形土器の底部、底部復原径7.4㎝。体部外面は下からかきあげた刷毛目調整。胎土には砂粒を混入。焼成はやゝあまい。色調は外面が黄褐色、内面が黄褐色をなす。

(5)　第６号竪穴（Fig.11）

調査区の東南部コーナー附近に検出した貯蔵穴である。調査区の高まりから下ってくる傾斜地に位置し、かつ、第２号防空濠と重複関係にあり、貯蔵穴の床面より深く切り込まれているため残存状態はきわめて悪い。北側に第５号竪穴が、西側に第15号竪穴が位置し、それぞれ、３mと2.5m離れている。第６号竪穴は東西径175㎝、南北径160㎝のほぼ方形のプランをなす。壁はほぼ垂直にたちあがるが、元来は袋状をなすと考えられる。床面は平坦であるが、中央部は防空濠によって破壊されている。

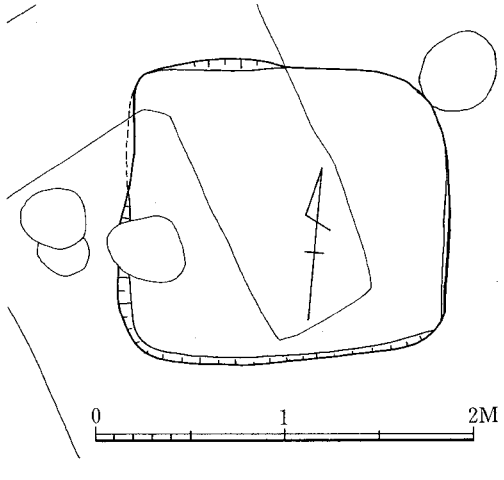


Fig.11　第６号竪穴平面図

出土遺物（Fig.12）

出土遺物には土器、石片等がある。量的にはかなりの量があるが、いずれも小破片で図化できるものは、きわめて少ない。18点を図示した。

1、2、4～9は壷形土器の破片である。1は口縁部破片。口縁部は屈曲し、大きく外反する。端部は丸くおさめているが、研磨によって平坦面をつくっている。内外面共に焼成前の丹塗り磨研である。研磨の方向は横方向。胎土には石英・長石・赤色鉱物の砂粒を若干混入しているが良質。砂粒がやゝ目立つ。焼成は良好。胎土の色調は黄白色をなす。2も口縁部破片。ゆるやかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部は約3㎝の幅で粘土帯を貼りつけ肥厚させている。下端に段を有する。内外面共に焼成前の丹塗り磨研。研磨は横方向であまり丁寧ではない。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は黄白色をなす。1、2は共に大壷の口縁部で良く似ているが、口縁部のつくり方の違いによって、1が夜臼Ⅱb式、2が板付Ⅰ式に分類できる。3は鉢形土器の口縁部と考えられる。ほぼ垂直にたちあがり、端部はわずかに外反する。口縁端部には細い粘土紐を張り付け、小さい断面三角形の肥厚部をつくりだしている。口縁端部は平坦である。内外面共に横ナデ調整を加えているが、器面にやゝ凹凸がみられる。胎土には石英・長石の砂粒が若干混入される。焼成は堅緻。色調は黄赤色をなす。4は壷の肩～胴部にかけての小破片である。上部にヘラ描き沈線（幅1㎜前後）三条を水平に施し、その下位にやはり三条のヘラ描き沈線が斜位に施されている。全体の文様構成は破片が小さいため明らかでない。内外面に薄く化粧土がかけられる。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが精良、焼成は良く、色調は黄白色をなす。5は大壷の口縁部破片であるが、端部を欠損する。口縁部には3.5＋αcmのやゝ幅広の粘土帯を張り付けて肥厚させ、下端に段を形成するが明瞭でない。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には多量の石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。6～9は壷の頸部～胴部にかけての破片である。6は頸部と胴部の境に凹線一条をめぐらし、わずかな段をつくる。外面は焼成前の丹塗磨研で、研磨は横方向である。内面には斜位の刷毛目調整痕が残る。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を比較的多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が赤色、内面が黄赤色をなす。7は肩部破片、全体にやゝ磨滅している。外面にヘラ描き沈線による文様がつけられる。上位に水平な沈線一条をめぐらし、それに垂下する沈線三条が描かれている。器面の調整は不明。胎土には細かい石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は赤白色から褐色をなす。8は頸部の小破片。口縁部と頸部の境に細い沈線二条をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は指押えの調整によって縦位の凹みがつく。胎土には石英・長石の細かい砂粒が多量に混入される。焼成は堅緻、色調は外面が黄白色、内面が黄赤色をなす。9は頸部と肩部の境に細かい沈線をめぐらし、頸部には細かい沈線四条を斜位に施している。外面は焼成前の丹塗り磨研。ヘラ研磨は横方向である。内面は指圧痕が縦位の凹みとして残っている。胎土には石英・長石・赤色鉱物の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面では丹塗り下は白黄色、内面は褐色～灰褐色をなす。10は高杯の杯部破片。口縁部は直線的に外に張り出し、端部は丸くおさめる。体部は段をもって移行するが、直線的である。内外面共に横ナデ調整と考えられるが、外面は剥離が著しい。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は赤褐色～黒褐色をなす。11～15は刻目突帯を貼り付けた甕形土器である。11は口縁よりやゝ下った位置に貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目にヘラにより左まわりに刻まれているが、不そろいで丁寧でない。口縁端部は丸くおさめている。器面は内外面共横ナデ調整。凹凸がみられる。外面の突帯以下にはススが付着していたと考えられ褐色に変色している。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外

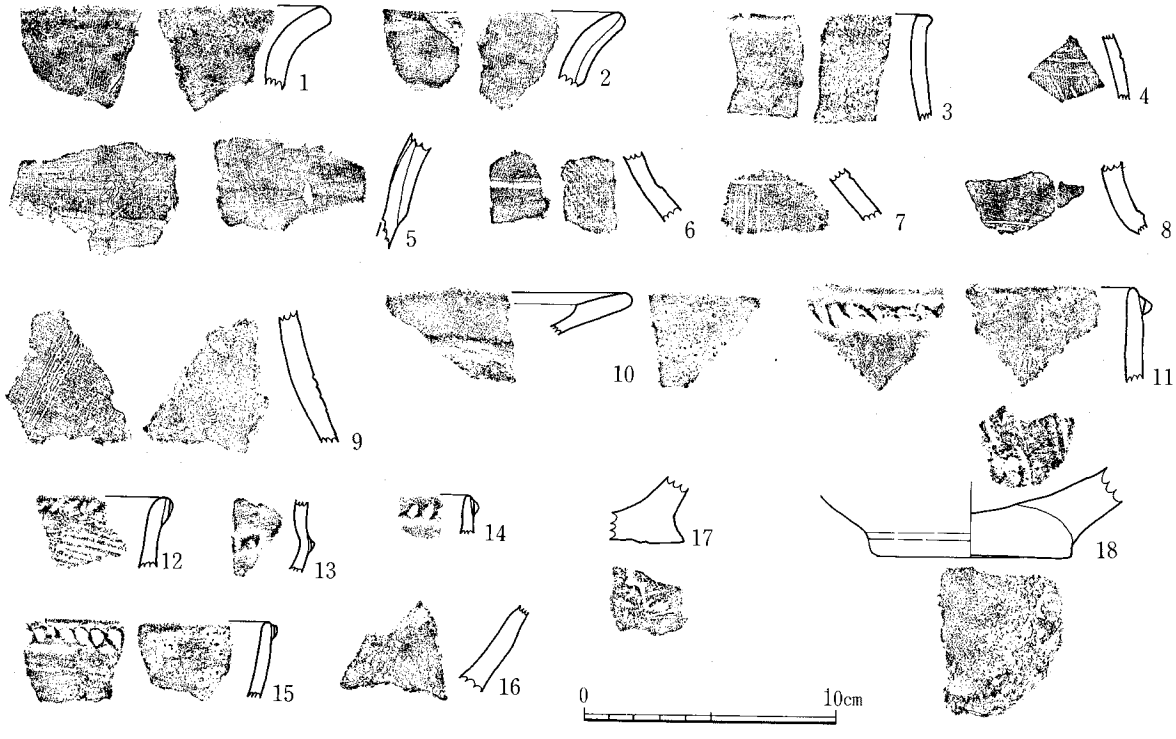


Fig.12　第６号竪穴出土遺物実測図

面の突帯以下が褐色で、他は赤褐色をなす。12は口縁に接して貼り付け突帯一条をめぐらしている。突帯には条痕原体によるとみられる浅い刻み目がつけられている。外面には貝殻条痕が斜位に施されている。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒が多量に混入されている。焼成は良好、色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。13は二条突帯をもつ小型の甕形土器である。口縁部はないが、屈曲部に貼り付け突帯をもつ。刻目は浅い。器面の内外面に横方向の貝殻条痕が施される。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は黄白色をなす。14は口縁部に接して、断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具によっている。内外面共に横ナデ調整、胎土には粒のやゝ大きい石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共に白黄色をなす。15も口縁部に接して断面カマボコ状の貼り付け突帯一条をめぐらしている。刻目は棒状工具によって、下から上につきあげるように右まわりに施している。口縁部内側には粘土の折り返しがみられる。器面は外面に横方向の貝殻条痕を施し、内面は横ナデ調整である。胎土にはやゝ粒の大きい花崗岩の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色～褐色、内面が黄赤色をなす。16は甕形土器の底部付近の破片である。体部は外傾しながら丸味をもってたちあがる。内外面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。色調は内外面共、赤褐色をなす。17、18は底部破片。17は甕形土器の底部。底部端は外に張り出す。外底部には繊維質の圧痕が残り、内底部にヘラ調整による沈線が放射状に残っている。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。色調は外面が黄赤色～黒褐色、内面は黄褐色をなす。18は壺形土器の底部。底部復原径8.0cmを測る。底部は平底で円盤貼り付け状にたちあがり、体部は大きく外傾しながらたちあがる。器面は保存状態が悪く剥離している部分がある。外底部は指圧による調整。体部外面はヘラ研磨調整。内面は剥離が著しく不明。胎土には花崗岩の細かい砂粒を多量に混入している。焼成はやゝ不良。色調は褐色から黒褐色をなす。

(6) 第10号竪穴（Fig.13）

調査区の東半部の北端に沿って検出した貯蔵穴である。遺構の大部分は調査区外にのびているが、県道の建設によって既に失われている。第10号竪穴のすぐ東側には第14号竪穴が、西側では第４号竪穴と重複している。また、中期の住居址とは、その位置関係から重複関係にあったことは間違いなかろう。第14号竪穴とはほとんど接する程で、第４号竪穴には切られている。住居址も切っていたと考えられる。第10号竪穴は現状で、東西径165cm、南北径60cmの半円状をなすが、元来は径165cm前後の円形プランをなしていたとみられる。壁面は袋状をなし、約15cm掘り込まれている。床面は平坦で円形プランをなすと考えられる。

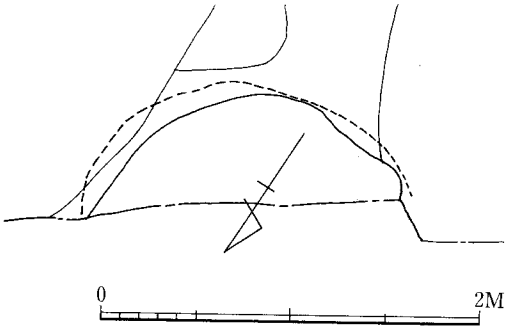


Fig.13　第10号竪穴平面図

出土遺物（Fig.14）

第10号竪穴は遺構の残存状態が悪いにもかかわらず出土遺物の量は多い。出土遺物には土器、黒曜石石片がある。

１～５は壷形土器の口縁部破片。１は大壷の口縁部、口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させ、口縁端部は丸くおさめている。口縁下端には段を形成している。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は内外面共黄褐色をなす。２も１同様に大壷の口縁部。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させるが、部分的に異なる粘土接合をおこなっている。粘土接合は外傾接合である。口縁帯の幅は１に比較し、かなりせまくなる。口縁端部は丸くおさめるが、粘土貼り付け部が沈線状に残っている。器面の外面は横方向のヘラ研磨調整後、横ナデ調整を加えている。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は内外面共に黒褐色をなす。３は口縁上半が外反する。端部は丸くおさめている。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質である。焼成は堅緻、色調は内外面共に赤褐色をなす。４は口縁部は直立する。口縁端部は肥厚気味に丸くおさめる。内外面は横方向の粗いヘラ研磨調整。器形はきめがたい。甕形土器の可能性もある。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。５は口縁が大きく外反し、端部は肥厚し、口唇部は平坦で、凹線一条をめぐらす。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整であるが、保存状態が良くない。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多く混入し、良くない。焼成はやゝ不良。色調は内外面とも黄褐色をなす。６は口縁が大きく外反し、端部は丸くおさめる。口縁の肥厚はみられないが、口縁と頸部の境にわずかな段がみられる。器面は内外面共、横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に黄褐色をなし、口縁部の内外の一部に黒斑がみられる。７は鉢形土器である。口縁部は甕形土器と同様に如意形をなし、粘土帯を貼り付け肥厚させている。口縁端部は丸くおさめ、下端には段を形成している。器面は内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入しているが良質。焼成は堅緻、色調は外面が白黄色、内面は黒色をなす。８～11、13、14は壷形土器の頸部～胴部にかけての破片である。８は頸部から胴部にかけての破片で、その境には沈線一条をめぐらし、わずかな段を形成している。器面の外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整であるが、共に保存状態は良好でない。内面の頸部と胴部の

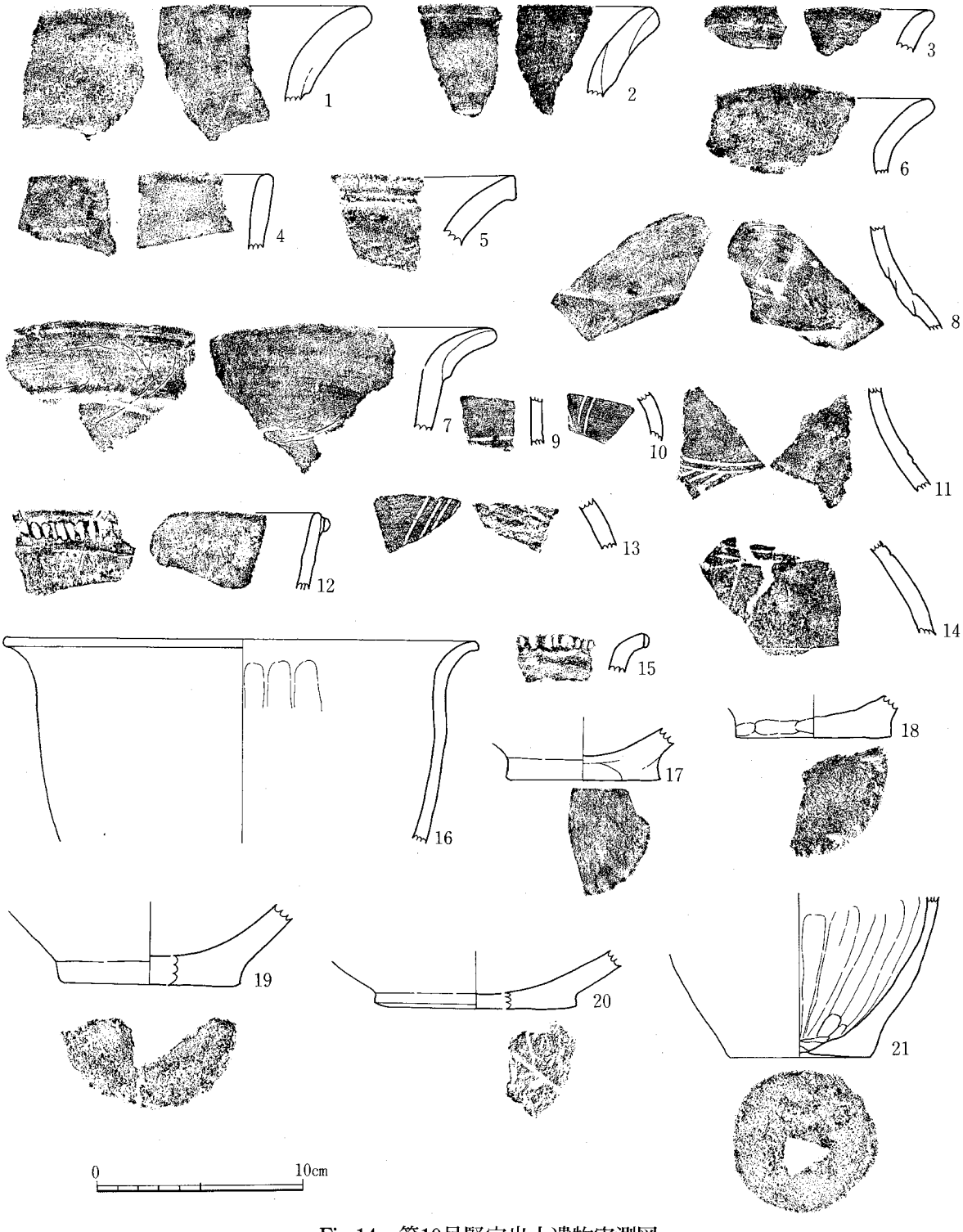


Fig.14　第10号竪穴出土遺物実測図

境は粘土帯の接合部にあたり、段を形成している。また、粘土帯の接合部が明瞭に残っている。粘土帯の幅は1.5cm、0.7cmを測る。粘土帯の接合はいずれも内傾接合である。胎土は石英・長石の砂粒を若干混入するが、精製され良質。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面は褐色をなす。小壷である。9は頸部と胴部の小破片。頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらしている。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質。焼成は良好。色調は外面が黄白色、内

面が黄赤色をなす。10は小壷の胴部破片。細かい沈線で文様が描かれる。全体は残っていないが重孤文になると考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整。胎土は精製され極めて良質。焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面は黒色をなす。11は頸部から胴部にかけての破片。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部にむかってそりかえる。頸部と胴部の境には平行沈線二条をめぐらしている。その下に三本の斜線が描かれるが、全体の文様構成は不明。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、あまり良質ではない。焼成は良好。色調は外面が褐色、黒色顔料が一部に残っている。内面は黄褐色をなす。13は胴部破片。平行沈線三条が斜位に施される。全体の文様構成は重孤文あるいは山形文をなすと考えられるが、破片が小さくて明らかにできない。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横方向のやゝ粗い棒状工具によるナデ調整がみられる。胎土には石英・長石の砂粒が若干混入されるが良質である。焼成は良好、色調は黄赤色で、一部に黒斑がみられる。内面は黄赤色をなす。14は胴上半部の破片。頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらし、さらに胴中位に一条の沈線をめぐらし区画を形成している。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒をやゝ大粒の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黄赤色で、一部に黒斑がみられる。内面は黄白色をなす。12は刻目突帯文の甕形土器。口縁部に接して、断面カマボコ形の貼り付け突帯一条がめぐらされる。刻目は棒状工具で密接して中位の深さで刻まれている。外面は横ナデ調整。内面も横ナデ調整である。外面の突帯以下にはススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黄白色をなす。15、16は如意口縁をもつ甕形土器である。15は口唇部は平坦で、棒状工具による刻目が、口唇部いっぱいに不規則に刻まれる。内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は内外面共、黄褐色をなす。16は復原口径23.1㎝。口縁端部は丸くおさめている。体部は膨らまず、ゆるやかに下方にのびる。器面は外面の下半が縦方向、上半から口縁部にかけてが横方向のナデ調整である。内面は体部上半に指圧痕があり、後から横ナデ調整が加えられている。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入していて、あまり良質とはいえない。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が赤褐色をなす。17～21は底部破片である。17は底部復原径7.5㎝。安定した平底で、円筒状（円盤貼り付け状）の底部から体部は大きく外に張り出す。外底部から外面にかけては丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土は精製されて、きわめて良質である。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が灰褐色をなす。18は底部復原径7.6㎝。安定した平底、側面は指によって円筒状に仕上げられている。内面は刷毛目原体による粗い削りによって調整される。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共に、黄褐色をなす。19は底部復原径9.3㎝。底部形態は円筒状になり、円盤貼り付けの底部に似るが、やゝ粗雑である。体部は大きく外側にはる。中壷の底部と考えられる。外面はやゝ雑な横方向のヘラ研磨調整。内面は丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、あまり良質ではない。焼成は良好。色調は外面が灰褐色～褐色、内面が黒色をなす。20も中壷の底部と考えられる。底部復原径9.8㎝。底部は低い円筒状をなす。体部は大きく外に張り出す。外底部には木葉痕がつく。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はやゝ粗いヘラ研磨調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入し、あまり良質ではない。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面は黒色をなす。21は甕形土器ないしは鉢形土器の底部と考えられる。底部は安定した平底で、体部は内湾気味にたちあがる。底部の中央部に外からあけられた孔がある。孔は2.3㎝×1.9㎝の三角形をなす。外面は横方向～斜方向のヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入し、良質とはいえない。焼成は良好、内外面とも黄褐色をなす。内面には指の圧痕等が残っていることを考

慮すれば鉢形土器の可能性が強い。底部径7.8㎝。

(7) 第11号竪穴（Fig.15）

調査区の西端近くの中央部に検出した貯蔵穴である。第８号竪穴と第１号防空壕と重複関係にあり、共に第11号竪穴を切っている。東に第18号竪穴、西に第21号竪穴、北に第13号竪穴、南に第２号竪穴、南西に第１・３号竪穴が位置しており、それぞれの間隔は、1.3m、0.5m、0.5m、2.4m、1.5～2.3mを測り、他の貯蔵穴とは一定の間隔をもって存在している。検出面で重複遺構が多く、やゝ保存状態が悪いが、高まりの頂部にあるため、他の遺構に比較し、全体の保存状態は良好である。検出面では南北径255㎝、東西径180㎝の長方形プランをなす。壁はほぼ垂直にたちあがり、部分的にわずかに袋状をなす。床面は平坦であるが、本貯蔵穴はさらに二段目の掘り方を有する。一段目掘り方の深さは正確にできないが１m前後である。二段目掘り方は床面の南西コーナーに存在する。二段目掘り方は長径70㎝×短径50㎝の楕円形プラン、横穴状に下方に向って掘り込まれている。長径165㎝、短径130㎝の略隅丸三角形をなす。床面は平坦である。

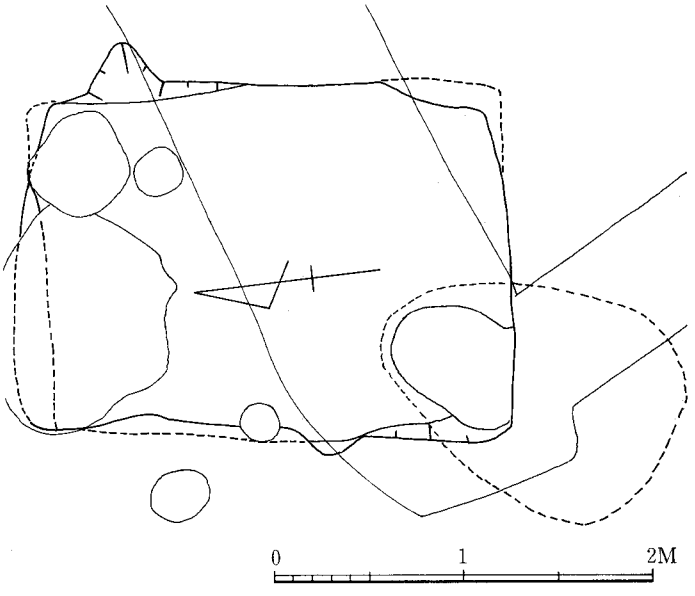


Fig.15　第11号竪穴平面図

出土遺物（Fig.16・17）

遺構の状態が良好であるため、出土遺物の量も多い。土器、石器、黒曜石石片、植物遺体（炭化物）等がある。以下、代表的な遺物について詳述する。

土器（Fig.16・17－１～16）

Fig.16－１～３は壷形土器の口縁部。１は復原口径24.0㎝。中壷である。口縁部は大きく外反し、口縁部は平坦面をつくり出す。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚し、肥厚帯の幅は４㎝、下端にはわずかに段が形成され、凹線一条がめぐる。頸部は外にひらき気味に下る。外面と口縁部内側は横方向のヘラ研磨調整、胴部内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量混入し、良質でない。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～赤褐色、内面が褐色をなす。２は復原口径19.0㎝。口縁は大きく外反し、端部は丸くおさめるが、下端に粘土の折りまげがあり、若干肥厚する。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母の砂粒を多量に混入し、あまり良質ではない。焼成は良好、色調は内外面共に黒褐色をなす。３は復原口径30.4㎝。大壷である。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させるが、さらに、肥厚帯の下半に粘土を貼り付け、厚さを増し、下端の段は明瞭である。口縁端部は丸くおさめ、粘土接合部に沈線一条をめぐらしている。頸部は直立している。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝあまい。色調は外面が白黄色～黄赤色。内面は黄赤色をなす。４は小壷、頸部

から胴部にかけての破片である。頸部復原径11.3㎝。胴部最大復原径24.0㎝を測る。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部にむかってゆるやかにそりかえる。頸部と胴部の境には段を有する。胴の膨らみは大きくない。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胴上半に黒色の暗文風に線が一条めぐっている。元来は彩文文様が施されていたと考えられる。内面は横ナデ調整。頸部と胴部の境の粘土接合部が段として明瞭に残っている。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻。色調は外面が黄褐色～黒褐色、黒色顔料が塗布されているとみられる。内面は白黄色をなす。5、6、8、9は壷形土器の口縁部破片。5は大壷の口縁部。口縁部には粘土を貼り付け肥厚させている。口縁端部は面取りがおこなわれ、断面方形をなすが、口縁内側端部が突起状につまみあげられている。口縁下端の段はゆるやかで不明瞭、凹線一条がめぐる。器面は内外面共に横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に白黄色をなす。6は中壷の口縁部。口縁上半が大きく外反し、端部は隅丸の方形に仕上げる。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させる。下端には段を形成する。肥厚帯の幅は3㎝前後である。内外面は横方向のヘラ研磨調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、内外面共に褐色をなす。8は口縁はわずかに外反し、端部は丸くおさめている。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が褐色～黒褐色をなす。甕形土器あるいは鉢形土器の可能性もある。9の口縁部は大きく外反する。端部は丸くおさめる。器面の内外面はやゝ粗いヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。11、12、14～19は壷形土器の頸～胴部の破片である。11は頸部が内傾し、頸部と胴部の境には、やゝ太い凹線一条をめぐらす。外面は横、斜方向のヘラ研磨調整で、内面は斜方向のヘラ研磨調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入し、質は良くない。焼成は良好。色調は内外面共に褐色をなす。12は頸部が内傾しながらたちあがる。頸部と胴部の境にはわずかな段が形成される。外面は焼成前の丹塗りで横方向のヘラ研磨調整が施される。内面は斜方向の刷毛目調整で、上に横ナデ調整が加えられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒が混入されるが良質である。焼成は良好、色調は外面が丹色、内面は赤黄色をなす。14は頸部と胴部の境に沈線一条をめぐらす。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁にむかって反転している。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。粘土帯の接合は外傾接合になっている。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入しているが、比較的良質。焼成は良好で、色調は外面が白黄色、内面が灰青色をなす。15は胴部上半部破片。頸部と胴部の境よりやゝ下った所に平行沈線三条をめぐらし、その下位にやゝ間をおいて三条からなる重孤文を配している。重孤文の沈線は平行沈線に比して非常に細かい。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は器面があれていて詳細は不明。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共に黄褐色をなす。16は頸部と胴部の境に沈線一条をめぐらすが、それ以外に大きな変化はない。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は斜位の刷毛目調整の上に横ナデ調整を加える。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。17は頸部から胴部にかけての破片。大壷である。頸部と胴部の境は凹線状の凹みになり、わずかに段がつく。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面には指圧痕が残り、上に横ナデ調整を加える。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が暗黄褐色をなす。18、19は胴部破片。18は三条の平行沈線で重孤文が描かれる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。19は胴上半部。胴下半に文様の画する沈線一条をめぐらし、上部にヘラ描きの文様を配する。文様は二度にわたって描かれている。最初は細かい沈線一条

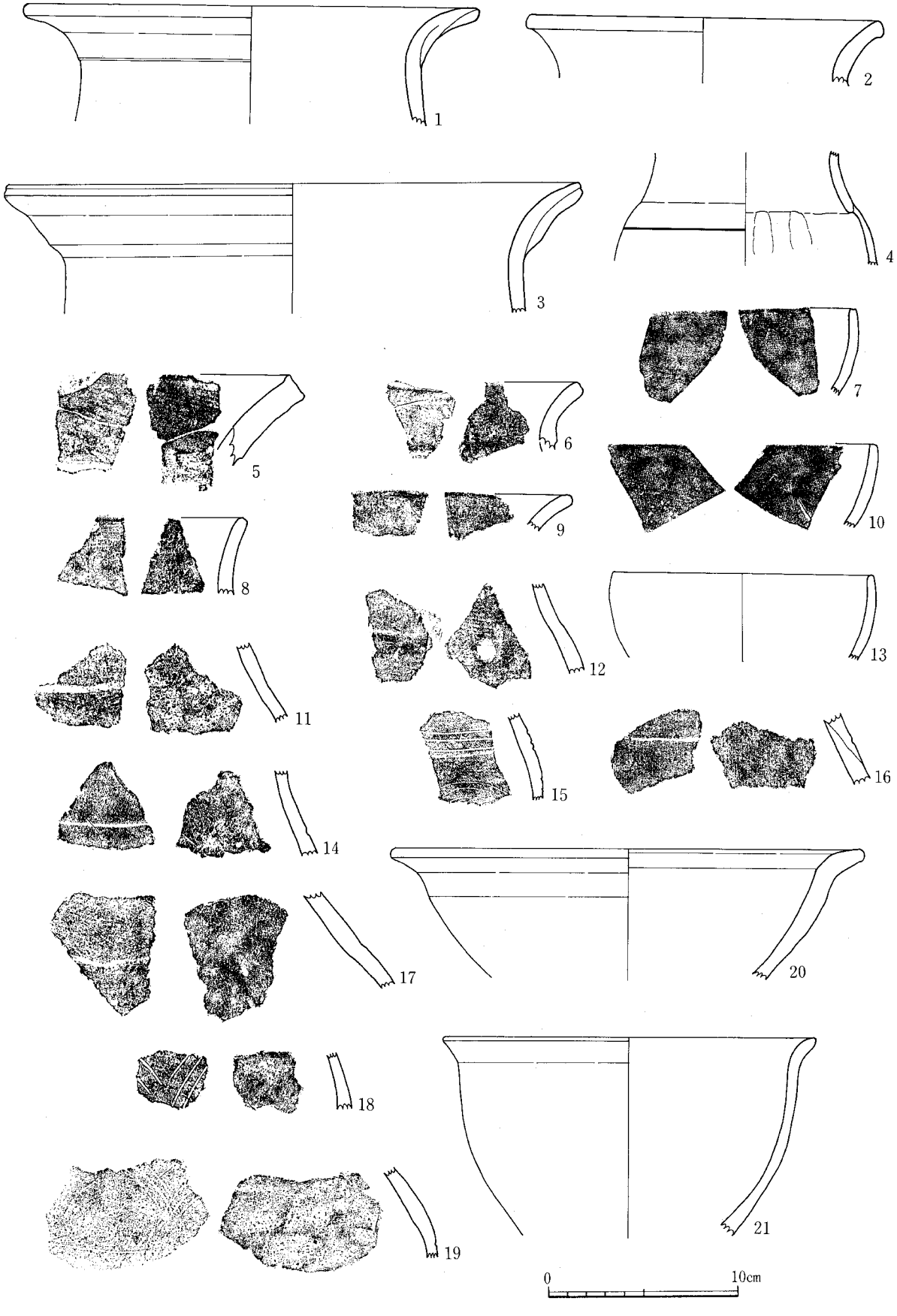


Fig.16　第11号竪穴出土遺物実測図Ⅰ

で円孤文が描かれ、次いで、やゝ太目の沈線三条によって重孤文を連続して描いている。器面の保存状態が良くないため、調整等は不明であるが、内面はヘラによる削り状の調整とみられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入し、質は良くない。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面は黄灰色をなす。7、8、13は椀形土器、7、8は同一個体とみられ、13は復原図である。口縁部は丸くおさめる。器面は内外面も横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され、きわめて良質。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が黄褐色をなす。復原口径13.8㎝を測る。20、21は鉢形土器。20は口縁部はわずかに肥厚し、口縁部は丸くおさめている。口縁は如意形に外反し、頸部はくびれる。頸部内側には稜線が形成される。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は内外面共に赤褐色をなす。復原口径25.0㎝を測る。21は口縁は如意形に外反する。わずかに肥厚し、下端にわずかな段ができている。肥厚部の幅1㎝前後、頸部はわずかにくびれている。体部はゆるやかにカーブを描いて底部に移行する。底部形態は不明。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。ススが付着している。内面の体部上半は指による圧痕がつき、上から横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが良質である。色調は外面が黄褐色、内面が黒色をなす。復原口径19.6㎝を測る。

Fig.17－1～7は刻目突帯文土器の甕形土器である。1は口縁部に接して高い貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は刷毛目原体で深く密接して刻まれている。外面は横～斜方向に刻目と同一原体で細かい刷毛目調整を施している。口縁と突帯の上面にはナデ調整が加えられ平坦面をつくり出している。内面は口縁部近くに一部刷毛目調整がみられるが、他は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に含み、良質ではない。焼成は良好。色調は外面が褐色～黒褐色、内面は黒褐色をなす。2は口縁よりや下って貼り付け突帯一条をめぐらす。突帯は断面三角形で、刻目は浅い。器面は磨滅し、調整痕は不明。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成はやゝもろい。色調は内外面共に白黄色をなす。3は口縁部に接して断面三角形の貼り付突帯一条がめぐる。刻目はヘラによる刻み。外面は横方向のヘラナデ調整、内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質。焼成はやゝ不良。色調は外面が赤褐色～黒灰色。内面は褐色をなす。4は口縁に接して断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具によるとみられるが浅い。外面は板ナデ調整、内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し質が悪い。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黄赤色をなす。外面にススが付着する。5は口縁部に接して断面三角形の小さな貼り付け突帯一条がめぐる。刻目は棒状工具で深く刻まれ、突帯下の延長部に刺突痕がみられる。内外面共に横ナデ調整が加えられる。胎土に石英・長石の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黄赤色をなす。6、7は胴屈曲部に刻目突帯をめぐらしている。6は突帯の断面が三角形をなし、刻目はヘラによる。外面は横方向のやゝ粗いヘラナデ調整。内面は横ナデ調整。外面にはススが付着する。胎土には石英・長石のやゝ大きい粒の砂粒が混入され、質はあまり良くない。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。7は断面三角形の貼り付け突帯で刻目はヘラによる。全体に磨滅し、器面の調整痕等は不明。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成はやゝもろい。色調は白黄色をなす。8～11は如意形口縁をもつ甕形土器。8は口縁端部は丸くおさめる。口唇部の刻目は細い棒状工具でいっぱいに刻まれている。内外面共に横ナデ調整。外面にススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。9は口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめるが、下端部が低い突帯状をなし、その部分に刷毛目原体で刻目が施される。外面は下半部が縦方向のヘラナデ調整。上半の口縁周辺は横ナデ調整である。下半にススが付着している。内面の口縁下には指圧痕があり、口縁部には横方向の刷

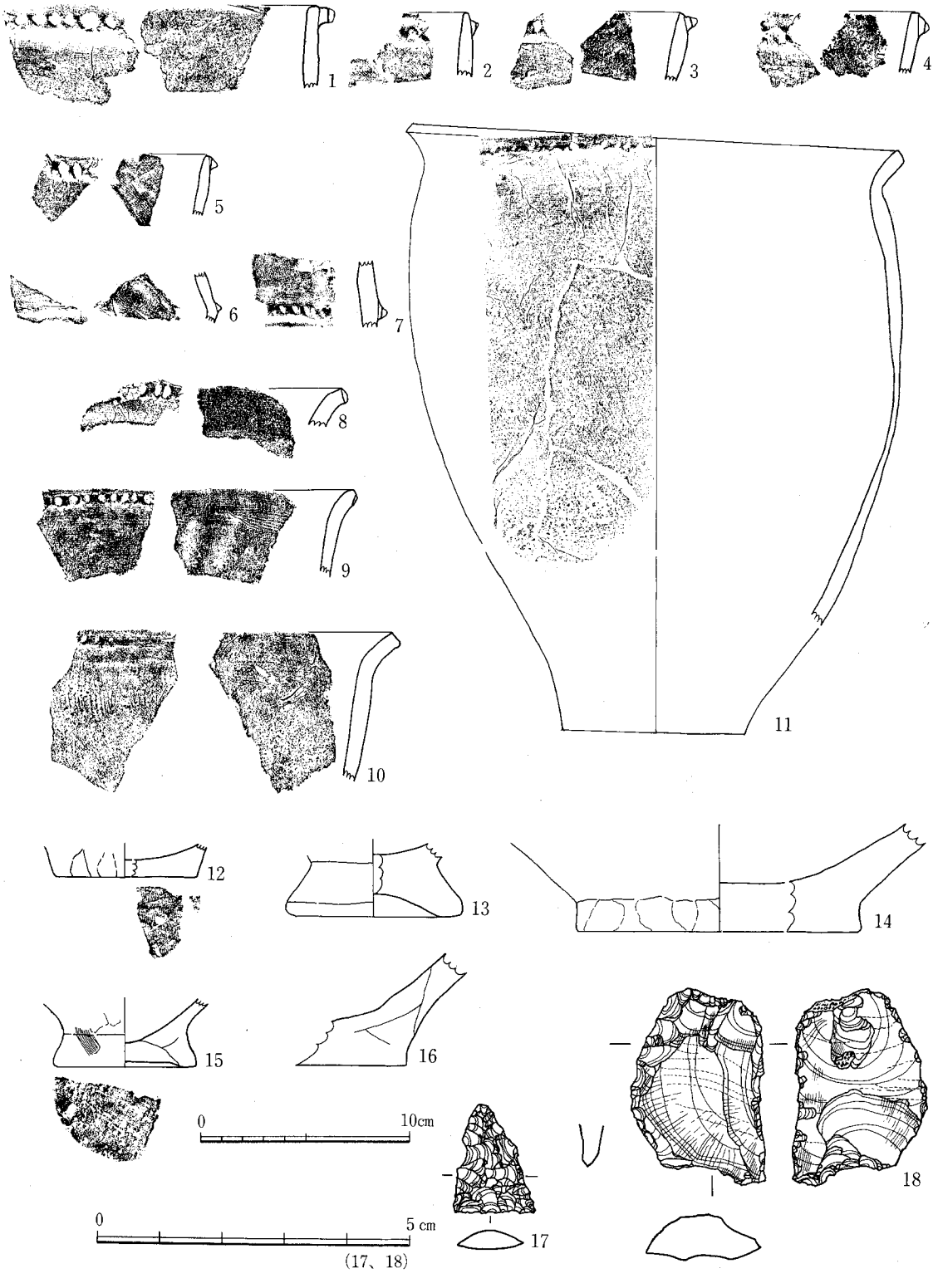


Fig.17　第11号竪穴出土遺物実測図Ⅱ

毛目調整、下半に横ナデ調整がみられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが、比較的良質。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。10は口縁部が外反し、端部は方形に仕上げる。外面は縦、斜方向の刷毛目調整を施すが、刷毛目の始点をそろえているために、口縁部が幅１cm前後で肥厚しているように見える。口縁部の内外面は横ナデ調整であるが、口縁内側はナデの

下に横方向の刷毛目調整が施されている。胎土には石英・長石・赤色鉱物の砂粒が混入されているが良質。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黄赤色をなす。外面にはススが付着している。11は口径23.9cm。推定器高27.6cmを測る。底部を除いてほぼ完形に復原できる。口縁部は頸部で屈曲し、くの字形におれるように外反し、口縁端部は方形に仕上げる。胴部は頸部から膨らみ気味に下り、胴部最大径は中位にあり23.8cmを測り、ほぼ口径と同じである。外面胴部は縦方向の刷毛目調整で、ススが付着している。口縁部の内外面は横ナデ調整。内面の胴上半部には指圧痕が残り、ナデ調整が加えられている。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色をなす。12～16は底部。12は底部復原径7.0cm。体部は底部からそのままたちあがる。外面はヘラで面とりがしてあり、外底部は粗いヘラ研磨調整、内面はヘラ研磨調整。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒を混入し質が悪い。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が白黄色をなす。13は底部復原径8.5cm。底部端が外側に大きくひらき、高い台形状をなし、脚台状にあげ底になっている。内外面は指ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄赤色をなす。甕形土器の底部とみられる。14は大壷の底部、復原径13.6cm。底部は円筒状にたちあがり、体部は外傾しながらたちあがる。外面はやゝ粗いヘラ研磨調整。内面は保存状態が悪いため詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が褐色～桃色、内面が白黄色をなす。15は甕形土器の底部。復原径6.8cm。底部端が外に張り、断面は台形状をなす。外底部はヘラ削り状の調整であげ底状になる。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面はヘラナデ調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。16は大壷の底部。外面は焼成前の丹塗りで、横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入、質が良くない。焼成は良好。色調は外面が赤色、内面は黄赤色をなす。

石器（Fig.17—17・18）

石鏃と削器の２点がある。17は漆黒の良質の黒曜石を素材とした打製石鏃である。長1.75cm　幅1.3cm　厚さ0.35cm　重さ0.57ｇの三角形をしている。表裏共に丁寧な押圧剥離で成形されている。断面は凸レンズ状をなす。18は17同様に漆黒で良質の黒曜石を素材としている。長3.15cm、幅2.2cm、厚さ0.65cm。押圧剥離を加え刃部を形成している。

(8)　第12号竪穴（Fig.18）

調査区のほぼ中央部に検出した貯蔵穴である。他の遺構との重複はみられず単独で、前期の貯蔵穴の分布の中心に位置している。東に第９号竪穴、西に第７号竪穴、南西に第18号竪穴、南に第１号防空壕が分布し、それぞれとの距離は、0.4m、1.4m、1.0m、0.2mを測る。第12号竪穴は現状で東西径110cm、南北径100cmの不整の隅丸方形をなす。深さ96cmを測る。壁は袋状に20cm前後も掘り込まれている。床面は平坦で、ほぼ円形プランをなすが、部分的に壁の崩落によって不整形となっている。床面には北壁に沿った東と西の二ケ所に柱穴状の掘り込みがみられる。柱穴間は約60cm離れている。東側の柱穴は36cm×34cmのほぼ円形で壁側に斜に掘り込まれ、深さ50cmを測る。西側の柱穴は34cm×30cmのほぼ円形、深さ10～16cmで壁側が深くなっている。

土層堆積をみていこう。第１層はレンズ状に堆積している。厚さ22cm。暗黒褐色土層でロームを含んでいる。第２層は貯蔵穴の全面を厚く覆う層である。褐色土層（ローム再堆積層）。厚さ５～20cm。この層にはほとんど遺物を含んでおらず、一気に埋ったと考えられる。第３層、ロームを若干含んだ

淡黒褐色土層、厚さ４～26cm。第４層黒褐色土層、厚さ10～25cm、第５層、ローム、炭化物を若干含んだ暗茶褐色土層、厚さ10～25cm。第３～５層は逆凸レンズ状の堆積状態を示し、壁体の崩落と流れ込んだ土層の堆積で、遺物を多量に含んでいる。第６層は床面の壁際にレンズ状に堆積する土層である。ロームを若干含んだ暗茶褐色粘質土層。厚さ５cm前後。第７層、中央部に部分的に堆積する土層。ロームを多量に含んだ暗黄褐色土層、厚さ６cm前後。第８層　第７層の下に部分的に堆積する層。やゝ粘質でロームを含んだ黒色土層。厚さ４cm前後。第９層、第６層同様に床面の壁際に輪状に部分的に堆積する土層で、ロームブロックを多量に含んだ黒色土層である。厚さ10cm前後。本竪穴が廃棄された後、第９層から堆積が始まるが、第９層から第３層までは壁の崩落がやみ、流入土のみの堆積となる。よって、出土遺物にも大きな違いがある。第３層以下は前期遺物、第１、２層は中期遺物を含んでいる。

出土遺物（Fig.19）

出土遺物には土器、石器、黒曜石石片、炭化物等がある。遺構の遺存状態が良好であるため量的には多いが、いずれも胴部破片が多く、図化できるものは少ない。出土遺物は下層と上層出土に大別され、上層は中期まで下る。本貯蔵穴が長い間にわたって凹みとして残っていたことがわかる。

土器（Fig.19－１～35）

１～６は壷形土器の口縁部である。１は口縁部がわずかに外反し、端部は丸くおさめる。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され良質、

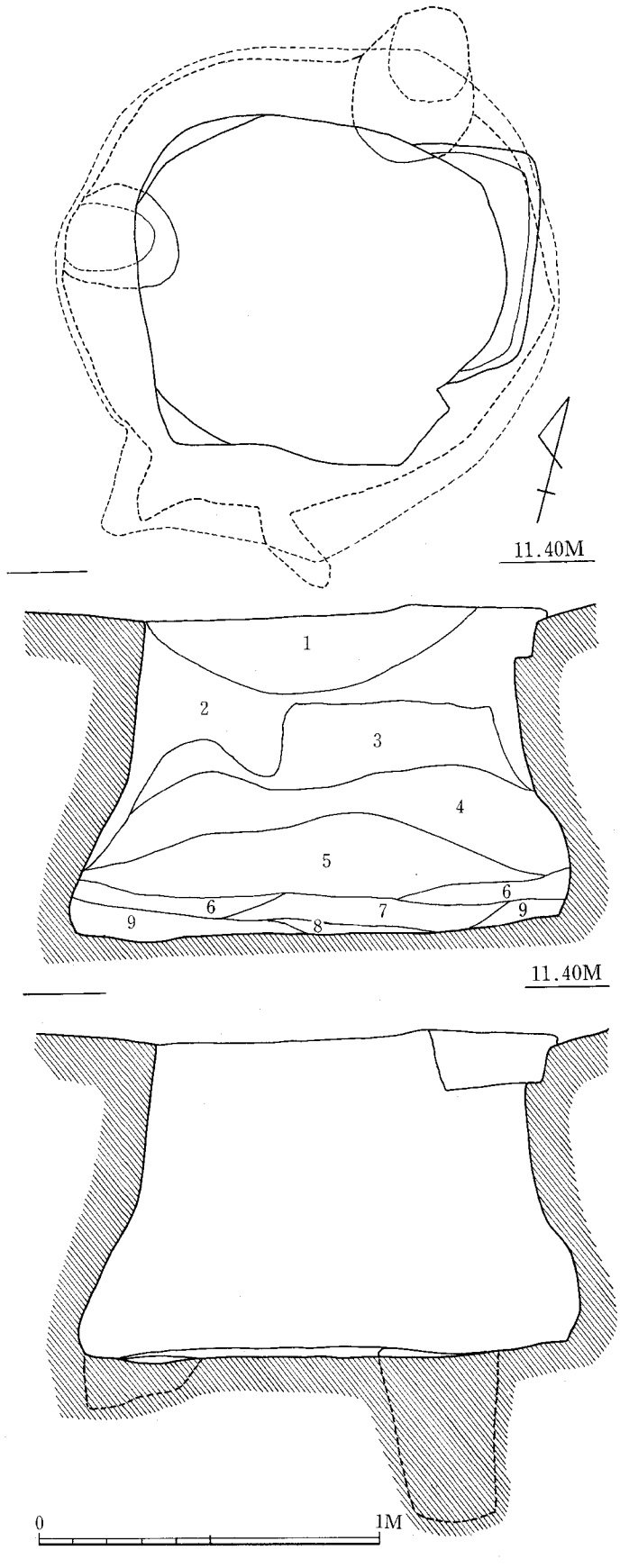


Fig.18　第12号竪穴実測図

焼成は良好、内外面共黒褐色をなす。２は口縁部が直線的に大きく外反し、端部は丸くおさめる。外面は横ナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。３は小壷の口縁部である。口縁は大きく外反し、端部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され極めて良質、焼成は良好、色調は内外面共白黄色をなす。４は大壷の口縁部、外傾しながらたちあがり、端部が大きく外反する。端部は肥厚気味に丸くおさめる。口縁部は幅４㎝前後の粘土帯を貼り付け全体に肥厚させている。口縁下端には明瞭な段を形成している。器面の調整は保存状態が悪く不鮮明であるが、内外面共、横方向のヘラ研磨調整とみられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄白色、内面が黄赤色をなす。口縁部外面に小さな黒斑がみられる。５は大きく外反し、端部は隅丸の方形におさめられ、口唇部の中程に凹線状の痕跡が残っている。口縁部の粘土帯貼り付けの痕跡とみられ、口縁部が帯状に肥厚されていたことがわかる。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共赤褐色をなす。８は小壷の口頸部破片である。復原口径12.1㎝、口縁端部を欠いている。口縁部はわずかに肥厚するが、下端の段は不明瞭、口縁部と頸部の境に細かい沈線一条をめぐらしている。頸部は内傾気味に直線的にたちあがっている。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面は黄赤色をなす。６、７、９～16は壷形土器の頸～胴部破片である。６は大壷、頸部と胴部の境に細かい沈線一条をめぐらす。胴部は境から肩が形成されるとみられる。外面は横・斜方向、内面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が赤褐色、一部に黒斑がある。内面は赤褐色～黒褐色をなす。７は小壷、頸部は内傾しながら直線的にたちあがる。頸部の下半に細かい沈線二条が平行してめぐる。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、色調は内外面共褐色をなす。９は胴部破片、細い沈線で文様が描かれる。文様は肩部に平行線二条をめぐらし、その下に三本の平行沈線で山形文が描かれている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は器面が剥離している。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入している。焼成は良好、色調は外面が黒褐色をなす。10は頸部と胴部の境に沈線をめぐらし、わずかな段を形成している。胴上半部には境の沈線も含めて四本の平行沈線をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は指による押圧の調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に含んでいる。焼成は良好、色調は内外面共白黄色をなす。11は中壷の頸部破片。頸部は内傾しながら直線的にたちあがる。頸部と胴部の境に一条の沈線をめぐらす。器面はあれていて調整痕は不明。粘土帯の接合は外傾接合である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は内外面共、白黄色をなし、外面には黒斑がある。12は小壷の頸部破片である。外面は細かい三条の平行沈線を斜位に施している。器面は外面が横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は器面が剥離し、詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが良質、焼成は良好である。色調は赤褐色をなす。13は小壷の胴部破片。上位に平行沈線三条をめぐらし、その下位に継線があるが文様構成は不明。外面は横方向のヘラ研磨調整である。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。14は小壷の胴上半の破片である。頸部と胴部の境に凹線一条をめぐらす。破片の上下端に粘土接合痕が明瞭に残っており、粘土帯の幅を知ることができる。接合は外傾接合である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は上位にヘラ削状のナデが施され、下位は横ナデ調整である。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻。色調は外面が黄褐色、内面が黄灰色をなす。15は中壷の胴部破片。全面に細かい沈線で有軸羽状文が描かれている。器面は外面が横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整

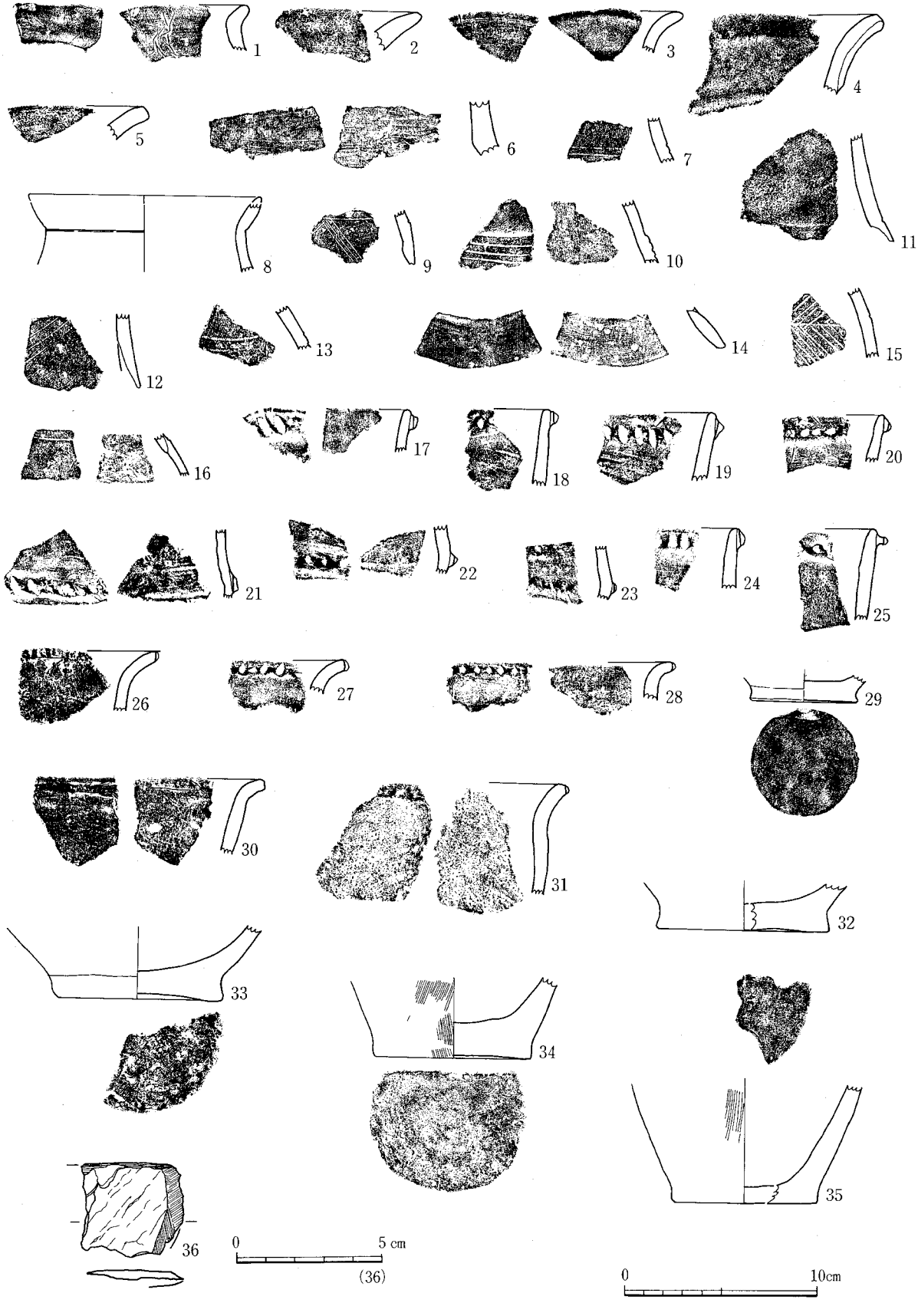


Fig.19　第12号竪穴出土遺物実測図

である。胎土に石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。16は小壷の胴部破片。頸部と胴部の境に細い沈線一条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整。頸部と胴部の境の粘土接合部に段が形成される。胎土には砂粒が若干混入するが、精製され良質。焼成は良好、色調は内外面共黄赤色をなす。17～25は刻目突帯文土器の甕形土器、一条突帯と二条突帯の二種類がある。17は口縁よりやゝ下に断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具により深く刻まれる。外面は横方向の貝殻条痕の上から横ナデ調整を加える。内面は横ナデ調整、口縁部は丸くおさめている。胎土には石英・長石の砂粒を含んでいる。焼成は良好。色調は黄白色をなす。18は口縁部に接して断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具によると考えられるが、比較的浅い。内外面の調整は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入する。焼成は良好、内外面共黄赤色をなす。19は口縁よりやゝ下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。突帯の刻目は棒状工具により深く刻まれる。器面には横方向の貝殻条痕を施す。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。色調は内外面とも黄褐色をなす。20は口縁部に接して斜に断面三角形の貼り付け突帯一条がめぐらされる。突帯の刻目は刷毛面原体によるが、きわめて浅い。器面の外面は横方向の刷毛目調整、内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が褐色をなす。21は屈曲部に貼り付け突帯一条をめぐらしている。上部は内傾し、反転しながらたちあがる。突帯は保存状態の良い所は断面三角形をなし、刻目は棒状工具によって深く刻まれる。外面は横ナデ調整で、突帯下にススが付着している。内面は横方向の貝殻条痕調整、胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色で、突帯下にススが付着する。内面は黄褐色をなす。22も屈曲部の破片である。屈曲部は粘土接合部にもなっており、接合部が明瞭に残っている。接合は内傾接合である。貼り付け突帯は断面三角形、刻目は細かい棒状工具によって浅く刻まれる。内外面共横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入する。焼成は良好、色調は内外面共、黄褐色をなす。23も屈曲部に貼り付け突帯一条をめぐらす。突帯は断面カマボコ形をなし、刻目はヘラによって浅く刻まれる。器面は内外面共ヘラ削り状の調整。突帯下にススが付着している。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に黄褐色をなす。24は口縁に接して断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。口縁端部は丸くおさめられ、突帯の刻目は刷毛目原体で深く刻まれる。外面は横方向の刷毛目調整を施す。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石等の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が白黄色をなす。25は口縁部に接して断面三角形の高い貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具によって浅く刻まれる。器面は内外面共に横ナデ調整である。胎土には石英・長石・角閃石・金雲母の砂粒を混入するが、良質である。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面は黄赤色をなす。26～28、31は如意形口縁をもつ甕形土器である。26は刻目が口縁端部全体に施される。器面は外面が粗いヘラ研磨調整、内面は保存状態が悪く不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝあまい。色調は内外面共に赤褐色をなす。27は口縁端部は隅丸の方形に仕上げられ、端部いっぱいに刷毛目原体によって刻目が施されている。器面は口唇部に横方向の刷毛目調整が施され、内外面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが良質である。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が灰褐色をなす。外面にススが付着する。28は端部を丸くおさめる。口唇部にヘラによる刻目を施している。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整、外面から口縁内側にかけてススが付着するが、特に口縁内側にかけて著しい。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入していて良質でない。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。31は

口縁端部は丸くおさめる。刻目は浅く不明瞭である。外面は横ナデ調整。内面は上半部は横ナデ調整、下半部には横方向の貝殻条痕調整が施される。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入していて良質でない。焼成は良好。色調は白黄色をなす。30は如意形の口縁をもつ。端部は肥厚気味に丸くおさめる。頸部は凹線状にくぼませる。器壁の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。鉢形土器である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、良質でない。焼成は良好、色調は外面が黄褐色で一部黒斑がある。内面は黒色をなす。29、32～35は底部破片である。29、32、33は壷形土器、34、35は甕形土器の底部である。29は小壷の底部、底部径5.8cm。円盤貼り付け状をなすが、底部端が外に張り出す。外面はヘラ研磨調整で丹塗りの痕跡が認められるが保存状態が悪い。外底部はヘラ削り状の調整で、凹凸がみられる。内面はナデ調整である。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好、色調は内外面は白黄色をなす。底部の内外面の一部に黒斑がみられる。32、33は大壷の底部。円盤貼り付け状をなし、底部は円筒状になっているが、端部が若干外に張り出す。共にやゝあげ底状をなす。32は全体に丁寧につくられている。内外面はヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが、良質である。焼成は良好、色調は内外面共褐色をなし、外面の一部に黒斑がある。底部復原径9.0cm。33の器面は、外面が粗いヘラ研磨調整、内面は粗いヘラケズリ状の調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、良質ではない。焼成はやゝ不良、色調は内外面共赤褐色をなす。底部復原径8.8cm。34は安定した平底。底部径8.2cm。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面は縦方向の細かい刷毛目調整を丁寧に施している。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色～褐色をなす。35は体部がふくらみ気味にたちあがる。外面には縦方向の刷毛目調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石等の砂粒を多量に混入し、良質でない。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が黄褐色をなす。復原底部径7.6cmを測る。

石器（Fig.19－36）

頁岩を素材としている。剥離し、片面のみが残存している。背は研磨が加えられ、直線をなす。背以外には刃部形成のための研磨が加えられている。現存長3.6cm、幅3.3cmを残すのみである。

(9) 第13号竪穴（Fig.20）

調査区の西端中央部に検出した貯蔵穴である。周囲には遺構が密集し、第17号、18号と重複関係にあり、いずれも、第13号竪穴が切っている。また、北側には第16号竪穴が、南側には第11号竪穴が位置しており、それぞれの間隔は1.0m、0.7mを測る。第13号竪穴は現状で、東西径190cm、南北径180cmのほゞ方形プランをなす。壁は西壁を除いて、東・南・北壁はいずれも、わずかに袋状をなす。壁のはいり込みは15cm前後である。床面は平坦で、東西径180cm、南北

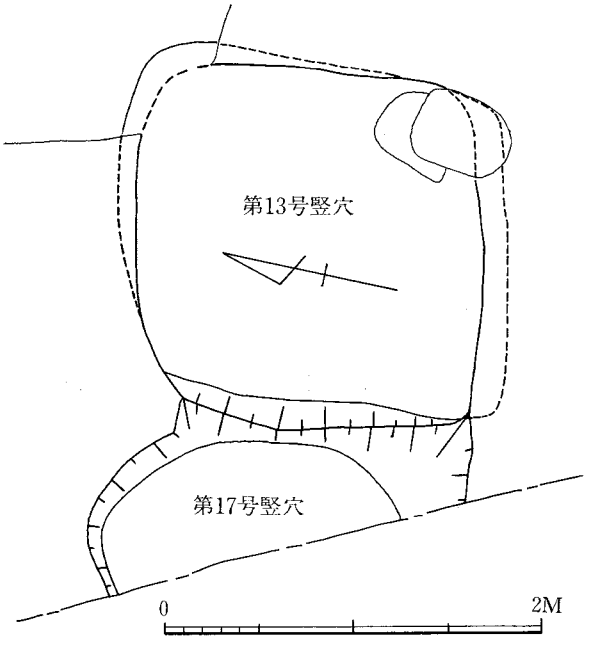


Fig.20　第13・17号竪穴平面図

210㎝を測り、わずかに南北径が長い長方形プランをなす。

出土遺物（Fig.21～23）

出土遺物には土器、石器、滑石製勾玉、黒曜石石片、炭化物等がある。遺構の遺存状態が良好で、遺物量は多いが、いずれも小破片で、全形がわかるような遺物はない。

土器（Fig.21・22）

Fig.21－1～8は刻目突帯文土器の甕形土器である。1は口縁部に接して断面三角形の比較的高い貼り付け突帯一条がめぐる。刻目は棒状工具によって刻まれる。外面は横方向の貝殻条痕で、上に横ナデが加えられる。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄白色、内面は赤褐色をなす。外面にはススが付着する。2は口縁に接して断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は条痕原体によって太く刻まれる。外面は横ナデ調整。ススの付着が顕著である。内面は横方向の貝殻条痕調整後、横ナデ調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は褐色をなす。3は口縁に接してやゝ高い貼り付け突帯一条がめぐる。刻目はヘラによって深く刻まれる。外面は横方向の板ナデ調整。ススの付着がみられる。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄白色をなす。4は口縁よりやゝ下って低い貼り付け突帯一条をめぐらす。口縁はヘラによって平坦に仕上げる。刻目はヘラによるとみられる。内外面は横方向の貝殻条痕調整。外面にススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質である。色調は外面が褐色、内面が赤白色をなす。5は口縁部に接して断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は浅い。外面に板ナデ調整が施され、さらに横ナデ調整が加えられる。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが、質は良い。色調は外面が黄褐色、内面は赤褐色をなす。6は口縁に接して断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目はヘラによって斜位で深く刻まれる。外面は横方向の板ナデ調整。スリップをかける。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒若干を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に白赤黄色をなす。7は口縁に接して断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具で斜位に深く刻まれている。外面はヘラナデ調整。内面は横ナデ調整。外面にはススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入する。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面は灰褐色をなす。8は屈曲部に断面カマボコ形の貼り付け突帯一条をめぐらす。突帯には指による太目の刻目が施される。外面は横方向の貝殻条痕調整。内面は横ナデ調整、粘土帯の接合部が残っている。粘土帯の幅は1.7㎝前後で内傾接合である。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質である。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は赤褐色をなす。9～27、30は如意形の口縁をもつ甕形土器である。9は口縁部が外反する。口縁は丸くおさめ、端部いっぱいに棒状工具による刻目が施される。内外面共に保存状態が悪く調整痕は不明瞭であるが、共に横ナデ調整とみられる。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は外面が赤褐色、内面が黄白色をなす。10は口縁はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめる。口唇の下半にヘラによる刻目を施す。体部はやゝ膨らむ。器面は内外面共に横方向の細かな刷毛目調整、口縁の内外はさらに横ナデ調整を加える。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共に白黄色をなす。11は口縁がゆるやかに外反し、端部を折りまげ突帯状に肥厚させている。端部にヘラによる刻目がつく。体部は膨らみ気味に下る。外面は横ナデ調整。内面は横方向の刷毛目調整後、横ナデ調整を加えている。外面にはススが付着している。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼

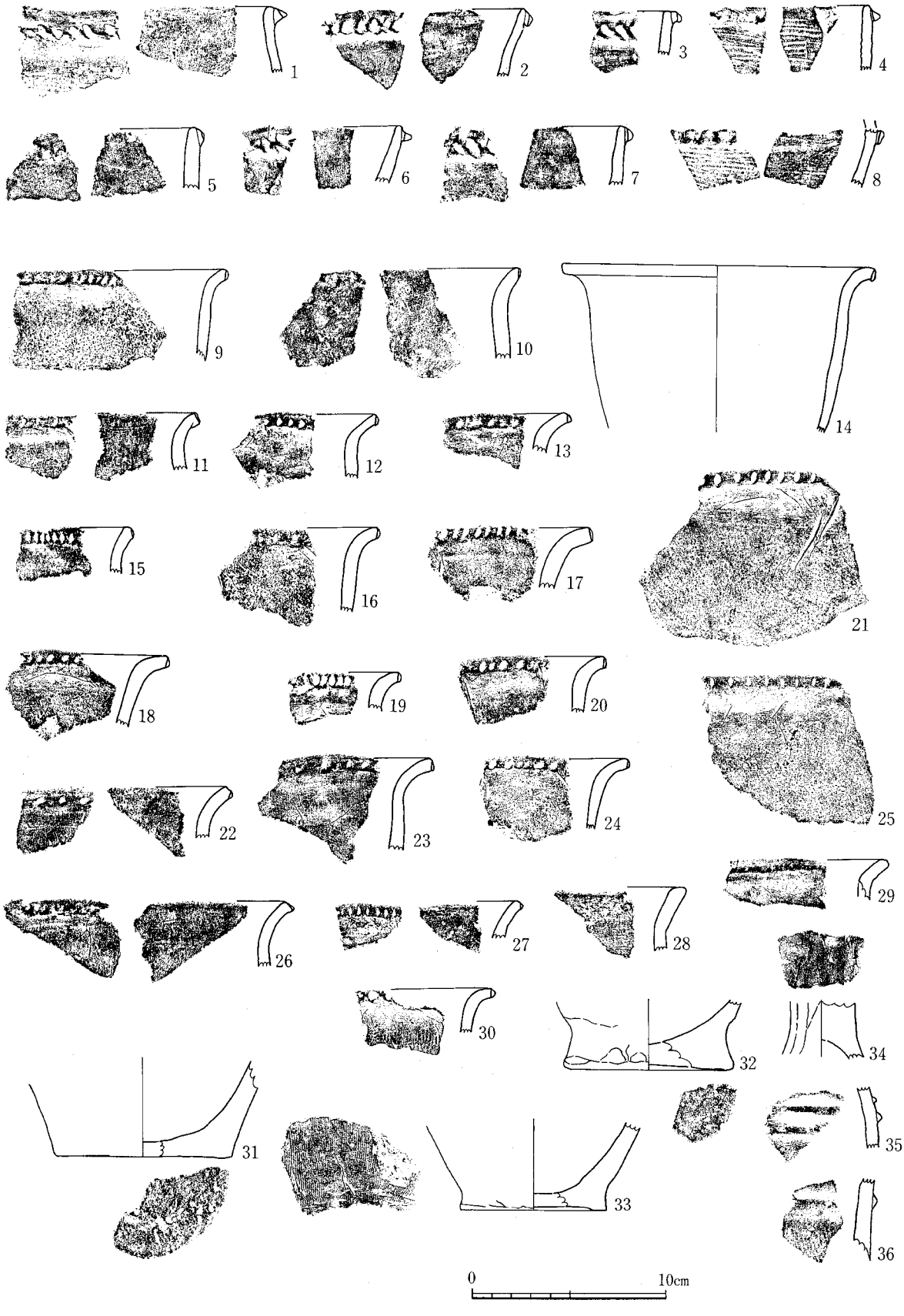


Fig.21　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅰ

成は良好。色調は外面が灰褐色、内面は黄褐色をなす。12は口縁は屈曲し外反する。端部は丸くおさめ、下半にヘラによる刻目が施される。器面は内外面共に横ナデ調整。体部は膨らむと考えられる。外面にはススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒が多量に混入される。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。13は口唇部いっぱいに棒状工具による刻目を施す。内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を混入する。焼成は不良。色調は外面が褐色、内面が白黄色をなす。14、21、25は同一個体。復原口径15.2㎝。口縁部は外反し、体部は直線的に下る。刻目は口唇部いっぱいに棒状工具によって施される。外面は縦方向の細かい刷毛目調整後、横ナデ調整を加えている。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が褐色をなす。15の口縁はほとんど外反しない。口縁端部は丸くおさめ、下半にヘラによる刻目を施す。外面は横ナデ調整、ススが付着する。内面も横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に白黄赤色～黒褐色をなす。16は口縁端部を丸くおさめる。器面の保存状態が悪いので、調整等の詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に黄赤色をなす。17は口縁端部を丸くおさめ、口唇部いっぱいにヘラによる刻目を丁寧に刻んでいる。外面は横ナデ調整。内面は保存状態が不良で、調整痕等は不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し不良。焼成はやゝもろい。色調は外面が黄白色、内面が赤黄色をなす。18は体部が外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部が大きく外反し、端部は丸くおさめている。刻目は棒状工具によって口唇部の下半に施されている。内外面は器面の保存状態が悪いため詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。19は口縁は大きく外反し、口縁端は丸くおさめる。刻目は棒状工具で上から下に押さえるように口唇部いっぱいに深く刻まれる。器面の内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黄褐色をなす。20は口唇部の下半に棒状工具による浅い刻目が不規則に施される。外面は縦方向のヘラナデ調整で、外面の口縁部から内面にかけては横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面は黄赤色をなす。22は口縁部がゆるやかに外反する。口唇部の刻目は、口唇の下半に棒状工具によって斜位に浅く刻まれている。口唇部の中央に浅い沈線一条がめぐり、刻目はそれ以下に存在する。口縁の内側面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に白黄色をなす。23は22ときわめて良く類似しており、同一個体の可能性もある。胴部はやゝ膨らみ、斜位の刷毛目調整。胴部内面には指圧痕が残り、斜位の刷毛目調整が施される。胎土、焼成は22と同様、色調は内面が黄赤色をなす。24は20と同一個体である。26は口縁がゆるやかに外反する。口唇部は隅丸方形で下端に粘土の折返しがみられる。刻目は棒状工具で不規則に施されている。外面は縦位の刷毛目調整であるが、刷毛目の起点が口縁下0.5㎝にそろえられ、口縁部にわずかな肥厚帯をつくり出している。内面は横方向の刷毛目調整後、さらに横ナデ調整が加えられている。外面にはススが付着している。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面は黄赤色をなす。27は口縁部はゆるやかに外反する。端部は丸くおさめ、口唇下端にヘラによる刻目を入れている。口縁内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は黄白色をなす。30は口縁が短かく外反する。口縁端部は丸くおさめている。刻目は刷毛目原体で、口唇部いっぱいに深く刻まれている。外面は縦方向の細かい刷毛目調整で、さらに口縁部には横ナデ調整を加えている。内面は横ナデ調整である。外面ススが付着する。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面は黄褐色をなす。28は鉢形土器と考えられる。口縁は屈曲し、わずかに外反する。端部は隅丸方形に仕上げている。胴

部は膨らむと考えられるが詳細は不明。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面は黄赤色、内面は褐色をなす。29は浅鉢形土器の口縁部と考えられる。口縁は屈曲し外反する。端部は隅丸方形に仕上げられる。内外面は横方向の丹塗り磨研調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は赤色をなす。31～33甕形土器の底部である。31は底部復原径9.0cm。外底部に籾圧痕がみられる。体部は底部から直接外傾しながらたちあがる。外面は器面が荒れていて調整の詳細は不明。内面はナデ調整である。コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が白黄色～黒褐色をなす。32は底部復原径7.6cm。底部は高く、端部は外に張り出し、断面台形をなす。外底部はヘラ削りであげ底状をなす。外面はナデ調整。内面はヘラナデ調整、コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが比較的良質。焼成は良好。色調は外面が赤黄色、内面が褐色～黒褐色をなす。33は底部復原径9.2cm。やゝあげ底状をなす。体部は外傾し、直線的にたちあがる。外面には縦方向の細かい刷毛目調整を丁寧に施している。内面はナデによる調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄赤色で一部黒色、内面は黄赤色をなす。34は脚。棒状をなし、脚下半は拡がる。外面は縦のヘラ研磨調整で、面とりがおこなわれる。径4.0cm前後。胎土には石英・長石・角閃石が混入される。焼成は良好。色調は外面は赤褐色、内面は白黄色をなす。35、36は上層出土土器、35は壷の胴部破片。二条の突帯をめぐらしている。内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入。焼成は良好。色調は外面が赤黄色。内面が黄色～赤色である。36は断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。外面は縦位の刷毛目調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄赤色。内面が黄白色をなす。

Fig.22－1・3～15は壷形土器の口縁部破片である。1は口縁端部が外反し、丸くおさめている。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させるが、特に口縁下端が厚くなっている。器面の内外面共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤黄色、内面が赤褐色をなす。3は大壷の口縁。大きく外反し、端部は丸くおさめる。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が赤褐色をなす。4は外傾しながらたちあがり、口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。外面は横ナデ調整、内面は横方向のヘラ研磨調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤黄色をなす。5は中壷。口縁はゆるやかに外反する。端部は隅丸方形に仕上げ、中央に粘土接合部が沈線状に残る。口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の幅は1.5cm前後。下端に斜に段が形成される。内外面は横方向のヘラ研磨調整を施すが、丁寧ではない。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に黄褐色をなす。6は大壷。口縁は外傾し直線的にのびる。端部は隅丸方形に仕上げる。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に明瞭な段が形成される。肥厚帯の幅は3.5cm前後である。器面の内外面は共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。7は中壷。口縁端部が屈曲し大きく外反する。端部は丸くおさめる。口縁下端に粘土帯を貼り付け、口縁部肥厚帯をつくる。下端には明瞭な段が形成される。肥厚帯の幅は2.5cm前後である。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黄土色をなす。8は口縁上半がゆるやかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端には斜に明瞭な段を形成している。肥厚帯の幅は3.5cm前後。器面の内外面は共に横方向のヘラ研磨調整で、外面から口縁

Fig.22　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅱ

内側には丹塗りがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は外面が黄赤色、内面が黄褐色をなす。9は口縁部がゆるやかに外反し、端部は丸くおさめている。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に低い段を形成している。肥厚帯の幅は3㎝前後。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面は暗褐色をなす。10も口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸くおさめている。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させている。口唇部には粘土接合部が沈線状に残っている。肥厚帯の幅は3㎝前後。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は保存状態が悪く調整の詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好。色調は外面が黄赤色。内面が黄褐色をなす。11は大壷の口縁部。端部がやゝ肥厚する。端部は方形に仕上げ、平坦面に太い凹線をめぐらす。上下端にヘラによる刻目を入れている。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土に石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が褐色をなす。12は口縁端部で屈曲し外反する。口唇部は丸くおさめる。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の幅は2.5㎝前後。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が赤黄色をなす。13は口縁の中位で屈曲し、端部が大きく外反する。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段が形成される。口唇部には粘土の接合部が凹線状に残っている。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量混入している。焼成は良好。色調は外面が白黄色、内面が黒色をなす。14は口縁部が直線的に外傾する。端部は隅丸方形に仕上げている。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが、比較的良好。色調は内外共に赤褐色をなす。15は口縁部で屈曲し、外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に低い段を形成する。肥厚帯は丸味をもち、幅は2㎝前後。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に黄赤色をなす。2、16～18は鉢ないしは浅鉢形の土器と考えられる。2は口縁端部が丸く肥厚する。全体に薄手のつくりである。内外面は丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが、比較的良質。焼成は良好、色調は外面が褐色で、内面が黄褐色をなす。16は口縁部を折りかえし、玉縁状に肥厚させる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、やゝ保存が悪い。胎土に石英・長石の砂粒を混入するが、精製され良質である。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面は白黄色をなす。17は口縁はゆるやかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の幅は1.7㎝前後。体部はやゝ膨らむ。器面の外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻、色調は内外面ともに赤褐色をなす。18は体部が外傾しながらたちあがり、口縁部は頸部で屈曲し、さらに外傾する。端部は尖り気味に丸くおさめる。内外面は横方向の刷毛目調整後、さらに横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面の頸部には稜線ができる。胎土は精選され、きわめて良質である。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面は灰黄色をなす。19は頸部～胴部の破片である。内外面共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は黒色をなす。20は頸部と胴部の境に凹線一条をめぐらし、わずかな段が形成される。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は頸部に指圧痕が残る。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し不良。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は黄白色をなす。21は小壷。頸部はゆるやかにそりかえりながらたちあがる。頸部と胴部の境には二条の沈線をめぐらし、胴部は膨らむと考えられる。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが、比較的良質である。焼成は堅緻、色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。22も小壷。頸部と胴部の境には沈線をめぐらす。

外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面には粘土帯の接合部が明瞭に残っている。粘土帯の接合は内傾接合、破片の下端に見られる接合は両側からはさみこむような接合がおこなわれている。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～黒褐色、内面は白黄色をなす。粘土帯の幅は1.0㎝前後。23は口縁部とみられる。口縁部は端部が大きく外反すると思われる。粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段を形成する。また、下端よりやゝ上位に凹線一条をめぐらしている。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面は黒色をなす。24は頸部と胴部の境に凹線一条をめぐらし、わずかに段を形成する。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し不良。焼成は良好、色調は外面が黒色、内面は黄褐色をなす。25は小壷。胴上半部を省略するソロバン玉形の胴部をもつ特異な器形をもつ。頸部は内傾しながらたちあがり、胴部には稜線がつく。胴部最大復原径13.0㎝。頸部の内側には指圧痕が残っている。外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され、きわめて良好。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が白黄色をなす。26は小壷。頸部と胴部の境に平行沈線三条をめぐらしている。内面には粘土接合部の段が形成されると考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は荒れて調整の詳細は不明。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが、精製されてきわめて良質である。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。27は胴部上半部破片。平行沈線五条をめぐらしている。器面の内外面は荒れていて調整の詳細は不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は内外面共に暗黄褐色をなす。28は胴部。二条の平行沈線をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され良質。焼成は良好。色調は外面が黄白色、内面が黄灰色をなす。29は頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が灰～黒色、内面は褐色をなす。30は頸部と胴部の境に平行沈線三条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に赤褐色をなす。31は胴部破片。平行沈線五条で重孤文が描かれる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は詳細不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し不良。焼成は良好。色調は内外面共に褐色をなす。32は小壷の胴上半部。平行沈線五条をめぐらしている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整。器壁は薄く、つくりの良い土器である。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が白黄色をなす。33も小壷の胴上半部。頸部と胴部の境に細い平行沈線二条をめぐらす。さらに下には有軸羽状文が二段に描かれている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整であるが、前者と較べると見おとりする。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが、比較的良質である。焼成は良好。色調は外面が白黄色、内面が灰色をなす。34も胴上半部の破片。下位に沈線一条をめぐらし、上位に孤状の沈線が施されている。全体の文様構成は不明。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。黒色の顔料が部分的に付着している。内面は横方向の刷毛目調整後、横ナデ調整を加えている。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻。色調は内外面共に黒褐色をなす。35は小壷の胴部。胴上半は丸味をもち、下半部は直線的、胴最大部で屈曲している。胴最大部に沈線一条をめぐらす。その上位に三本の平行沈線で孤状八字形文を描く。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整である。胎土は精製されて、きわめて良質である。焼成は堅緻。色調は外面が黒褐色、内面は黄灰色をなす。36は頸部と胴部の境に細かい平行沈線二条をめぐらし、下位に同様の沈線で有軸羽状文が描かれている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒若干を混入しているが比較的良質である。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面は黄灰色をなす。37は中壷の胴部破片。四条の平行

沈線で三角文が描かれている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好、色調は内外面共に黄赤色をなす。38～40は底部。38は底部復原径5.8cm。体部は底部から、ほぼ直にたちあがる。外面は粗いヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成はやゝ不良。色調は外面が赤黄色、内面は黄白色をなす。39は小壷の底部。いわゆる円盤貼り付けの底部で、底部径4.2cmを測る。外面は横ナデ調整。内面はヘラで調整されているが、雑である。胎土には石英砂粒を混入しているが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黒褐色をなす。40は大壷の底部。底部復原径12.4cm。平底の安定した底部で、体部は外にひらきながらたちあがる。器面は保存状態が悪く詳細は不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、質は悪い。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面は灰黒色をなす。

石器（Fig.23）

石器には石鏃、石斧、砥石、叩石等がある。1は古銅輝石安山岩を素材としている。粗い剥離を加え成形した後、両側辺に二次加工を加え、鋸歯列をつくり出している。基部にわずかなえぐりを入れる。先端を欠損している。現在長1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.25cmで断面形は凸レンズ状をなす。2は石斧の頭部破片。粒子の細かい石材を素材としている。剥離を加え成形し、その後敲打を加えている。敲打後、研磨を加えるが、側面は良く研磨され、部分的に敲打痕が残る。表面は斜方向の研磨を加えるが、点々と剥離痕が残っている。現存長3.6cm、幅5.0cm、厚さは剥離しているため現状で1.5cmを測る。3は黒色の砂岩を利用した手持ち砥石である。半折し先端部が尖っている。三面が砥面として利用される。断面方形をなす。現存長6.4cm、幅2.0cm、厚さ1.9cmを測る。4は安山岩を素材とした叩石。粗い剥離を加え円形に成形し、周辺部に敲打痕がみられる。縄文時代の円盤形石器に類似する。6.4cm×6.5cm　厚さ2.2cmである。5は滑石製の勾玉である。板状をなす。背は半円状に整形し、腹部のえぐりは上下から直線的に加工され、浅いえぐりとなっている。孔は片面からの穿孔である。全体に粗い研磨が加えられる。頸部に一部欠損部がある。長さ4.6cm、最大幅2.2cm、厚さ0.5～0.9cm、孔径0.3cmを測る。

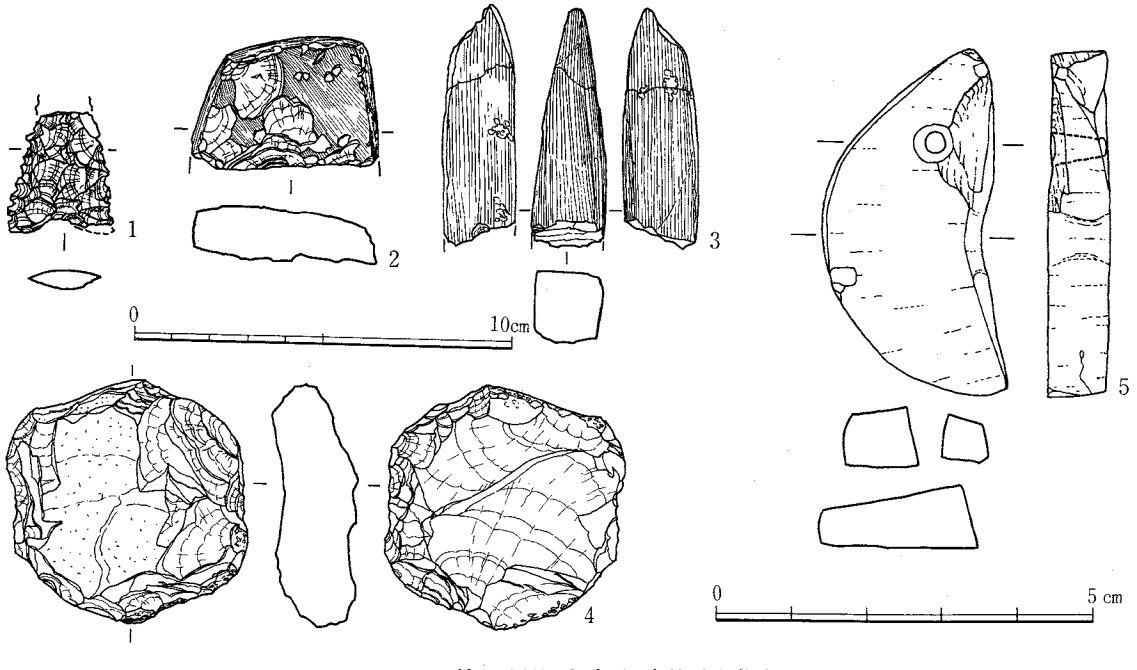


Fig.23　第13号竪穴出土遺物実測図Ⅲ

⑽　第16号竪穴（Fig.24）

調査区の北西コーナー付近に検出した貯蔵穴である。一部は北側の県道工事によって破壊されているが、ほぼ全形を知ることができる。南側で第18号竪穴と、西側で第19号竪穴と重複関係にあり、いずれも切られている。

第16号竪穴は他と若干方向を異にしている。長軸（北西から南東）355㎝、短軸（北東～南西）290㎝の不整楕円形プランをなすが、各壁は袋状に掘り込まれ、特に東側の掘り込みは大きい。東側の掘り込みは約50㎝、他は10㎝前後の掘り込みである。床面は平坦であるが、北西隅に柱穴状の掘り込みがみられる。柱穴は70×75㎝の楕円形をなし、壁にむかって斜に掘り込まれている。床面は長軸360㎝、短軸265㎝の半円に近い楕円形プランをなす。

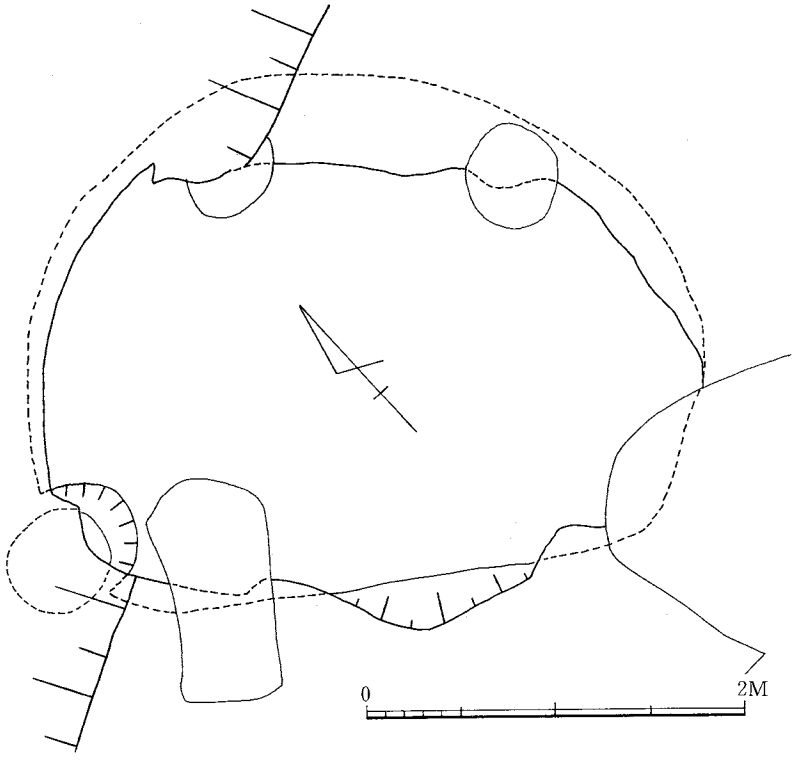


Fig.24　第16号竪穴平面図

出土遺物（Fig.25～27）

遺構の規模が大きく、残存状態が良好であるので出土遺物は多い。土器、石器、黒曜石石片等がある。土器片は大きく、接合できる資料や完形に近いものもあり、一括資料として重要である。

土器（Fig.25・26・27－１～９）

Fig.25－１、２は刻目突帯文土器である。１は口縁部破片。口縁をやゝ下ったところに断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目は棒状工具で斜位に施す。口縁端部は丸くおさめる。外面は横方向の貝殻条痕調整。内面は横ナデ調整。胴部で屈曲する器形と考えられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。２は胴屈曲部にやゝ高い断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。刻目はヘラにより、適確に刻まれている。外面の突帯下には横～斜位の貝殻条痕調整、突帯より上位は貝殻条痕の上から横ナデを加え、条痕を消している。突帯下にはススが付着している。内面は横ナデ調整。粘土帯の接合部が明瞭に残っている。粘土帯接合は内傾接合である。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は黄赤色～褐色、内面は黄赤色をなす。３～７は如意形の口縁をもつ甕形土器である。３は口縁部が大きく外反する。体部は膨らまず直線的にのびる。口唇部の刻目は棒状工具で、端部いっぱいに刻まれる。外面は縦位～斜位の細かい刷毛目調整を丁寧に施している。外面にはススが付着している。内面は横方向の細かい刷毛目調整を施した後、下半部は縦位のヘラナデ調整で刷毛目が消されている。口縁部は火を受け黒変している。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが、比較的良質である。焼成は堅緻。色

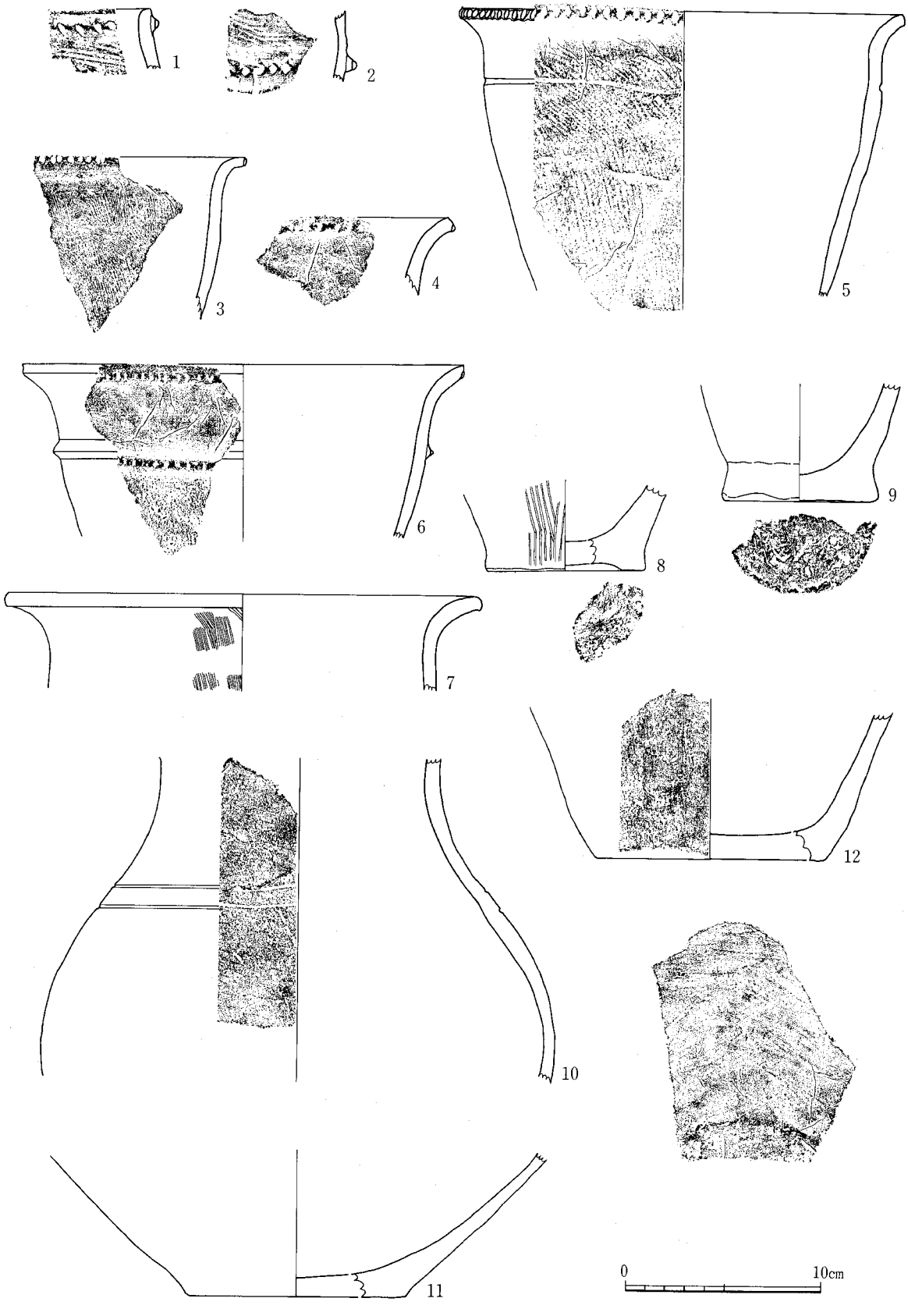


Fig.25　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅰ

調は内外面共に褐色～黒褐色をなす。4は口縁部はまのびしながら外反する。口縁端部は隅丸の方形に仕上げ、下端にヘラによる刻目が刻まれるが、刻目は口唇部の半分までしかおよんでいない。内外面共に横ナデ調整。胎土には石英・長石・金雲母・角閃石の砂粒が多量混入され、質は良くない。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。5は口縁部はゆるやかに外反し、口唇部は方形におさめるが、下端はわずかもりあがり、突帯状をなし、そこにヘラによる細かい刻目を施している。体部は膨らまず、直線的に移行する。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらしている。突帯には口縁部と同様の刻目が施される。外面は横ナデ調整、内面は磨滅しているので詳細は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入する。色調は外面が桃色～黄褐色、内面が黄白色～黄褐色をなす。復原口径22.8cmを測る。6は復原口径22.5cm。口縁部は大きく外反し、端部は方形に仕上げるが、口唇部平坦面に凹線をめぐらす。下端部は粘土が張り出している。体部は膨らみぎみに下る。外面は縦方向の刷毛目調整後、横ナデ調整を加え、刷毛目痕を消そうとしている。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成はやゝ不良。色調は外面が黄褐色、内面は黄赤色～褐色をなす。7は復原口径24.4cmを測る。口縁部は棒状工具によって口唇部いっぱいに丁寧に施されている。外面は斜位～縦位の粗い刷毛目が施された後、口縁下に凹線一条をめぐらす。内面は体部上半が指押え調整、口縁部が横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。外面にススが付着する。10は大壺。口縁部と底部を欠く。頸部は内傾しながらたちあがり、口縁部にむかってそりかえる。頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらす。胴部は球形をなす。頸部復原径19.0cm、胴部最大復原径26.2cmを測る。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は頸部に指圧痕が残り、全面に横ナデ調整を加える。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は黄赤色、内面は赤褐色をなす。8、9、11、12は底部破片である。11が壺形土器の底部で、他は甕形土器の底部である。8は底部復原径8.3cm。底部はまず粘土の輪をつくり、中に粘土を充填する製作法をとっており、あげ底をなす。外面には縦位の粗い刷毛目調整を施す。二次加熱によって変色し、ススが付着する。内面は器面の保存が悪いため、調整は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～黒褐色、内面は黄褐色をなす。9は底部復原径8.1cm。底部端がやゝ外に張るが、全体に円筒状をなす。体部は丸味をもってたちあがる。外面は縦方向の丁寧なヘラナデ調整。ススが若干付着している。内面はナデ調整、コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、質は良くない。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面は黄褐色をなす。11は底部復原径11.2cm。体部は外傾し大きく外に開く。外面は横方面の丁寧なヘラ研磨調整。内面は丁寧なナデ調整。一部に縦方向のヘラナデ調整がみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、質は良くない。焼成は良好。色調は外面は赤褐色、内面は褐色～黒褐色をなす。12は安定した平底をなす。底部復原径11.8cmを測る。体部は外に拡がらず直線的にたちあがる。外面は縦方向のヘラ研磨調整、内面はナデ調整である。外面にはわずかにススが付着している。内面は横ナデ調整。コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は赤黄色～褐色、内面は黒褐色をなす。

Fig.26－1～9は壺形土器の口縁部破片である。1は復原口径16.6cmを測る中壺の口縁である。口縁は大きく外反する。口端部は隅丸方形に仕上げ、下端には粘土が折り返される。口縁部は部分的な粘土帯を貼り付け肥厚させるが、下端部はヘラ研磨によって段を形成している。粘土帯の接合は外傾接合で、擬口縁状をしている。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母・角閃石の砂粒を混入しているが良質である。焼成は良好。色調は外面が白黄色、内面が黄褐色～灰白色をなす。2は外反度は1よりゆるやかである。粘土帯を貼り付け口縁部に肥厚帯をつくり出し、下端に

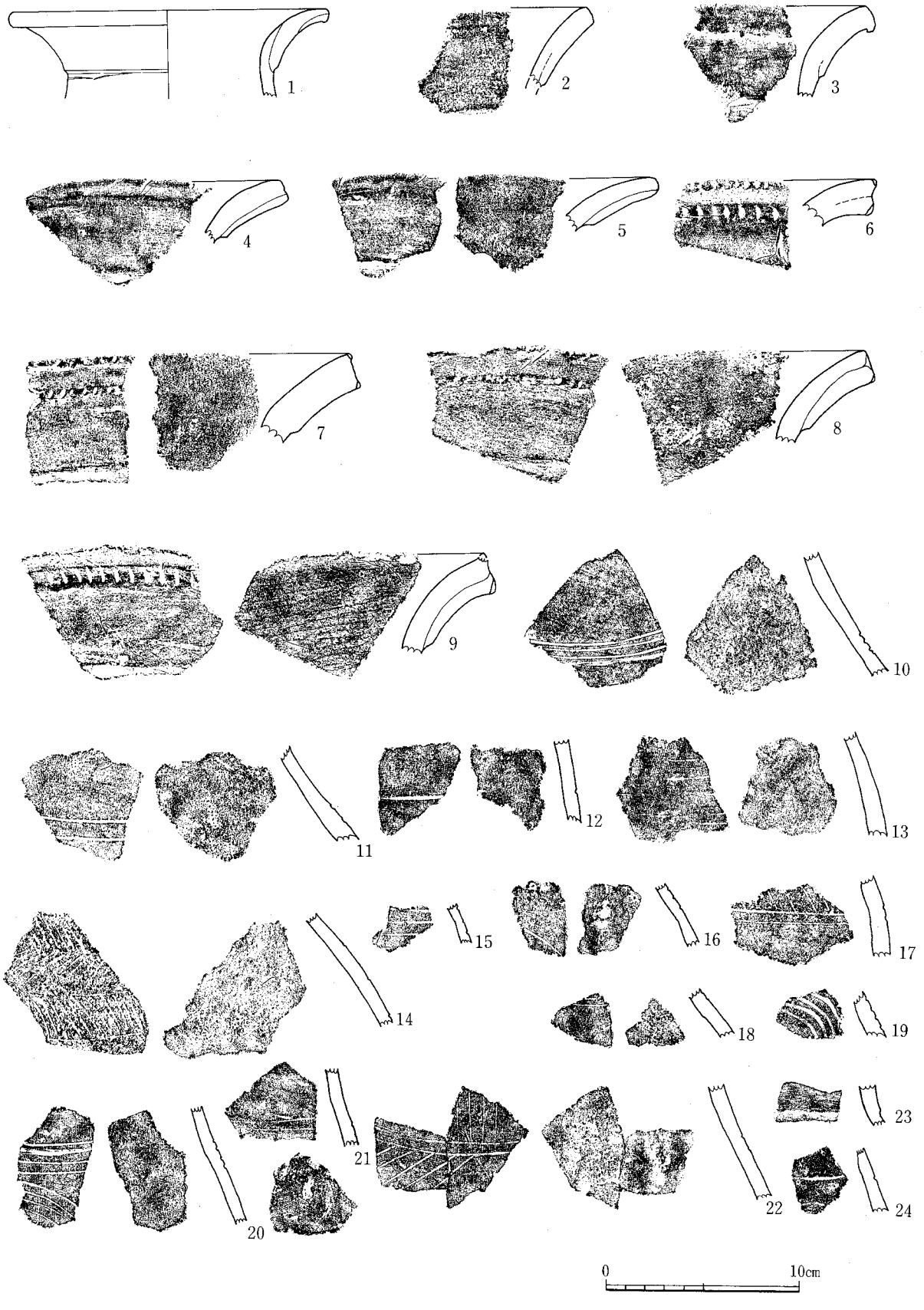


Fig.26　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅱ

段が形成されるが高くない。肥厚帯の幅は4㎝前後。内外面共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に含み質は良くない。焼成は良好でない。色調は内外面は黄褐色～黄白色をなす。3は口縁部の外反度は2と同様である。口唇部にヘラ研磨で平坦面がつくり出され、下端部に粘土が折りまげられている。口縁には粘土を貼り付け肥厚帯をつくり出している。肥厚帯の幅は4㎝前後。下端の段はヘラ研磨でゆるやかになっている。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが良質。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面は黄白色～黄褐色をなす。4は大壷の口縁部、口縁部に粘土帯を貼り付けて肥厚させるが、特に端部が肥厚する。口唇部に凹線がめぐる。肥厚帯の幅は4㎝前後。下端の段は高く明瞭である。内外面共横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。5は口縁が大きく外反し、端部は丸くおさめる。口縁には粘土帯を貼り付け、肥厚帯をつくり出している。幅4㎝前後。下端の段は明瞭である。内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土に石英・長石・金雲母を混入している。焼成は良好。色調は内外面共に黒褐色をなす。6～9は特大壷になると考えられる。形体は共に共通している。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚帯をつくる。口縁端部は方形に仕上げ、上下端部に刻目が入れられている。6は口端に凹線をめぐらす。刻目はヘラで刻まれ、下端の方が大きい。7、8は口端は平坦で上端部が小さい突帯状につまみ出されている。刻目はヘラで刻まれ、比較的小さい。口縁部下端の段は明瞭である。9は口縁端部に幅広い凹線一条をめぐらす。上端は欠損し、詳細は不明。下端は突帯状をなしヘラ刻みの刻目を入れる。口縁部の下端には高い明瞭な段が形成される。4点共に内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。口縁部肥厚帯の幅は7が4㎝前後、8が4.5㎝前後、9が4.5㎝前後である。4点はいずれも胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は6～8の外面が黄赤色、内面が褐色をなす。9は内外面共に黒褐色をなす。10～24は壷形土器の頸部～胴部にかけての破片である。10は頸部と胴部の境に四条の平行沈線をめぐらす。頸部は内傾しながらたちあがり厚さを増す。外面は斜～横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内外には指圧痕が残り上から横ナデが加えられる。黒色の付着物がみられる。胎土には石英・長石の砂粒が多量に混入される。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色～黒褐色をなす。11は頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらす。頸部は大きく内傾する。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。内面はナデ調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が白黄色、内面は黄赤色をなす。12は頸部と胴部の境に沈線一条をめぐらす。外面は縦方向の刷毛目調整後、横方向のヘラ研磨調整を加えている。内面は横ナデ調整。胎土中に石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が褐色をなし、内面は黄白色をなす。13は胴上半部である。外面にヘラ研磨調整を施すが、研磨の間が平行沈線状に残っているが、文様を意識したものではない。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面が赤褐色をなす。14は中壷の胴部上半部の破片。上半部に細沈線で三段の有軸羽状文を施文している。各段の幅は2.2㎝前後である。外面はヘラ研磨調整とみられるが、器面があれて詳細は不明。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色～黒褐色。内面は黒褐色をなす。15は胴部の小破片。外面はヘラ研磨調整で、三条の平行沈線を施す。内面は剥離する。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は黄褐色をなす。16は胴上半部の破片。上位に三条の平行沈線をめぐらし、下位に斜位孤状の沈線一条がみられる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面には指圧痕と横ナデ調整が残っている。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共に褐色をなす。17は胴中央に近い上半部の破片。文様施文部の下半部である。下位に平行沈線二条をめぐらし、その上に斜位

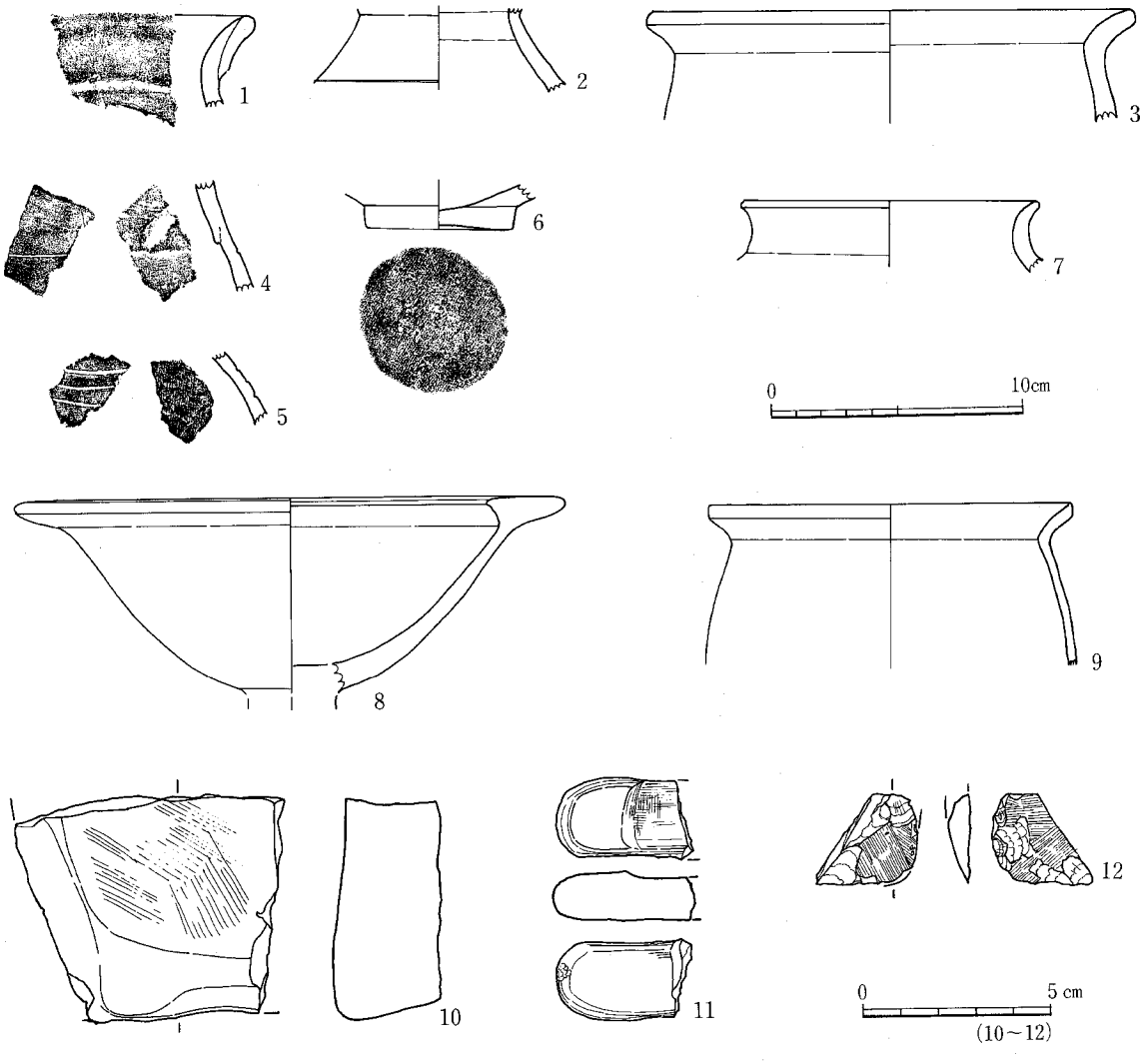


Fig.27　第16号竪穴出土遺物実測図Ⅲ

の平行沈線を施す。有軸羽状文が施文されていると考えられる。器面は保存状態が悪く詳細は不明、外面はヘラ研磨調整とみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良いが二次的に火を受けている。色調は外面が灰褐色、内面が赤褐色をなす。18は細かい平行沈線二条をめぐらしている。外面は横方向のヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。胎土に石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色をなす。19は胴部、四条の平行沈線で重孤文を描く。外面はヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整、胎土に石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は内外面共に青黄色をなす。20は頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に平行沈線四条をめぐらすが、上から二番の条線部分でわずかな段が形成される。下位には四条の平行沈線で重孤文が描かれている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整で、頸部と胴部の境にわずかに段がある。胎土には石英・長石を混入するが良質。焼成は良好である。色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色である。21は頸部～胴部の破片。境に平行沈線二条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整であるがやゝ粗雑で凹凸がある。内面は横ナデ調整であるが、粘土に隙間がみられる。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は黄色から黄赤色、内面は黄赤色を

なす。22は中壷の頸部～胴部にかけての破片。頸部と胴部の境に平行沈線二条をめぐらす。頸部には平行沈線四条を縦位に配し、下位には有軸羽状文を配しているが、頸部文様を境に対して羽状文の方向が異なっている。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胴上半に指圧痕が残り、上からナデ調整が加えられている。胎土には石英・長石の砂粒が混入するが良質。焼成は良好。色調は内外面共に黒褐色をなす。23は胴部と頸部の小破片（口縁部下端の可能性もある）、境に凹線をめぐらす。内外面共に横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面が黄赤色、内面が白黄色をなす。24は頸部と胴部の境に沈線一条をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面は器面が荒れていて詳細不明。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。

Fig.27－1は中壷の口縁部。粘土帯を貼り付けて肥厚させている。口縁端部は丸くおさめる。肥厚帯の幅は2㎝前後。口縁部下端には明瞭な段が形成されている。内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が赤褐色をなす。2は小壷の頸部破片。口縁部と頸部、頸部と胴部の境には共に細沈線一条をめぐらす。頸部はかなり内傾する。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面の口縁部も横方向の丁寧なヘラ研磨調整である。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻。色調は外面が褐色～黒褐色、内面が褐色をなす。頸部復原径10.0㎝を測る。3は復原口径19.6㎝を測る。口縁部はくの字形に屈曲し、端部は丸くおさめている。体部はやゝ外に膨らむ。内外面は横方向のヘラ研磨調整とみられるが、表面がはげているため詳細は不明。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好。色調は内外面共に白黄色をなす。4は頸部から胴部にかけての破片。頸部と胴部の境には細い沈線一条をめぐらす。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整で、頸部と胴部の境は粘土接合部で段を形成している。粘土帯の接合部が良く残っている。粘土帯の幅は1.5㎝前後で、内傾接合である。胎土に石英・長石の砂粒を若干混入するが、精製され良質である。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～褐色、内面は灰褐色をなす。5は胴上半部の破片である。平行沈線三条をめぐらしている。器面の内外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが良質。焼成は良好。色調は内外面共に赤褐色をなす。6は小壷の底部。底部径5.9㎝を測る。円盤貼り付け状をなし、体部は外傾しながらたちあがる。外面は横方向のヘラ研磨調整。内面の調整の詳細は不明。胎土は精製されきわめて良質。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。7は復原口径12.0㎝。口縁はわずかに外反し、端部はわずかに肥厚し丸くおさめる。口縁部と頸部の境は不明瞭。内外面は横方向のヘラ研磨調整とみられるが、詳細は不明。胎土には石英・長石を若干混入するが、精製され良質である。8、9は上層出土土器。8は高杯形土器の杯部である。復原口径22.0㎝。体部は大きく外傾しながらたちあがり椀形をなし、口縁はT字形をなす。端部は丸くおさめ、内側の張り出しは小さい。全体に器面が荒れているために調整の詳細は明らかでないが、外面には丹塗りの痕跡が残っている。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入しているが、比較的良質である。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。9は土師器の甕である。口縁はくの字に屈曲し、口唇上端がつまみあげられている。胴部はやゝ膨らむ。内面の頸部に稜線がある。器面は保存状態が悪く、調整痕等の詳細は不明。比較的薄手の土器である。胎土には石英・長石の砂粒を混入するが、比較的良質である。焼成はやゝ不良。色調は外面が白黄色で大きな黒斑がみられる。内面は白黄色をなす。

石器（Fig.27－10～12）

石包丁2点、砥石2点の計4点がある。10は砥石、粒子の粗い砂岩を利用している。二次的に火を

受け赤変している。現状では7.0cm×5.8cmの方形をしているが、二辺が欠損していて、元来はさらに大型になる。一面だけが砥面として使用されている。中央部が凹んでいる。石皿の可能性もある。厚さ2.8cmを測る。11も砥石である。手持ち砥石とみられる。粒子の細かい砂岩の棒状の円礫を素材としているが、半折している。一面のみが使用され、使用面は良く使われ、段をもって低くなる。長さ3.6cm、幅2.1cm、厚さ1.3cmを測る。12は石包丁の破片。粒子の細かい砂岩を利用している。全体に良く研磨されている。両面から研磨し、刃部を形成する。刃部形成のための研磨はない。現状で長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmを測る。

(11) 第17号竪穴（Fig.20）

調査区の西端中央部付近に検出した貯蔵穴である。第13号竪穴と重複関係にあり、第13号竪穴に切られている。北側に第16号竪穴、南側に第21号竪穴が位置しており、それぞれとの間隔は1.5mと0.8mを測る。第17号竪穴は現状で約半分を残し、削平により崖面が形成され失われている。南北径200cm、東西径80cmの半円状のプランをなしているが、径200cm前後の円形プランをなすと考えられる。壁面はほぼ垂直に近く掘り込まれているが、東側はやゝゆるやかである。床面は平坦で、南北径155cm、東西径60cmの半円形プランをなすが、元来は155cmの円形プランをなす。

出土遺物（Fig.28）

出土遺物には土器、石器、黒曜石の石片があるが、遺構が半分失われているので、量的には多くない。出土遺物からみて、本次調査で検出した前期の貯蔵穴の中では最も新しく位置づけられる。器形のわかる７点を図示した。

土器（Fig.28－１～７）

１は甕形土器、復原口径19.4cm、口縁部は短かい逆Ｌ字形で肥厚している。体部は胴がやゝ張る。口縁下には断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。器面は、口縁部周辺が横ナデ調整、体部外面は斜位～縦位の細かい刷毛目調整。突帯の貼り付けは刷毛目調整後におこなわれている。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は内外面共白黄色をなす。２は甕形土器の胴部破片。胴の張った部分に刻目突帯一条が貼り付けられている。刻目は棒状工具により斜位で浅く刻まれる。外面は横方向の細かい刷毛目調整。突帯

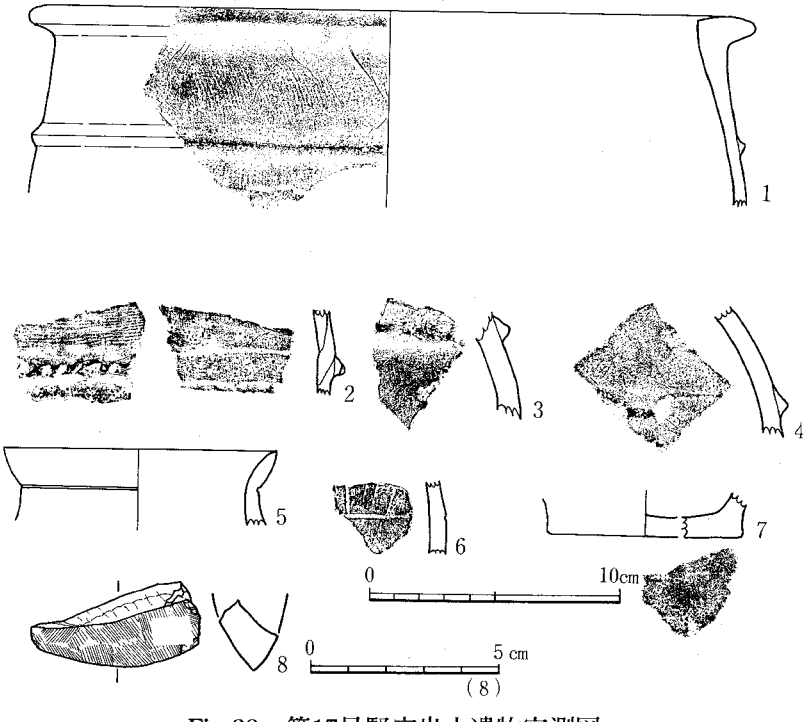


Fig.28　第17号竪穴出土遺物実測図

下は磨滅し不明瞭。内面は横ナデ調整、粘土帯接合痕が明瞭に残っている。粘土帯の幅は1.4㎝、内傾に接合されている。胎土には花崗岩の細かい砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄褐色をなす。外面にはススが付着する。3、4は壺形土器の胴部破片。共に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらしている。3は内外面共、横方向のヘラ研磨調整。4はやゝ磨滅し、器面調整は不明、表面に化粧土をかけている。共に胎土には石英・長石等の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は3が内外面共黄赤色、4は外面が灰白色、内面が黄白色をなす。5は小壺の口頸部の破片である。口縁部は直線的に外反し、やゝ肥厚する。口縁部と頸部の境には細かい沈線一条をめぐらしている。口縁端方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には細かい石英・長石の砂粒を若干混入しているが良質、焼成は堅緻、色調は外面が黒褐色、内面が褐色～黒褐色をなす。6は壺の胴部破片、凹線一条をめぐらし、上位に貝殻腹縁の押圧による縦線五本があるが文様全体は明らかでない。外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土には花崗岩の細かい砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が黄赤色、内面が黄白色をなす。7は底部、復原底径7.8㎝。平底で、体部は直線的にたちあがる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好。外面が黒色、内面が黄色をなす。

石器（Fig.28－8）

石斧2点がある。いずれも小破片である。刃部の一点を図示した。玄武岩を素材として利用している。全体に良く研磨され、刃部は蛤刃をなす。現存長2.2㎝、幅4.5㎝、厚さ1.6㎝を測る。

⑿ 第18号竪穴（Fig.29）

調査区の北西コーナー付近に検出した貯蔵穴である。第13号竪穴と第16号竪穴と重複関係にあり、第13号竪穴に切られ、第16号竪穴を切っている。第18号竪穴は現状で、南北160㎝、東西径150㎝のやゝいびつな隅丸長方形プランをなす。壁面は南側が垂直に近く掘り込まれ、北壁はやゝゆるやかな傾斜をもっている。東西壁は袋状をなすが、東側が大きく掘り込まれ、約50㎝を測り、西側は約10㎝のはいり込みである。床面は平坦で、東西径190㎝、南北径135㎝の隅丸長方形プランをなす。

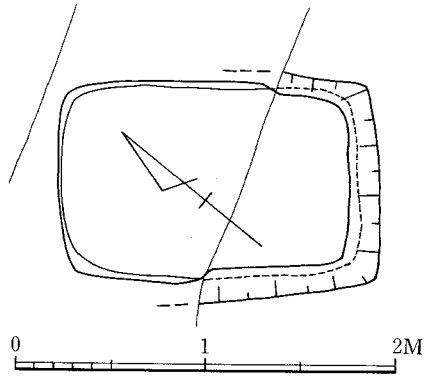


Fig.29　第18号竪穴平面図

出土遺物（Fig.30）

遺構の保存状態が悪いので出土遺物はきわめて少ない。良く時期を反映している3点を図示した。

1は鉢形土器の口縁部。わずかに内傾し、胴の張りはほとんどない。口唇部はヘラ研磨によって平坦にしているが、粘土のまわりが悪く充分でない。外面は斜方向、内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整を施す。外面にはススが付着している。胎土には花崗岩を主とする砂粒を多量に混入している。焼成は堅緻、色調は外面が黄褐色、内面が黒褐色をなす。黒色磨研土器の範ちゅうにはいる土器である。2は甕形土器の口縁部の小破片である。口縁部よりわずかに下っ

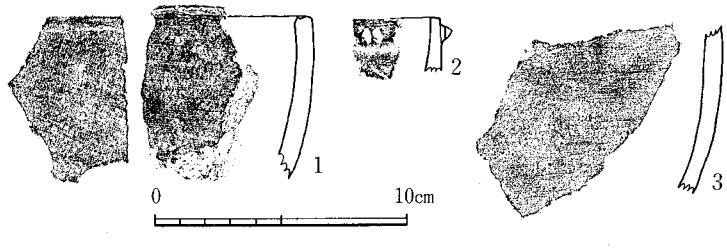


Fig.30　第18号竪穴出土遺物実測図

た所に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。口唇部は平坦。刻目は細かい棒状工具によっている。内外面は横ナデ調整。胎土には花崗岩のやゝ粒の大きい砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が黄赤色をなす。3は壷形土器の胴部破片。内面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面はナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入する。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面は黄赤色をなす。

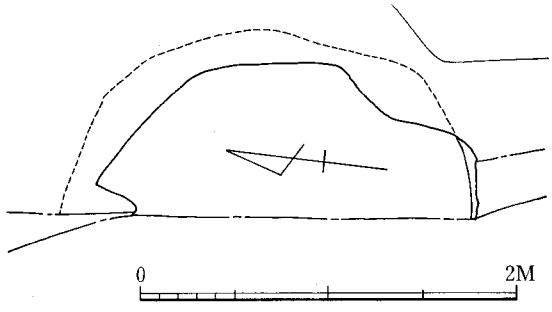


Fig.31　第21号竪穴平面図

⑬　第21号竪穴（Fig.31）

調査区の西端中央部に検出した貯蔵穴で、遺構の大部分は調査区外にのびている。単独で存在し、他の遺構との重複関係はない。東に第11号竪穴、北に第13、17号竪穴、南に第3号竪穴が位置している。それぞれとの間隔は0.5m、0.8m、1.9m離れている。第21号竪穴は現状で東西径80cm、南北径200cmの不整の半円状をしている。壁は南側でほぼ垂直、東北側では袋状をなし、約20cm掘り込まれている。床面は平坦で東西径195cm、南北径215cmの半円形状をしているが、周辺の貯蔵穴の形態からすれば、隅丸の長方形プランと考えた方が良い。

出土遺物（Fig.32）

遺構が発掘区外にのびるため、遺物量はあまり多くない。土器、黒曜石石片等がある。上層に若干新しい時期の遺物を包含している。以下、主要な遺物について詳述する。

1～4は壷形土器の口縁部。1は大壷、口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させている。口縁端部は隅丸の方形をなし、口縁下端にはわずかな段を形成する。器面の内外面は横方向の粗いヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入し、良質でない。焼成は良好。色調は内外面共黒褐色をなす。2は中壷の口縁部、端部を丸くおさめている。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させている。肥厚帯の幅2cm前後。下端には段が形成される。器面は内外面共、横方向の粗いヘラ研磨調整。肥厚帯に二条の平行沈線が斜位に入れられている。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入していて不良。焼成はやゝあまい。色調は内外面共赤褐色をなす。3は口縁端近くでわずかに屈曲し外反する。屈曲部に細かい沈線一条がめぐる。口縁端部は丸くおさめている。器面の内外面は共に、横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を若干混入するが、精製され良質。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が赤褐色～黒褐色をなす。4は中壷の口縁部、口縁に粘土帯を貼り付け肥厚させる。肥厚帯の幅2.5cm前後。口縁端部は丸くおさめ、下端には明瞭な段が形成される。頸部との境に凹線一条をめぐらす。器面の内外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面は黄赤色をなす。5、6は壷の胴部破片。5は胴上半の破片、頸部との境に三条の平行沈線をめぐらす。その下位に二条の平行沈線を斜位に配している。本来は山形文をなすと考えられる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は内外面共に黄赤色をなす。6は小壷の胴中位から下半にかけての破片である。胴屈曲部よりやゝ上位に細かい沈線一条がめぐる。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、内面は横ナデ調整である。粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。粘土帯の接合は内傾接合で粘土帯の幅は1.5cm前後である。胎土には石英・長石の砂粒をわずかに混入しているが、精製され、きわめて良質である。焼成は堅緻、色調は外面が褐色～黒色、内面が黒褐

Fig.32　第21号竪穴出土遺物実測図

色をなす。7、9～13は如意形口縁を有する甕形土器である。7は口縁端部を丸くおさめている。口唇部には刻目はない。内外面は横ナデ調整。外面にススが付着している。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黒褐色、内面が黄赤色をなす。9は口縁端部が肥厚し、口縁端は方形に仕上げられ、下端にヘラによる刻目が付けられる。器面の内外面は共に横ナデ調整である。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を多量に混入し不良。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が黄赤色をなす。10は口縁端部を折りまげ肥厚させている。端部には幅広い平坦面をつくり出している。下端にヘラによる刻目を入れる。外面の体部は縦方向の刷毛目調整。口縁部は横ナデ調整。内面は横、斜方向の刷毛目調整、口縁部はその後に横ナデ調整を加えている。胎土には石英・長石の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が黄褐色、内面が黄白～白灰色をなす。11は口

縁端部を丸くおさめ、その下半にヘラによる刻目を施している。器面の内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好、色調は内外面共に赤褐色をなす。12は口縁部が大きく屈曲し、体部と約90度の角度をもっている。体部はわずかに外にひらく。口縁端部は方形に仕上げ、下端にヘラによる刻目をいれている。外面は縦方向から斜方向に刷毛目調整が加えられている。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石のやゝ大きい砂粒を多量に混入し、質が悪い。焼成は良好。色調は白黄色～黄赤色、内面が白黄色をなす。13は口縁がわずかに外反し、端部は方形に仕上げている。端部いっぱいにヘラによる刻目を入れている。外面は斜位の刷毛目調整で、口縁部は横ナデ調整。ススが付着している。内面は横ナデ調整である。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好。色調は外面が褐色、内面が赤黄色をなす。８はくの字形口縁をもつ甕形土器である。口縁端部は肥厚気味に方形に仕上げる。外面は横方向の刷毛目調整。内面は横ナデ調整、頸部に明瞭な稜線がはいる。胎土には石英・長石・角閃石の砂粒を混入している。焼成は堅緻。色調は外面が黄色～青灰色、内面は灰褐色をなす。14は土器片を利用した円盤。周囲に丁寧な剥離を加えて円形に整形している。利用されている土器片は甕形土器の胴部破片である。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整。内面は横ナデ調整。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入している。焼成は良好、色調は外面が褐色、内面は黄白色をなす。円盤は5.2㎝×5.5㎝　厚さ0.8㎝を測る。15は壷形土器の胴部破片。断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらしている。突帯は横ナデ調整され、稜には棒状工具による刻目を密接して施している。刻目は浅い。器面の外面の突帯より上位は縦方向、下位は横方向の刷毛目調整を丁寧に施している。内面は横ナデ調整。焼成は堅緻、色調は外面が黄赤色、内面が褐色をなす。16～20は底部破片である。16は底部復原径10.2㎝。外底部に木葉痕がみられる。底部は円筒状をなし、円盤貼り付け状を呈しているが、やゝ高さを増している。外面は丁寧な横方向のヘラ研磨調整。体部は大きく外に張るとみられる。胎土は精製され、きわめて良質である。焼成は良好。色調は内外面共に赤黄色をなす。中壷の底部とみられる。17～20は甕形土器の底部である。17は底部径6.8㎝、安定した平底である。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面は縦方向の細かい刷毛目調整。内面はナデ調整で、コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は外面が黄褐色～赤褐色、二次的に火を受けている。内面は黒褐色をなす。18は底部復原径7.6㎝。底部は円筒状にたちあがり、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面にはやゝ太目の刷毛調整が縦位に施される。胎土には石英・長石の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は外面が白黄色～黄赤色、内面が黄褐色をなす。19は底部復原径7.6㎝。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面は縦位のヘラナデ調整、内面は横ナデ調整である。胎土に石英・長石・金雲母の砂粒を多量に混入している。焼成は良好。色調は内外共に黄褐色をなす。20は底部復原径8.2㎝。安定した平底で、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。外面は細かい刷毛目調整が縦位に施される。内底部はヘラ削り状に調整され、かなり凹凸がある。コゲ付きがみられる。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒が多量混入され、質が良くない。焼成はやゝあまい。色調は外面が褐色、内面が黒褐色をなす。

４．弥生時代中期の住居址（Fig.33）

(1) 住居址（Fig.33）

調査区の東半中央部に検出した住居址である。円形に配置された柱穴が残るのみで、床面や中央部の炉穴、竪穴の掘り方は残っていない。住居址の柱穴と他の遺構の重複関係をみていこう。直接切り合い関係のある遺構は第４号竪穴、第14号竪穴、第５号竪穴である。第４号、14号竪穴の場合、柱穴

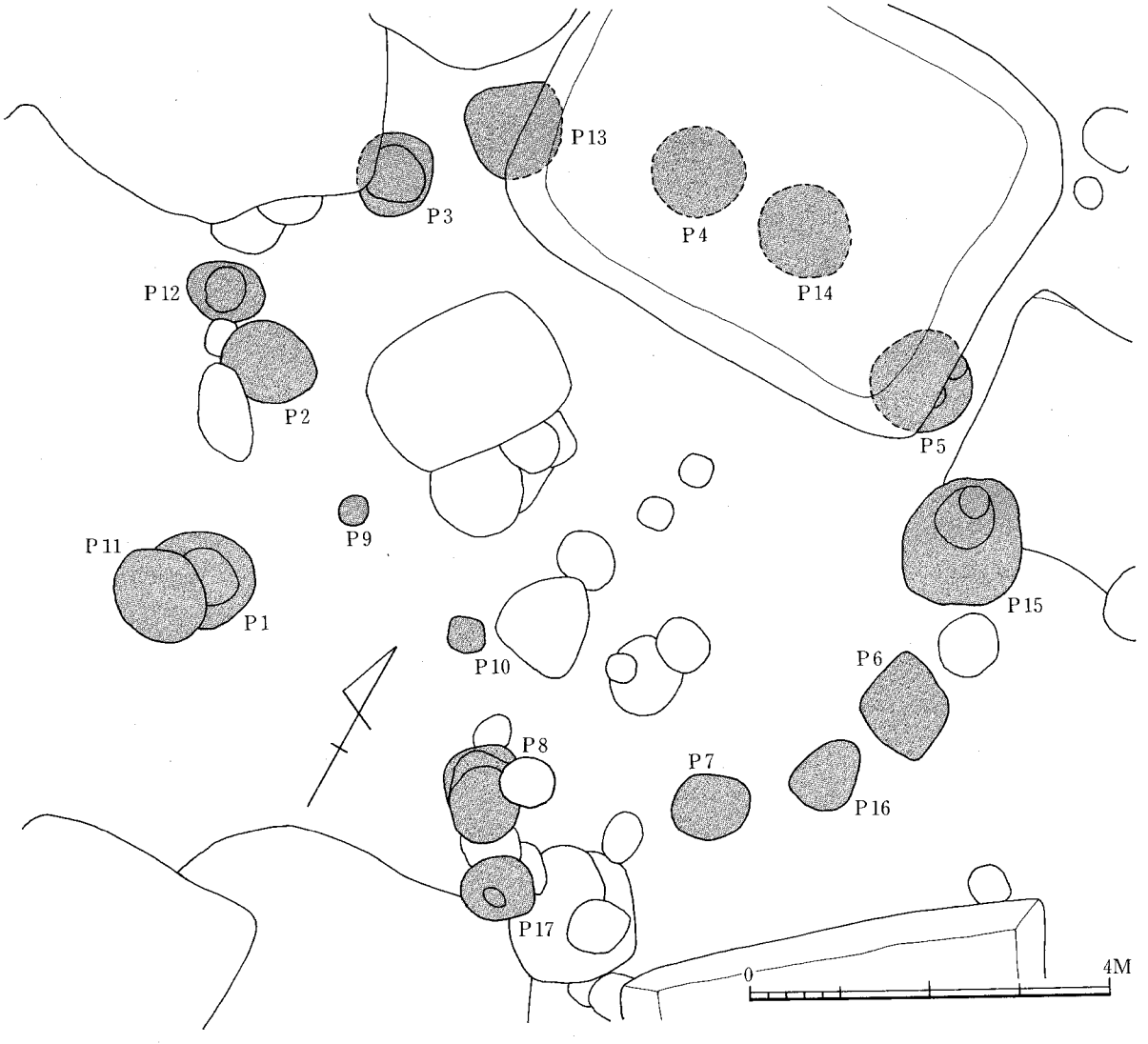


Fig.33　竪穴住居址平面図

を切っており、第５号竪穴の場合は柱穴に切られている。第４号竪穴が中世、第14号竪穴が中期後半、第５号竪穴が前期前半に位置づけられることからすれば、住居址の年代は遺構の切り合い関係から前期後半～中期前半にしぼられてくる。住居址の正確な年代については、柱穴出土の遺物を加えて決定する。なお、住居址の竪穴部を復原すると、第15号竪穴との重複関係も存在することになる。

住居址の柱穴には切り合い関係があり、少なくとも１回の建て直し、ないしは拡張が考えられる。以下、柱穴の組み合せについて詳述する。

第１次住居、Ｐ１～Ｐ１０が組み合うと考えられる。Ｐ１は径70×60㎝、Ｐ２は70×55㎝、Ｐ３は(48×42㎝)、Ｐ４は(60×60㎝)、Ｐ５は(40＋α×16＋α㎝)、Ｐ６は48×46㎝、Ｐ７は42×38㎝、Ｐ８は54×40＋α㎝、Ｐ９は16×16㎝、Ｐ10は20×18㎝、の円形ないしは楕円形をなす。深さは約30㎝程度である。柱穴間は心心で約1.5mを測る。Ｐ１～Ｐ８が主柱穴で、Ｐ９、Ｐ10は出入口に関わる柱穴であろうか。なお、Ｐ１、Ｐ８は第２次住居の柱穴Ｐ11、Ｐ17と重複関係にあり、共にＰ11、Ｐ17にきられているので、第１次住居が先行することがわかる。

第２次住居、Ｐ11～Ｐ17の柱穴が組み合うと考えられる。Ｐ11は径48×56㎝、Ｐ12は44×32㎝、Ｐ13は(47×40㎝)、Ｐ14は(50×50㎝)、Ｐ15は66×68㎝、Ｐ16は32×43㎝、Ｐ17は40×34㎝の円形ないし

は楕円形をなし、深さは30㎝前後である。柱穴間は心心で約1.7mを測る。第１次住居よりは若干大きくなっている。

(2) 出土遺物（Fig.34）

柱穴からかなりの量の土器片が出土しているが、そのほとんどは胴部の小破片である。図化できる３点を示した。

１、２は甕形土器の口縁部破片である。１は復原口径31.6㎝、口縁部は逆Ｌ字形となし、口縁端部は丸くおさめている。口縁内側はわずかに張りだす。体部はやゝふくらむみをもつ。内外面は横ナデ調整が加えられている。胎土には石英・長石の砂粒が多量に混入され、一部に粒の大きい砂粒も含まれ、あまり良質ではない。焼成は良好。色調は外面が黄褐色、内面が赤桃色をなす。２は復原口径19.6㎝。口縁部は端部が突帯状に外にはり出す。口縁上面には平坦面を有する。体部はほぼまっすぐにたちあがっている。器面の状態が悪く、調整痕が不明瞭であるが、内外面共に横ナデ調整と考えられる。胎土には石英・長石のやゝ粒の大きい砂粒が混入されている。焼成はやゝ不良。色調は内外面共に白黄色をなす。３は大壷の底部破片。復原底部径は、14.0㎝を測る。わずかにあげ底状になる安定した平底。体部は大きく外傾しながらたちあがる。内外面共に器面の状態が悪く調整は不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒が多量に混入されている。焼成は良好、色調は外面が黄赤色、内面が黄灰色をなす。

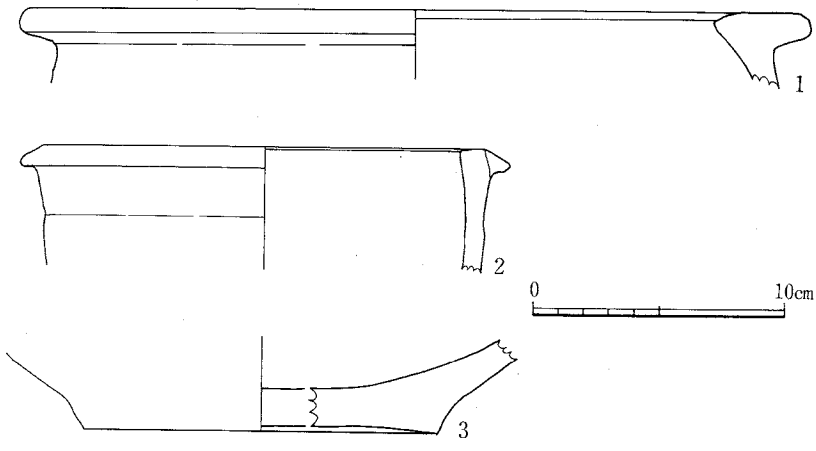


Fig.34　竪穴住居址柱穴出土遺物実測図

５．弥生時代中期の竪穴

３基を確認した。いずれも大型の長方形プランをなす。２基は重複するが、時期的には近い関係にある。以下、各遺構と出土遺物について詳述する。

(1) 第９号竪穴（Fig.35）

調査区のほぼ中央より、やゝ南に検出した竪穴である。第15号竪穴と重複関係にあり、第15号竪穴を切ってつくられている。西側には約0.9m離れて第12号竪穴が位置している。中期の竪穴３基のうち、この一基のみが比較的浅く掘り込まれていて、他の竪穴との間に使用目的の違いがあったと思われる。東西径3.6m、南北径1.7mの長方形プランをなす。壁はわず

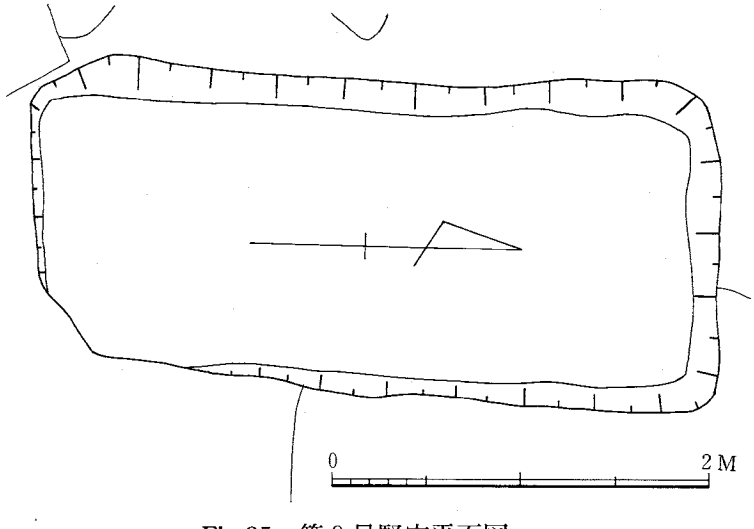


Fig.35　第９号竪穴平面図

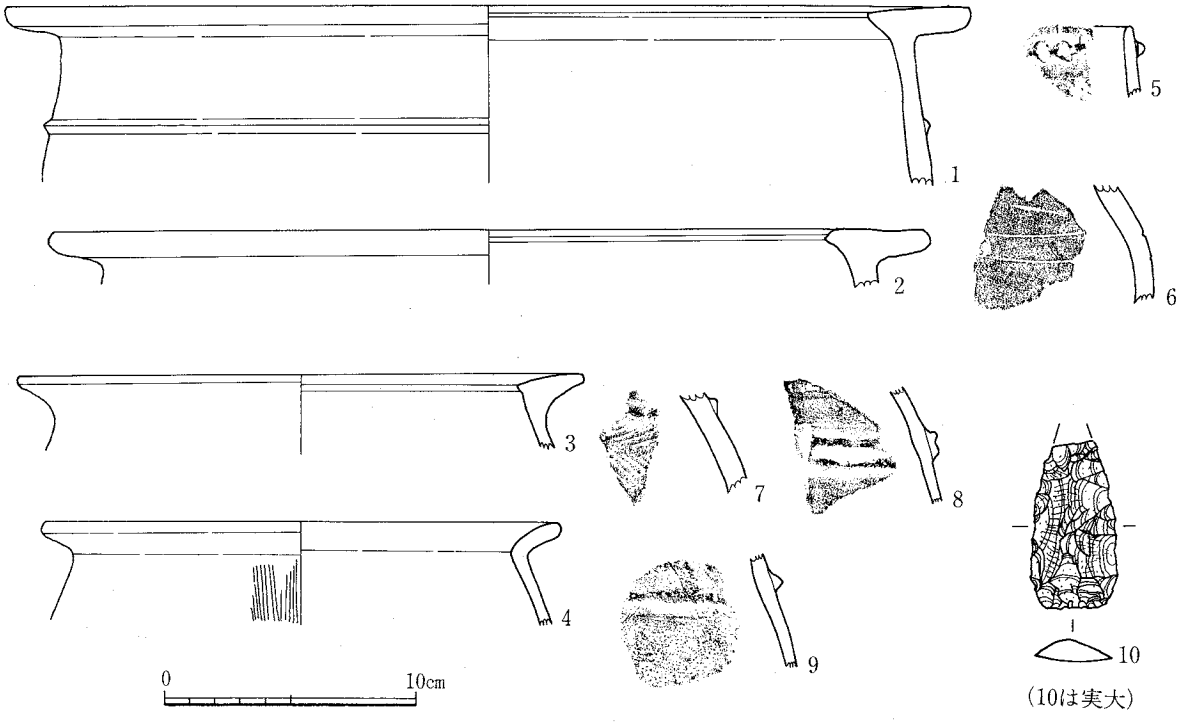


Fig.36　第９号竪穴出土遺物実測図

かに内側に傾斜をもって掘り込まれている。検出時には墓壙かとも考え、精査したが、墓である根拠は見い出すことができなかった。

出土遺物（Fig.36）

竪穴の埋土中からは弥生時代中期の土器をはじめ、後期に下る土器や混入したとみられる前期の土器が相当数出土している。しかし、出土土器の多くは胴部の小破片で図化できるものは極めてすくない。土器以外の遺物として、石鏃、黒曜石片が出土している。

１～３は逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器である。１は復原口径38.4cm、口縁は内側の張り出しも強い。口縁端部は丸くおさめる。口縁下には断面三角形の小さい貼り付け突帯一条がめぐる。内外面は横ナデ調整。胎土には石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良好。色調は外面は黄赤色、内面は白黄色をなす。２も１同様の口縁をもつ。復原口径35.2cm。器面調整は保存状態が悪く不明。胎土には石英・長石・金雲母の砂粒を混入する。焼成はやゝ不良。黄褐色をなす。３は復原口径22.6cm。内側の張り出しはほとんどない。口縁は端部にむかってうすくなり、端部は丸くおさめる。胎土に石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが良質、焼成は良好で、内外面共に桃赤色をなす。４はくの字形の口縁をもつ甕形土器である。口縁端部は丸くおさめ、頸部の稜線は明瞭でない。口縁部から内面は横ナデ調整、胴部外面は縦位の刷毛目調整。胎土に石英・長石の砂粒を混入する。焼成は良く、色調は内外面共に黄赤色をなす。復原口径20.6cm。５は刻目突帯文土器、口縁よりやゝ下った所に刻目突帯一条を貼り付ける。刻目は棒状工具により深く刻まれている。口縁端部は丸くおさめている。外面は横ナデ調整。内面は横方向の貝殻条痕が施される。胎土には石英・長石の砂粒が若干混入される。焼成は良好。外面が褐色、内面が黄褐色をなす。６～９は壷形土器の胴部破片である。６は二条の細かい沈

線をめぐらす。外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され良質、焼成は良好。外面が褐色、内面が黄赤色をなす。7は断面三角形の張り付け突帯一条をめぐらし、その下位に沈線による無軸の羽状文が描かれる。胎土には石英・長石の砂粒が混入される。焼成は良好。色調は内外面共に褐色をなす。6、7は前期の土器である。8はM字突帯一条を貼り付けている。外面は横方向のヘラ研磨調整。胎土は精製され良質。焼成は良好。色調は外面が赤黄色、内面が黒色をなす。9は断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。内外面の調整は土器が磨滅し不明。胎土には石英・長石の砂粒を大量に混入し、不良。焼成は良好。色調は外面が白黄色、内面が黄灰色をなす。10は古銅輝石安山岩を素材とした石鏃、先端部を欠損している。基部は平基で断面は凸レンズ状をなす。長2.2＋α㎝、幅1.15㎝、厚0.32㎝を測る。

(2) 第14号竪穴（Fig.37）

調査区の北東端近くに検出した竪穴である。中期の竪穴住居址と重複関係にあり、本竪穴が住居址を切っている。また、第5号竪穴が東側に、第10号竪穴が西側に接するように位置している。北側のコーナー部分が道路の崖によって一部破壊されているが、ほぼ全形は良好な状態で遺存している。東西径3.44m、南北径2.74mの主軸を東西にとる長方形プランをなす。深さも深く、大規模な竪穴であるが、何のための竪穴かは不明。後述する第15号竪穴と規模も近く、その配置にも規則性があり、今後、注意する必要があろう。

出土遺物（Fig.38・39）

竪穴の埋土中からは多量の土器片をはじとする遺物が出土している。土器は中期土器を主体に一部後期の土器を含む。丹塗り磨研の土器もかなりの量含まれていて注目される。土製品に投弾がある。石器は石包丁、石鏃、石斧、黒曜石石片等がある。

1～7、11は甕形土器である。1はT字形口縁で、体部は大きく外に張り出す。復原口径38.5㎝、口縁端部に凹線がめぐる。2～6、11は逆L字形の口縁、2、3は口縁下に断面三角形の貼り付け突帯一条をめぐらす。2は復原口径37.0㎝、口縁は平坦、3は復原口径34.8㎝、口縁は丸味をもっている。4、5は口縁部内側がわずかに張り出す。4は口縁端部を丸くおさめる。復原口径29.6㎝。5は口縁端部を方形に仕上げる。復原口径28.2㎝。6は口縁内側の張り出しはない。口縁も短かく外にのび、端部は丸くおさめている。復原口径27.4㎝。7は口縁がやゝくの字形にたちあがる。端部は丸くおさめる。頸部は強い横ナデで凹み、口縁から内側にかけては横ナデ調整である。外面には縦位の刷毛目調整が施される。復原口径

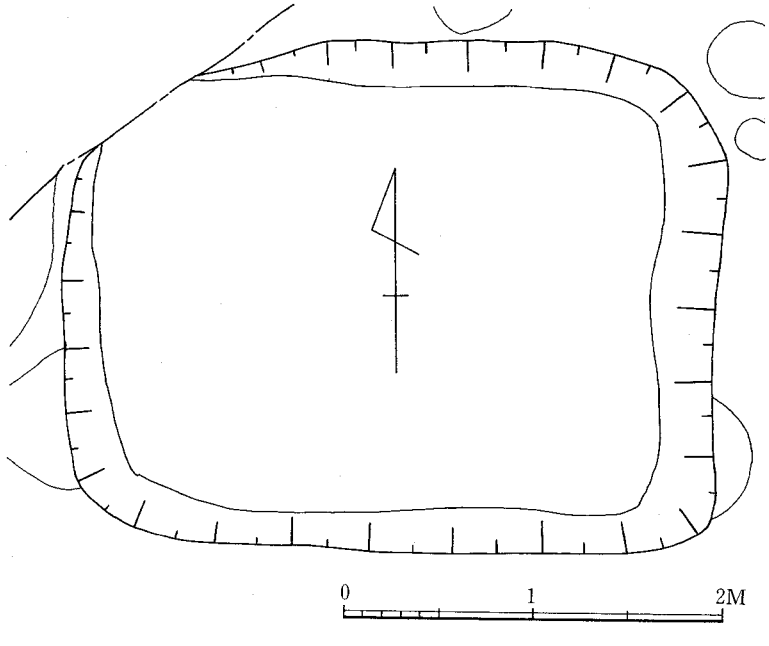


Fig.37　第14号竪穴平面図

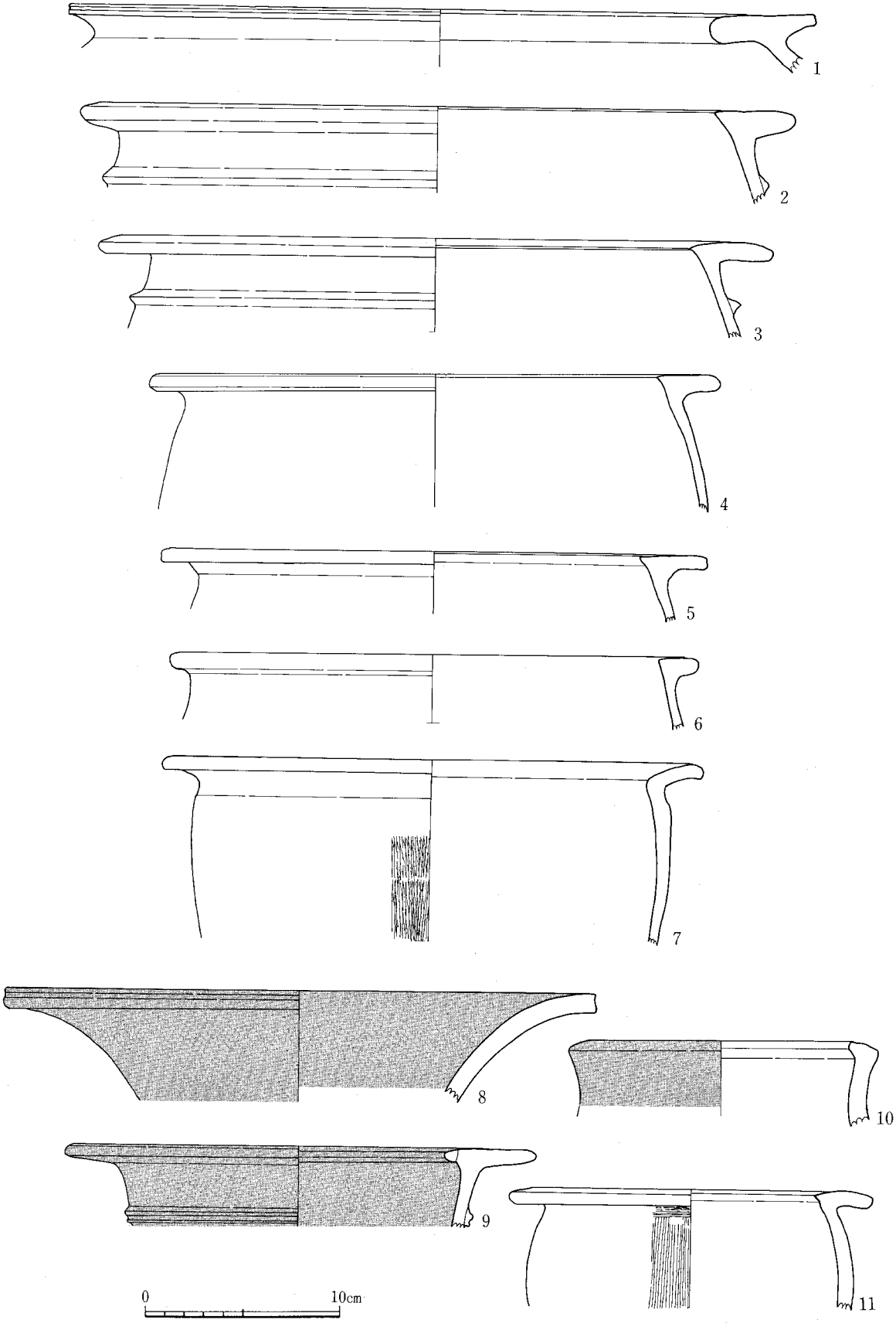


Fig.38　第14号竪穴出土遺物実測図Ⅰ

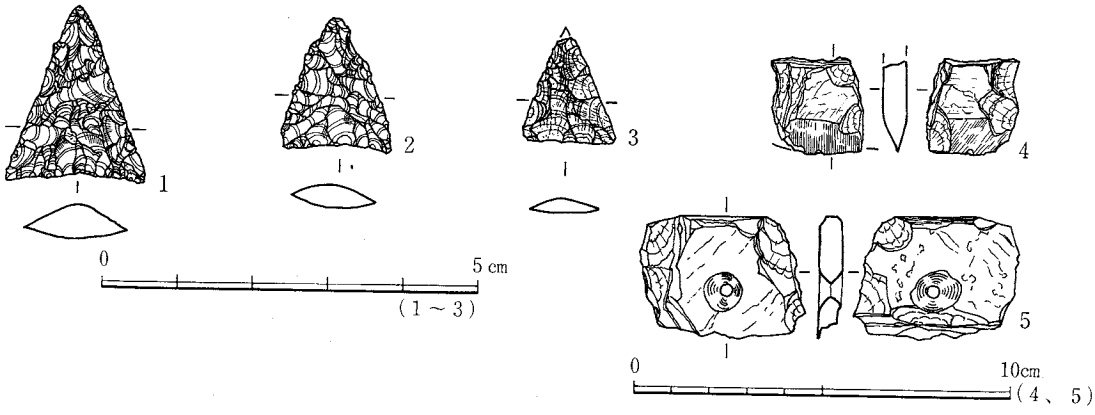


Fig.39　第14号竪穴出土遺物実測図Ⅱ

28.0㎝。11はやゝ小型の甕形土器である。口縁はやゝ丸味をもち、端部は丸くおさめる。口縁部から内面にかけては横ナデ調整。胴部外面は縦位の丁寧な刷毛目調整。復原口径18.8㎝。甕形土器の胎土は２が精製され、きわめて良質、１、５、６、７が石英・長石の砂粒を混入し、３、４、５、11が石英・長石・金雲母の砂粒を混入するが、全体に良質である。焼成はいずれも良好。８～10は壷形土器。８は広口壷、復原口径30.4㎝。器面がやゝ磨滅しているが、元来は丹塗り磨研土器で暗文の痕跡が残っている。９はＴ字形口縁、口縁下にＭ字突帯一条をめぐらしている。丹塗り磨研であるが、表面の保存状態が悪い。復原口径24.4㎝。10は口縁部が内側に張り出す。外面は丹塗り磨研である。復原口径16.0㎝。胎土は９が精製され、極めて良質。８、10は石英・長石・金雲母の細かい砂粒を混入するが良質。焼成は良好である。

石器は石鏃３点、石包丁２点を図示した。１～３が石鏃、１、２は黒曜石、３は古銅輝石安山岩を素材としている。いずれも両面から丁寧な押圧剥離を加えて整形している。形態は三角形で基部は平基。断面は凸レンズ状をなす。１は長2.35㎝、幅1.85㎝、厚さ0.5㎝、２は長1.8㎝、幅1.5㎝、厚さ0.35㎝、３は長1.5＋α㎝、幅1.25㎝、厚さ0.2㎝を測る。４、５は石包丁。共に凝灰岩を素材としている。４は刃部破片、５は背部の破片で一孔を穿つ。

(3)　第15号竪穴（Fig.40）

調査区の中央より、やゝ東側に検出した竪穴である。第９号竪穴と重複関係にあり、第９号竪穴に切られている。また、直接の切り合い関係は確認できないが、その位置関係から、中期の住居址との重複関係があったことが考えられ、中期の住居址を切っていた可能性が強い。東側には、近世の防空壕が位置している。第14号竪穴同様に大規模な竪穴である。時期的にも同時期と考えられる。

東西径2.72m、南北径3.0mの方形に近いプランである。壁はほとんど垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは１m以上である。床面は

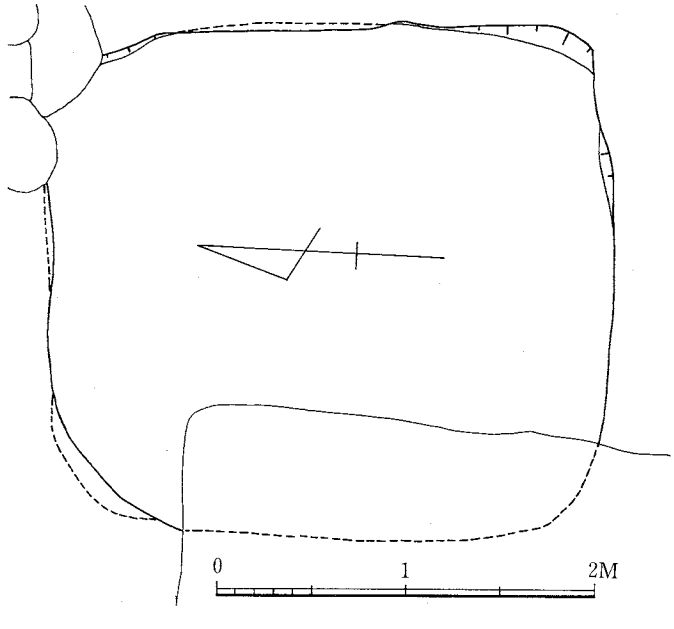


Fig.40　第15号竪穴平面図

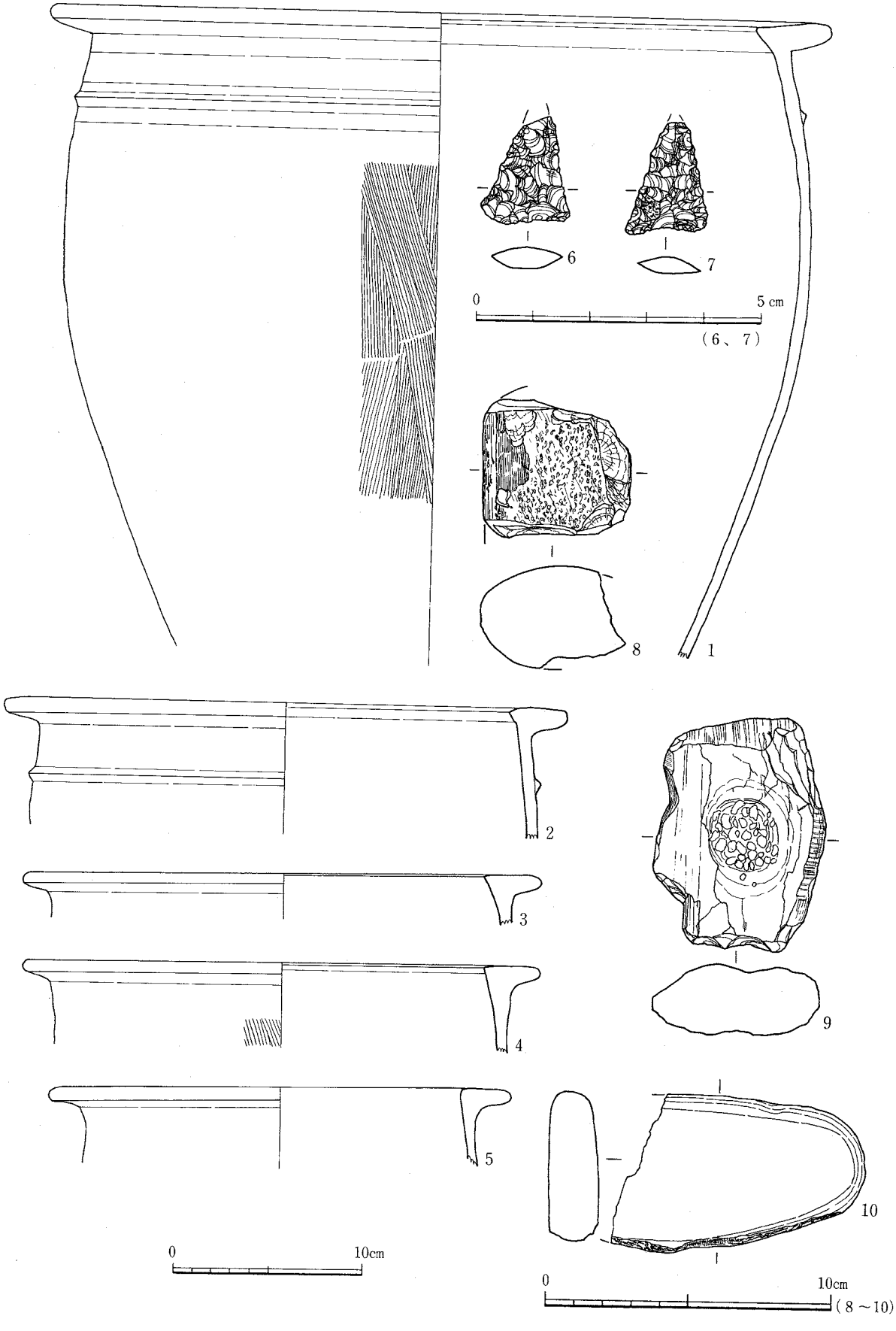


Fig.41　第15号竪穴出土遺物実測図

平坦である。

出土遺物（Fig.41）

竪穴の埋土中からは多量の土器片をはじめとする遺物が多量に出土している。土器は中期土器が主体で、中には底部を欠くものの、ほぼ全形を知ることのできる大甕等も含まれている。石器には石鏃、磨製石斧、凹石、叩石、黒曜石片等がある。

１～５は逆Ｌ字形の口縁をもつ甕形土器である。１は大甕、復原口径41.4㎝。口縁部の内側の張り出しはやゝ大きい。口縁部は大きく外に張り出し、端部は丸くおさめている。口縁下に断面三角形の小さな突帯一条をめぐらしている。突帯より上位、内面にかけては横ナデ調整、胴部は縦位の刷毛目調整である。２も１とほぼ同様の器形をなすが、やゝ小型である。復原口径29.8㎝。器面の調整は１と同様であるが、残存状態が悪く不鮮明である。３～５は口縁部の内側の張り出しはみられない。共に口縁端部は丸くおさめている。４は胴部に縦位の刷毛目調整がみられる。胎土は、１、４は石英・長石・金雲母の砂粒を混入し、２、３、５には石英・長石の砂粒を比較的多量に混入している。焼成は良好。３は二次的に火を受け桃色に変色している。

石器は５点を図示した。６、７は打製石鏃である。共に黒曜石を素材としている。両面から丁寧な押圧剥離を加え、整形している。三角形で基部は平基である。先端部を欠損する。断面は共に凸レンズ状態をなす。６は長1.9＋α㎝、幅1.6㎝、厚さ0.4㎝、７は長2.3＋α㎝、幅1.4㎝、厚0.35㎝を測る。８は玄武岩の磨製石斧の頭部近くの破片である。全体に丁寧な敲打を施し、側面を中心に研磨が加えられている。今山産の太形蛤刃石斧と考えられる。現存長5.0㎝、現存幅5.2㎝、厚さ3.7㎝を測る。９は緑色の変岩系の石材を素材としている。側面は条線状の打痕によって整形され、特に左側面は抉り状に加工されている。下方には整形痕がなく折れたものであることを考えると、石斧等の他の石器の素材として準備されたものとみることができる。破損によって凹石に転用されたものであろう。表裏面の中心に敲打による凹部ができているが、敲打痕が顕著に残り、普通にみられる凹石とは若干異なっている。長7.4㎝、幅6.1㎝、厚さ2.6㎝を測る。10は花崗岩の扁平な円礫を利用した叩石である。側面の一辺に敲打痕が顕著に認められる。半折している。長９＋α㎝、幅5.7㎝、厚さ1.8㎝を測る。

６．中世の遺構

中世の遺構には地下式横穴と不整形の土坑数基がある。

(1) 地下式横穴（Fig.42）

調査区の中央部北端に検出した遺構で、発掘当初は他の竪穴と同様とみて、第４号竪穴としている。約半分が道路の下になっている。第10号竪穴、中期の竪穴住居址の柱穴と重複関係にあり、いずれの遺構も切っている。

地下式横穴は竪坑部と玄室部に分かれているが、玄室部は天井部が崩落し

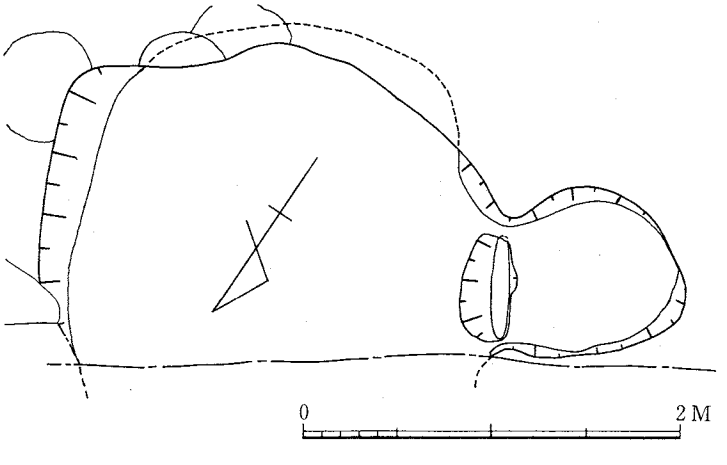


Fig.42　地下式横穴平面図

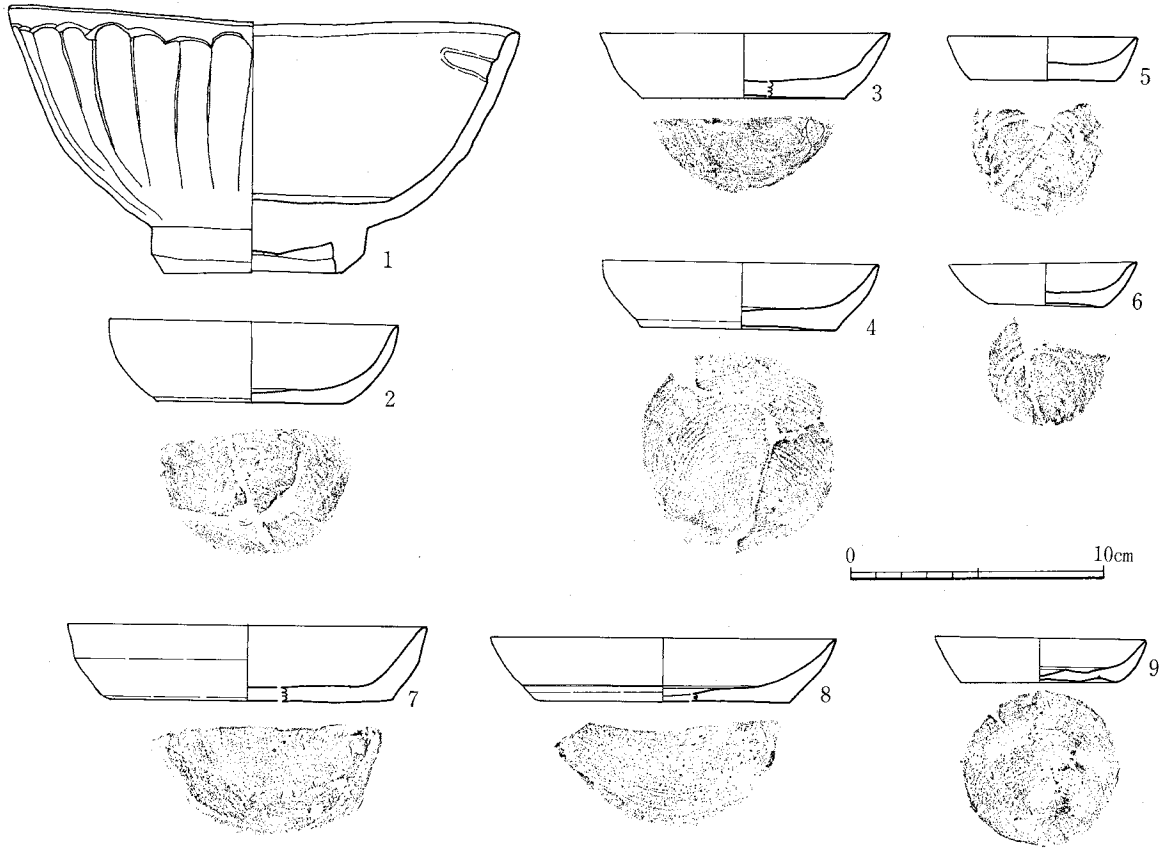


Fig.43　地下式横穴出土遺物実測図

ている。竪坑部は東西径約100㎝、南北径90㎝の楕円形プラン。壁はわずかに内側に傾斜をもっている。床面は平坦である。竪坑部と玄室の境には長さ57㎝、幅30㎝の長楕円形の穴が掘られ、この部分に閉塞があったことがうかがえる。玄室部は東西径2.4m、南北径1.8＋αmの楕円形をなす。床面は平坦である。玄室部より青磁器、土師器、北宋銭（元豊通宝）が出土しており、この遺構の性格として墓の可能性がきわめて高いと考えられる。

出土遺物（Fig.43－１～６）

埋土中から弥生式土器をはじめとする多量の遺物が出土しているが、いずれも流れ込みによるもので、この遺構に伴う出土遺物は青磁器１点、糸切りの土師器、宋銭３枚である。いずれも副葬品と考えられるものである。

１は青磁器の椀である。口径20.4㎝、高台径7.0㎝、器高10.0㎝、２～６は土師器の皿で、いずれも糸切り底である。保存状態が悪く、完形を保つものはない。10点前後が存在したものと考えられる。宋銭はいずれも、「元豊通宝」で、初鋳は1078年である。

(2)　その他の遺構

その他、中世遺構とみられるのが、第７、８、22号竪穴である。いずれも、１m前後の楕円形の土坑で、その性格は明らかにできなかった。出土遺物には、Fig.43－７～９の糸切り底の土師器皿がある。7～9は第22号竪穴の出土遺物である。

第４章　調査のまとめ

１．弥生時代の遺構について

Ｆ－６ａ調査区は板付中央台地の環濠の南側に位置し、旧地形が最も良く残っているところである。とはいえ、中期の竪穴住居址は壁は全く残存せず、柱穴が残るのみであり、かなりの削平が考えられる。

本調査区で検出した遺構は弥生時代前期前半の貯蔵穴13基、中期の土坑３基、中期の住居址一棟（建て替えあり）である。貯蔵穴はその大部分が前期初頭～前半に属し、第17号竪穴のみが前期後半に属する。各貯蔵穴をまとめると次表のようになる。

第１表

号　数	平面プラン	断面形　床面規模	出　土　遺　物	時期	備　考
第１号竪穴	長方形	袋状 160＋α×80＋α	刻目突帯文土器、板付Ⅰ・Ⅱ式	前期	
第２号竪穴	長方形	垂直 255×170	刻目突帯文土器、磨製石斧、スクレイパー	前期	
第３号竪穴	円　形	袋状 130×85＋α	第１号竪穴と同一	前期	
第５号竪穴	長方形	袋状 260×170	刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器	前期	踏台あり
第６号竪穴	長方形	袋状 175×160	刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器	前期	
第10号竪穴	円　形	袋状 165×(165)	刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器	前期初	
第11号竪穴	長方形	袋状 255×180	刻目突帯文土器、板付Ⅰ・Ⅱ式土器、石鏃、スクレイパー	前期初	二段掘り
第12号竪穴	円　形	袋状 145×132	刻目突帯文土器、板付Ⅰ式土器	前期初	柱穴あり
第13号竪穴	方　形	袋状 180×210	刻目突帯土器、板付Ⅰ式土器、石包丁、石鏃、砥石、勾玉	前期初	
第16号竪穴	楕円形	袋状 360×265	刻目突帯文土器、板付Ⅰ・Ⅱ式、砥石、石包丁、中期土器	前期初	柱穴あり
第17号竪穴	円　形	垂直 155×(155)	板付Ⅱ式土器	前期後	
第18号竪穴	長方形	袋状 190×135	刻目突帯文土器、板付Ⅱ式土器	前期初	
第21号竪穴	長方形	袋状 215×(195)	板付Ⅰ・Ⅱ式土器、後期土器	前期初	

形態的には長方形が多く、円形プランをもつのは第３・10・12・17号竪穴の４基である。長方形、方形プランの貯蔵穴が古く、円形プランに移る編年観は本調査区においても妥当性のあるものである。出土遺物は大部分が土器の小片で、貯蔵穴の廃棄後に流れ込んだものであり、土器の完形品が床面に存在するなどの貯蔵穴の使用を示すような状況はみられない。ただし、かなりの貯蔵穴から炭化米が出土していることは、貯蔵穴のあり方、使用に関連して注意する必要があろう。数は多くないが、貯蔵穴内に収穫された籾が火事にあい炭化した状況で多量に出土する例があるが、本貯蔵穴から出土する炭化米は、そうした火事によって生じたものでないことは、出土状況からもうなづける。このような状況がどうして生じるかは、今後の検討が必要であるが、私は穂から籾を脱穀するのに、麦と同様の焼落し法が採用され、その結果、一部の失敗によって生じた炭化米が貯蔵穴周辺に落ちていて、それが貯蔵穴の廃棄に伴い流れ込んだものと考えている。また、いずれの貯蔵穴からも壁体と考えられる焼土塊が少なからず出土している。貯蔵穴の壁に貼り付けられたものか、あるいは住居址に伴うものか判断に苦しむが、注目すべき遺物である。話を変えて、貯蔵穴の分布を見ると興味ある事実が浮かびあがってくる。調査区内での分布は、先に指摘したように、ある一定の広場を囲むように環状の分布を見せる。しかしながら、隣接する調査区の成果をとり入れると、環状に分布するのは極部的な

見せかけであり、実際には、貯蔵穴の集中区と遺構のない空間とに区分される。集中区の貯蔵穴は10基前後から構成されると考えられ、相互に切り合うことは極めて少ない。本調査の成果からすれば、相近接する貯蔵穴は時期的にも同時か、きわめて近接していることが指摘できる。貯蔵穴集中区と広場的空間は対になって存在し、広場は貯蔵穴と関連した作業場としての位置づけが可能である。また、これらの貯蔵穴群が環濠のすぐ南側に位置し、環濠の出入口に近いことから、日常的な使用に供されたと考えられる。板付遺跡の台地上には大きく4ケ所に貯蔵穴群が存在することは、第2章3節で既に指摘したが、それぞれの貯蔵穴には使用目的の違いがあったことがわかる。正確な性格づけは、個別の貯蔵穴の検討を経た上で改めて考えることにしたい。

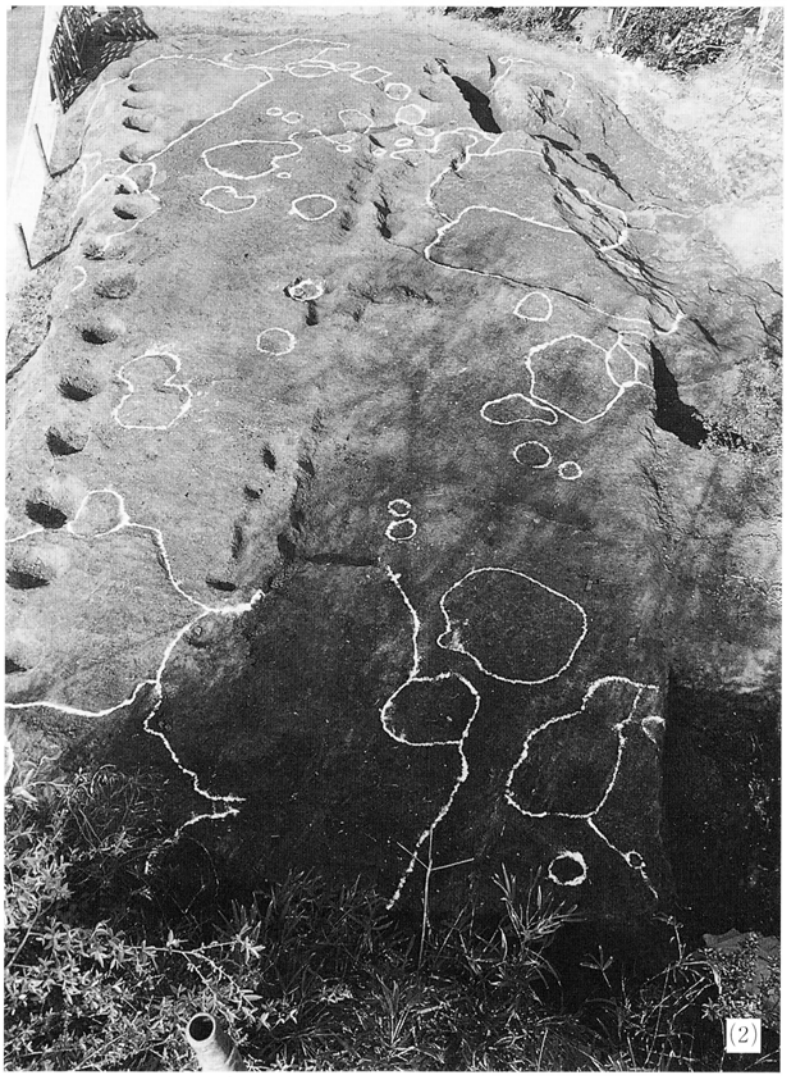
次に中期の住居址と竪穴について若干ふれておきたい。中期の住居址を残すのみで残存状態が悪いが、中期の典型的な住居址である。これまで板付遺跡で発見されている中期の住居址は環濠の北と南側の二ケ所に分かれている。北側で3基、南側で本例も含めて5基が発見されている。北側は台地の斜面にあたっているため南側に比較して保存状態良好である。規模も大きく径9m前後で、うち2基は方形の濠に囲まれていた可能性が強い。南側ではいずれも台地端の斜面にかろうじて遺存しており、本例同様に柱穴の分布によってのみ、その存在を知ることができる。いずれも、台地の削平が著しいことを示しており、削平されて消滅した住居址はかなりの数にあがると思われる。井戸の分布からみて、中期の住居址は環濠部分から南側にかけての全面に分布していたと考えられる。どうにか、中期の集落の様相もわかってきた。

2．地下式横穴について

本調査区で地下式横穴1基が確認された。玄室天井部が崩落し、玄室内は大きく撹乱している。竪坑と玄室の間には床面に溝が掘り込まれ、閉塞の状況を示していると考えられる。玄室内から多量の遺物が出土しているが、大部分は流れ込みによる遺物である。この遺構に確実に伴うものは、青磁器碗、糸切り底の土師器坏、元豊通宝などがあり、この遺構の時期が14世紀にあることを示している。また、これらの遺物は種類からみて埋葬に伴う副葬品と考えられ、地下式横穴が墓であった可能性を示している。板付遺跡では、本例の他、隣接する県道部分の調査で1基、F－7a区で2基の計3基が調査されている。県道発見の地下式横穴には、本例と同様に、竪坑と玄室の間に閉塞のための掘り込みがみられる。F－7a区の第1号地下式横穴では玄室内に屍床状の施設がつくられ、鉄器1点が出土し、第2号地下式横穴からは、糸切りの土師器坏が出土している。以上の4基の地下式横穴は比較的近距離に存在し、その遺構や副葬品と考えられる出土遺物から墓である可能性は強い。今後、さらなる検討が必要であろう。

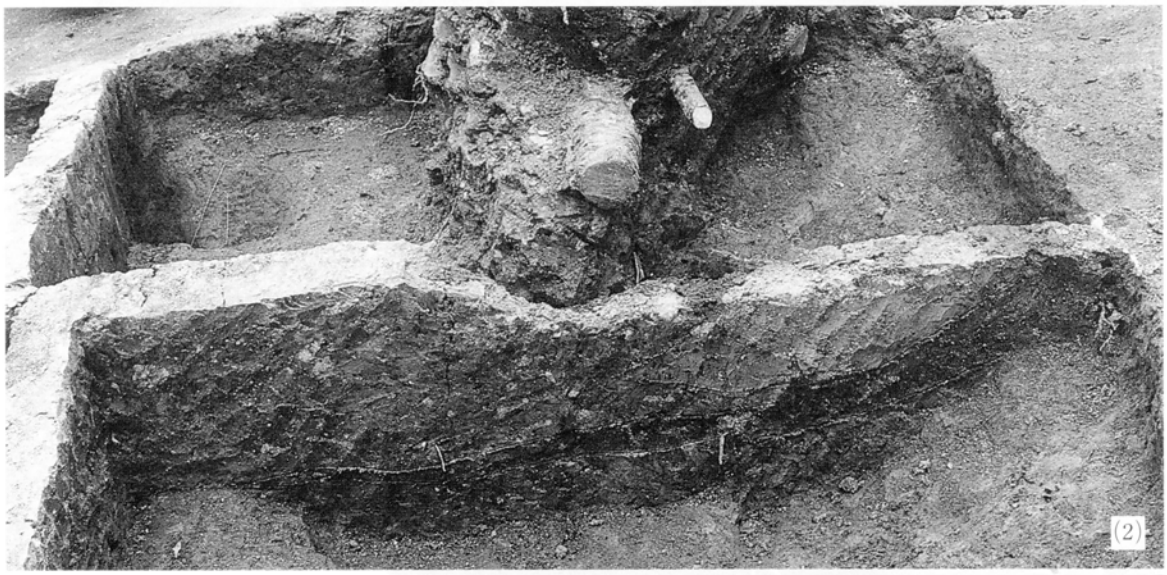
図　　版
PLATES

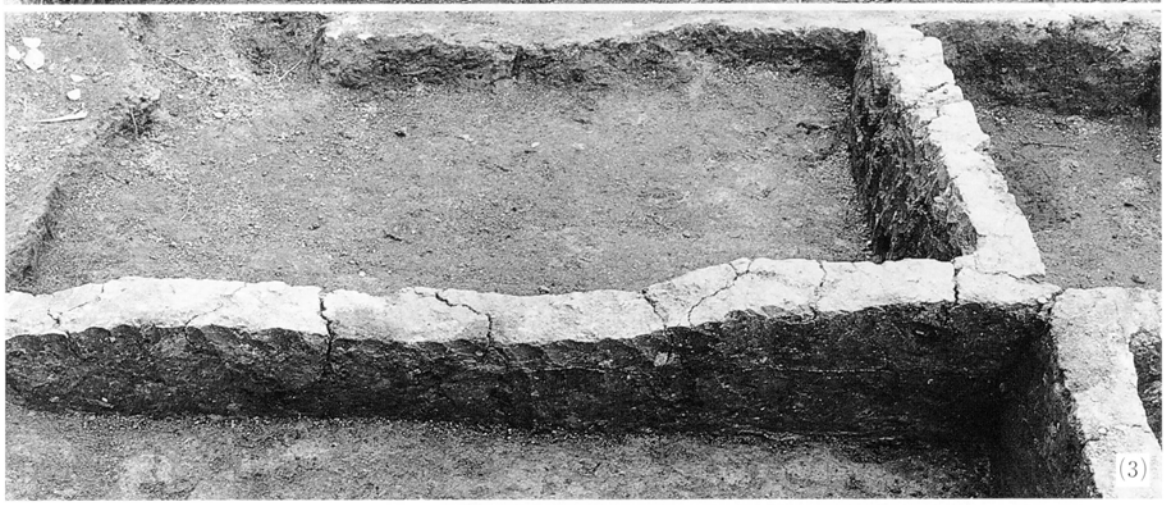
(1)　F－6 a区全景
（北より）



(2)　F－6 a区全景
（西より）

PL. 2

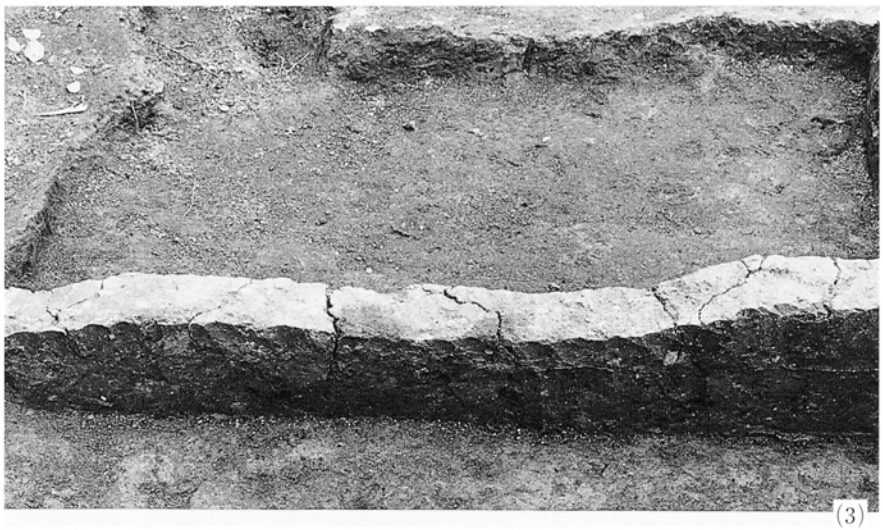




(1) 第２号竪穴　(2) 第２号竪穴横断面東側　(3) 第２号竪穴横断面西側

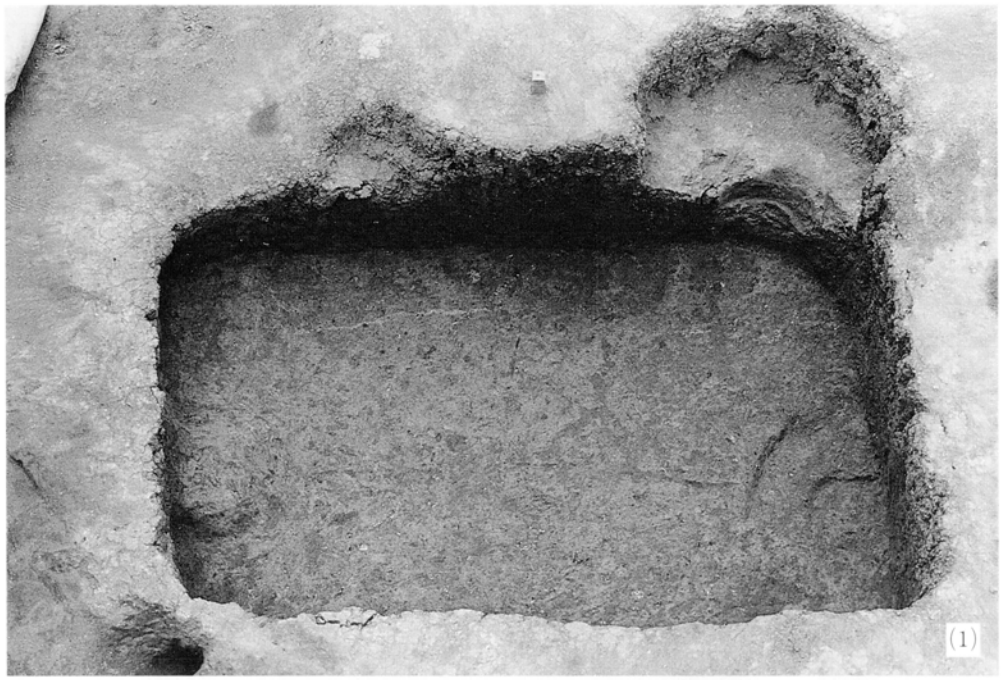
(1) 第２号竪穴横断面
南側

(2) 第２号竪穴横断面
北側



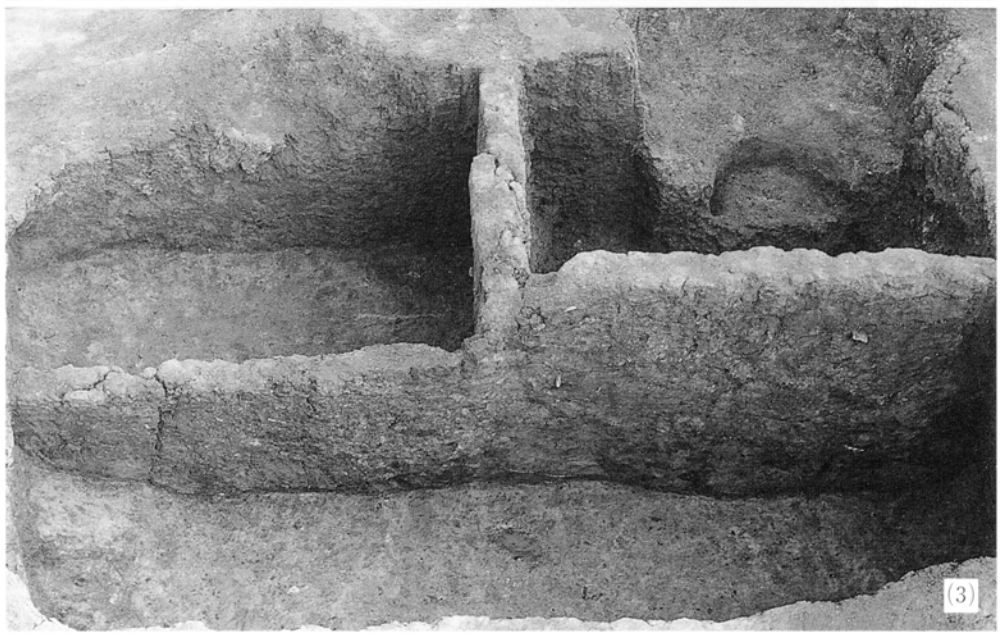
(3) 第12号竪穴

PL. 4



(1) 第５号竪穴
（平面）

(2) 第５号竪穴
（北より）

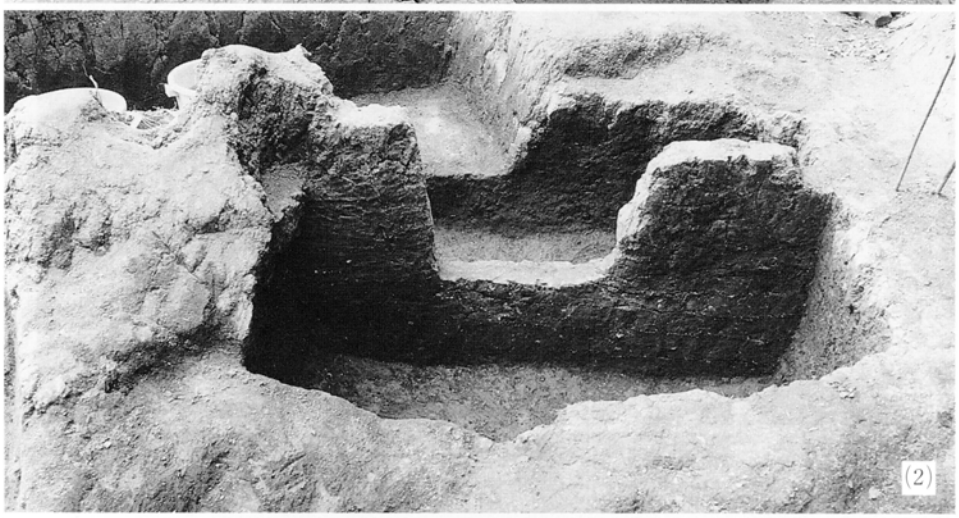


(3) 第５号竪穴
（北より近景）

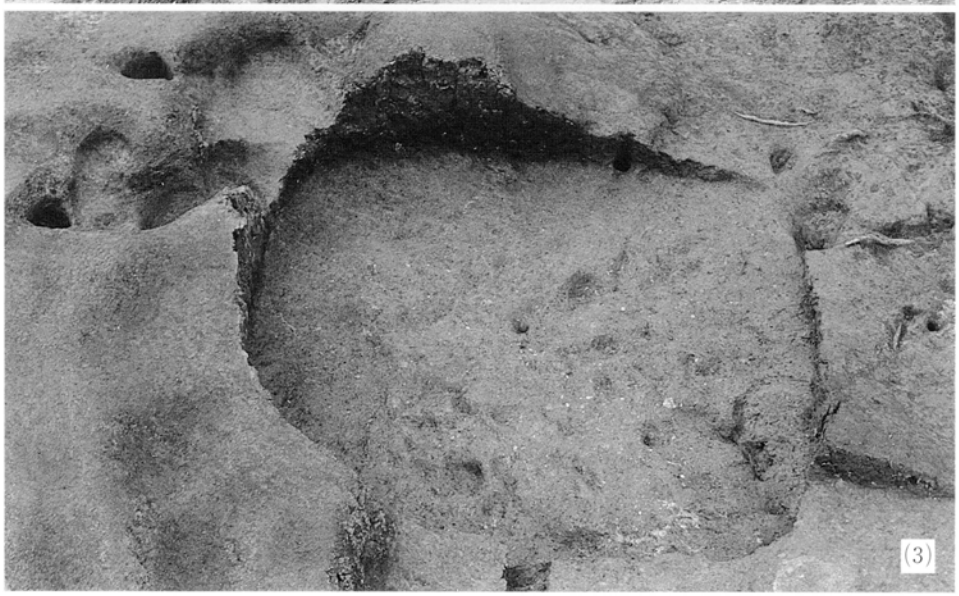
(1) 第９号竪穴（平面）　(2) 第９号竪穴横断面　(3) 第１・３号竪穴断面

PL. 6

(1) 第11号竪穴

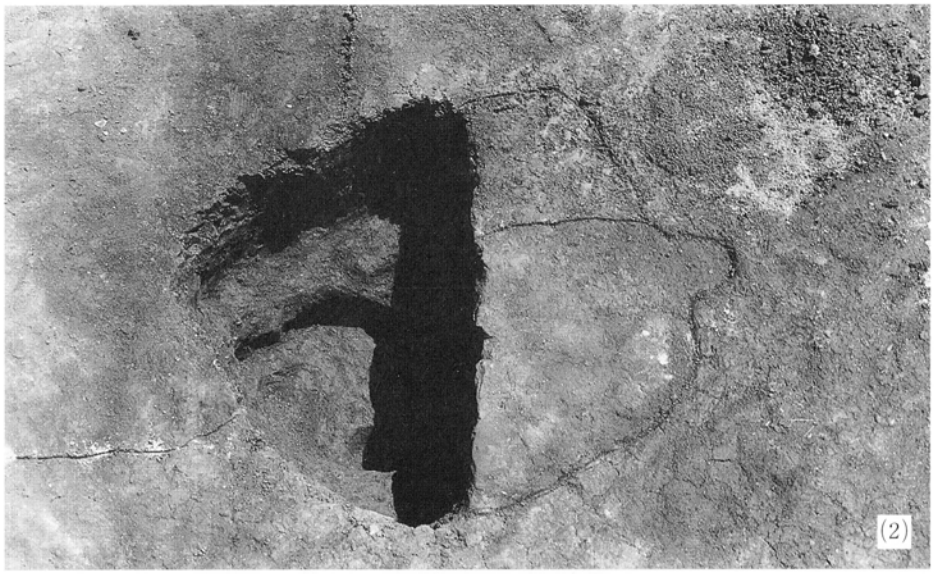


(2) 第 6 号竪穴
横断面



(3) 第15号竪穴

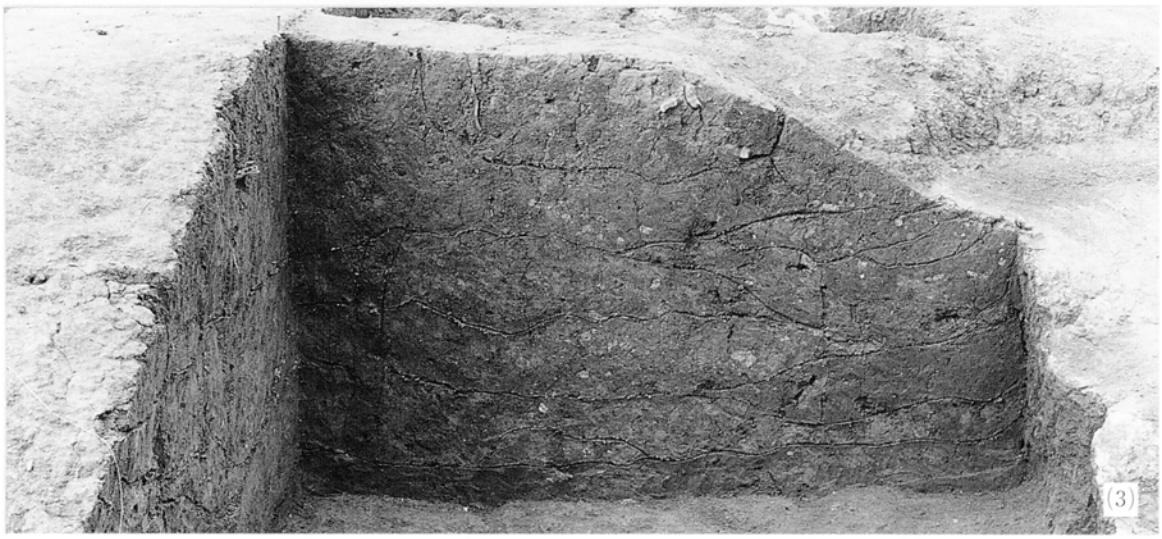
(1) 第21号竪穴
断面



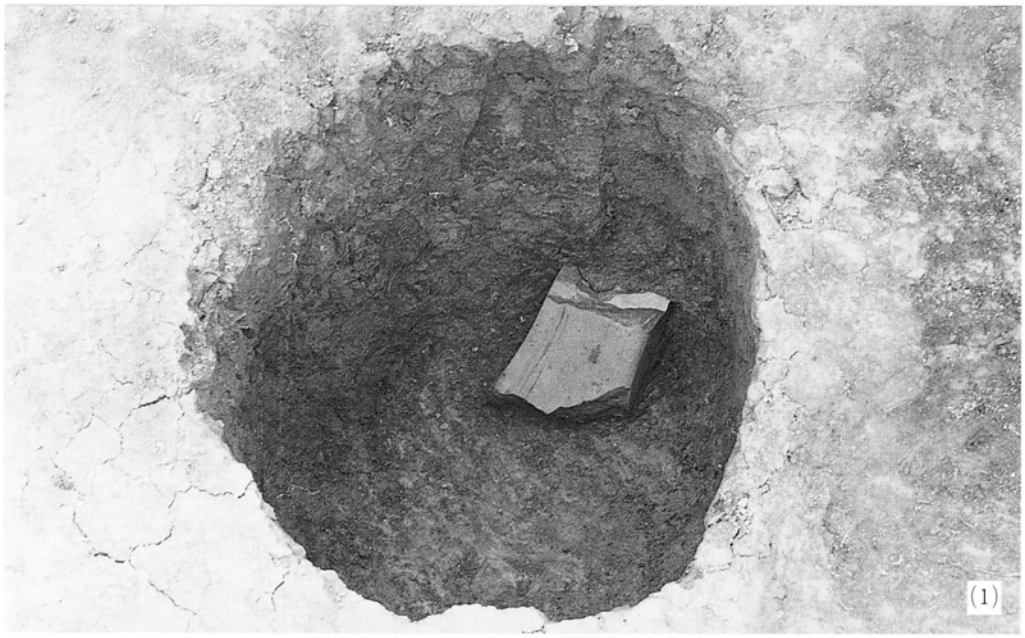
(2) 第７号竪穴

(3) 第16号竪穴
断面

PL. 8



(1) 第14号竪穴全景　(2) 第14号竪穴縦断面南側　(3) 第14号竪穴縦断面北側

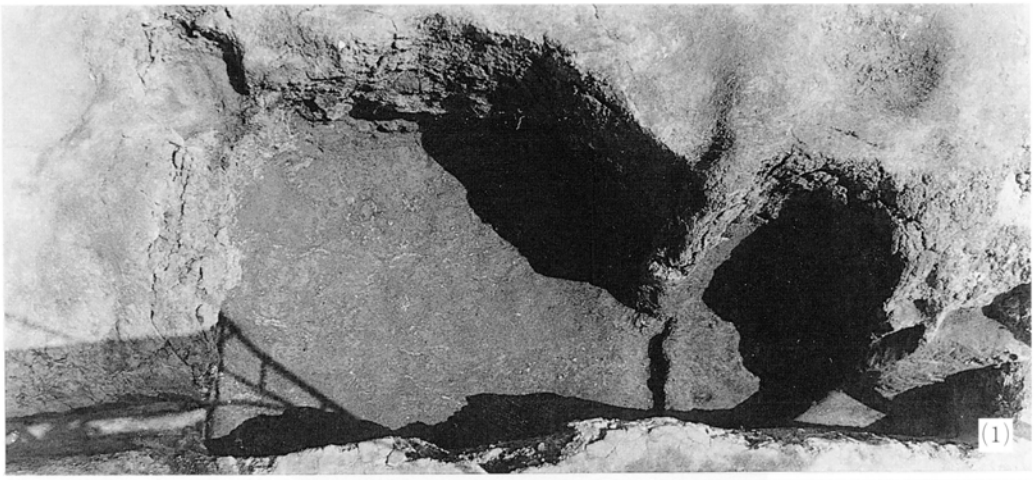


(1) 柱穴内
遺物出
土状況

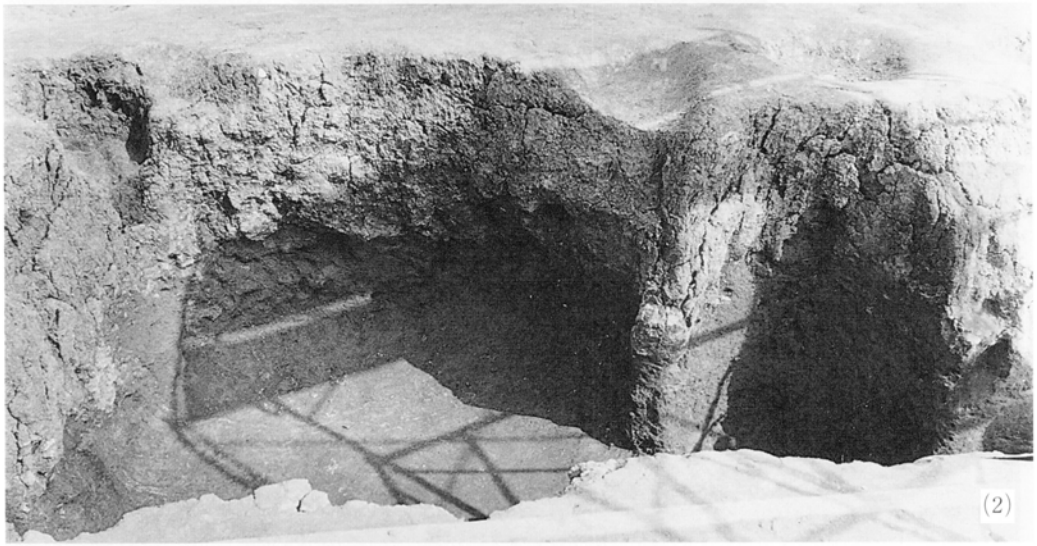
(2) 第21号
竪穴

(3) 第36・
37号
竪穴

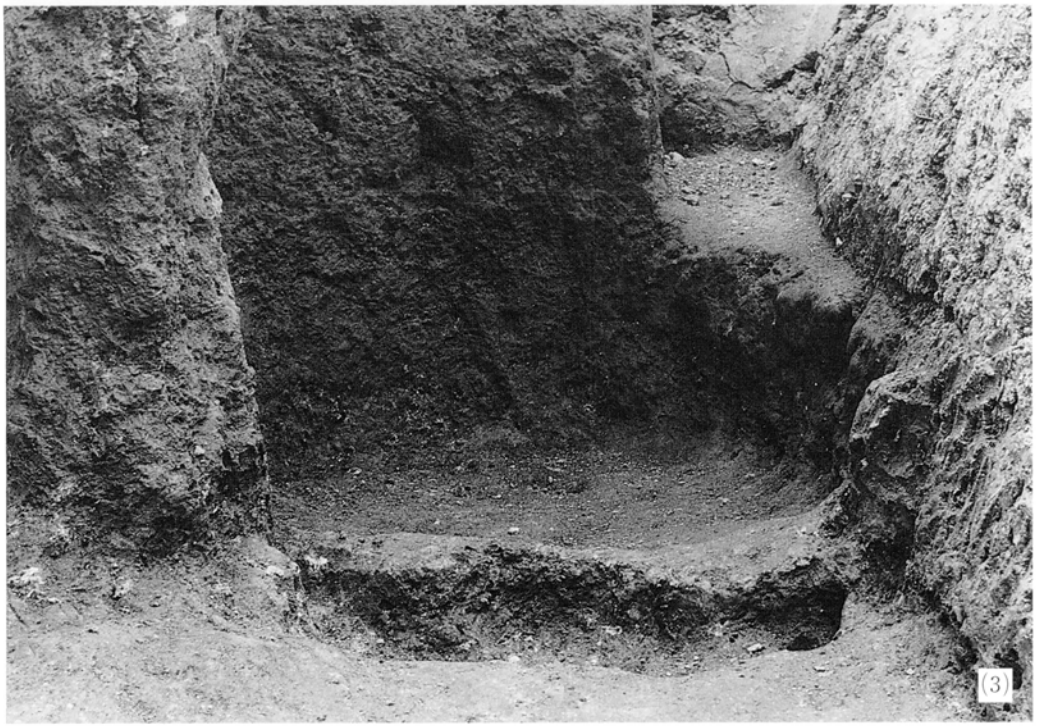
PL.10



(1)　地下式横穴
(断面)



(2)　地下式横穴
(断面)

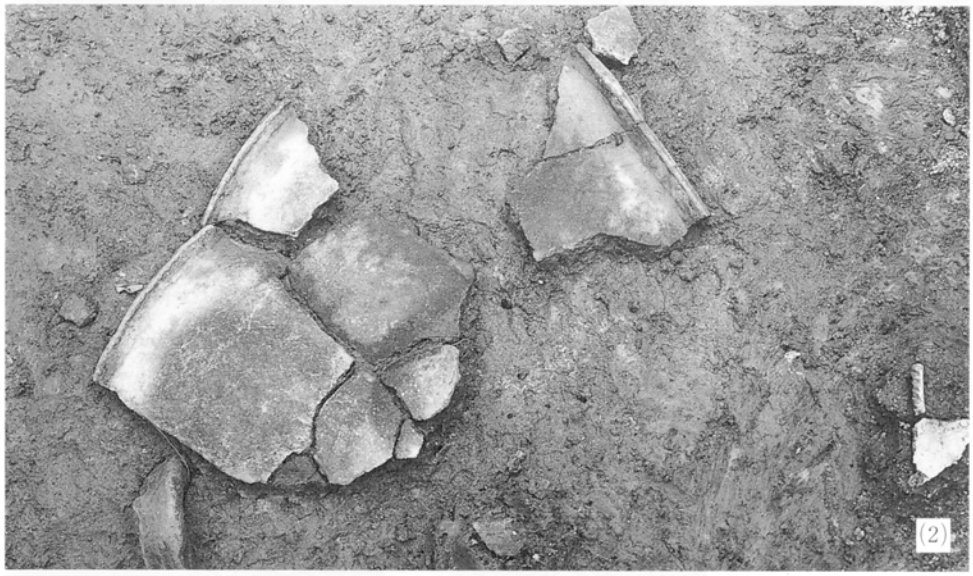


(3)　地下式横穴
(玄室から竪坑を
のぞむ)

(1)　地下式横穴横断面　　(2)　地下式横穴発掘状況　　(3)　銅銭出土状況

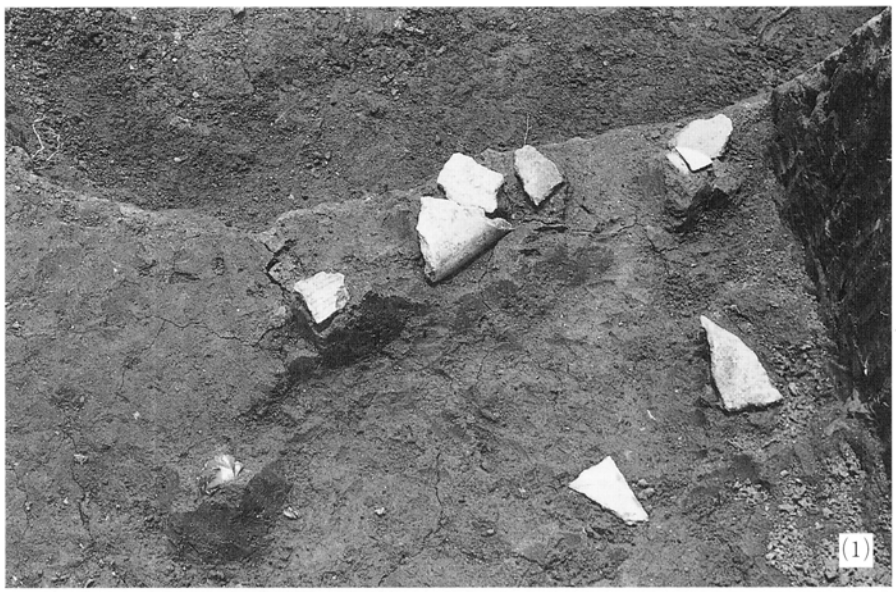
PL.12

(1) 第11号竪穴
遺物出土状況



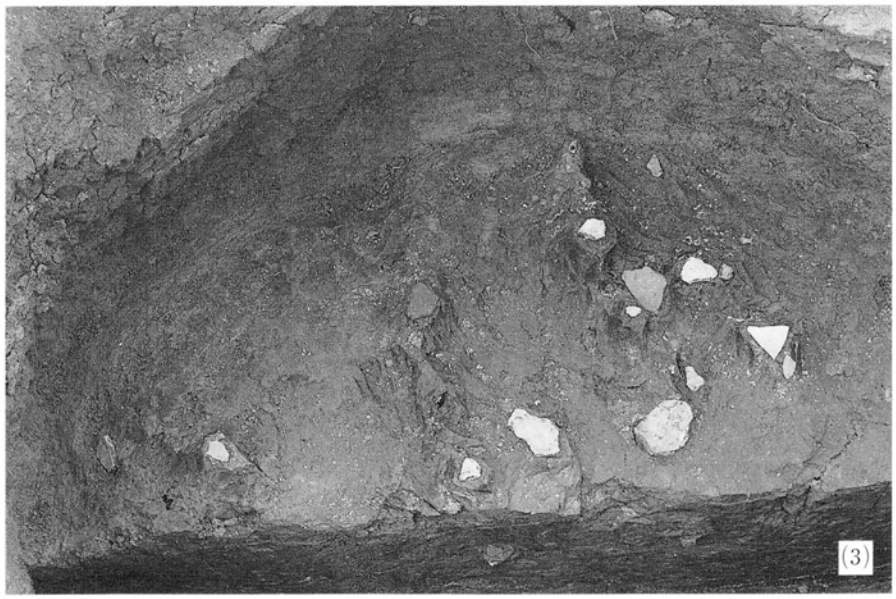
(2) 第11号竪穴
遺物出土状況
近景Ⅰ

(3) 第11号竪穴
遺物出土状況
近景Ⅱ



(1) 第12号竪穴遺物
出土状況

(2) 第12号竪穴遺物
出土状況



(3) 第12号竪穴遺物
出土状況

PL.14

(1) 第５号竪穴遺物
出土状況

(2) 第５号竪穴遺物
出土状況

(3) 第16号竪穴遺物
出土状況

(4) 第12号竪穴遺物
出土状況

(1) 第14号竪穴遺物
出土状況

(2) 第14号竪穴遺物
出土状況近景

(3) 第14号竪穴遺物
出土状況近景

PL.16

(1)　発掘風景Ⅰ

(2)　発掘風景Ⅱ

(3)　発掘風景Ⅲ

福　岡　市
板付周辺遺跡調査報告書第23集

— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第716集 —

2002年（平成14年）３月29日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　　刷　新交社印刷所
福岡市中央区地行１－11－３